
幻想 《ファンタジア》

高瀬 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想 《ファンタジア》

【Nコード】

N5177S

【作者名】

高瀬 悠

【あらすじ】

故郷から、はるか彼方 天空へ。

十六歳の少女ミリアーノは、死んだ母の夢をきっかけに母の形見である魔法の道具を持って、空に浮かぶ神々の島へ行くことを決意する。そこで開かれる年に一度の世界大会。それに参加しようと思気込むミリアーノだったのだが、とある人物達との出会いが彼女の運命を大きく変えていく。

紡ぎ行く運命が織り成す、爽快冒険ファンタジー。

序章（前書き）

序章

新緑生い茂る深い森の奥に、その泉はあつた。

「案内してくれてありがとう、島の精霊さんたち」

背中に羽根の生えた二匹の人型の精霊に礼を言つて、幼い少女は「この場所ね」と呟くと泉のほとりに座り込んだ。

今もなお地下からこんこんと湧き出てくる水。でも不思議とその泉の水が溢れることはない。

一定の水量を保ちながら、水面は穏やかに波を打つ。

少女はずつとその泉の水面を見つめ続けた。期待と好奇心に爛々と目を輝かせる。

「お花、早く咲かないかなあ？」

すると、少女の期待に応えるかのごとく泉の底から新芽が生まれ、徐々にその芽を伸ばして水面から顔を出す。

つぼみから咲き開く一輪の小さな花。

「うわあ、きれ〜」

少女は歡喜に胸を躍らせ、咲いたその花を摘み取つた。

ふと。

小枝を踏みしめる音が聞こえてきて、少女はハッと振り返る。

摘みたての花を胸に抱いた少女は、同じ年頃の黒髪の少年と出会つた。

少女は立ち上がり、訊ねる。

「あなたは誰……？」

少年は答えない。ただ黙つて少女を見つめている。背丈は少女の

ちよつと上くらいか。見慣れぬ高貴な白の法衣に身を包んでいる。
「ねえあなた、どこから来たの？ 見慣れない服装ね。どこの帝国？」

ようやく少年が口を開く。

「なぜこの場所にいる？」

「え？」

「人間が立ち入れないこの場所に、なぜいるのかと訊いている。どこから入ってきた？」

「島の精霊さんたちに教えてもらったの。この場所ならきれいなお花が咲くからって」

「島の精霊が？ 君をこの場所に？」

「そう。そしたら泉からこんなにきれいな花が咲いたの」

ほら。と、少女はさきほど泉から摘んだばかりの花を少年に見せた。

少年が怪訝に首を傾げる。

「花が……咲いた？」

「そう。あの泉から咲いたの」

「咲いていたじゃなくて、咲いた（・・・）のか？ あの泉から」

「うん」

少女は自慢げに笑ってみせる。

つられるように、少年の表情にも笑みが宿った。

「君って不思議だね」

え？ 少女は小首を傾げた。

「どうして？」

「その花は本物じゃない。君が作り出した幻影なんだ」

「げんえい？ あっ」

手の中から花がパツと弾け消える。

「あれ？ お花が消えちゃった。さっきまでちゃんと持っていたのに」

少女はおろおろと自分の周りを探し始める。

その姿を見て、少年が小さく笑った。

「それが幻影。君の心が迷ったから消えてしまったんだ。本物の花なら消えたりなんかしない」

「本当に？」

少年は頷く。

「騙すつもりはなかった。けど、なぜだろう？ 僕はこの場所に魔法をかけてしまった。何かに導かれるように……。」

でも、これでハッキリした。この力を具現化できるのは君だったんだ」

少女は小首を傾げる。

「あなた魔法使いなの？ 精霊さんと同じ力が使えるの？」

「同じじゃない。僕は精霊よりもっとすごい力を使う。世界で僕だけしか使えない『禁断の魔法』を持っているんだ」

「きんだんの、魔法？」

「そう。それを君が形にしてくれた。この魔法の封印を解く鍵は君だったんだ」

少女は眉間にシワを寄せて尋ねる。

「あなたの言っていること、よくわからないわ」

「そうだね。今話しても何のことかわからないよね。君が大人になつたらまたここにおいでよ。そしたら話してあげる」

「本当？」

「約束する」

「じゃあ『約束の証』をして」

そう言って、少女は小指を差し出した。

今度は少年の方が小指を見つめて首を傾げる。

「約束の……証？」

「そうよ。私の国では約束を交わす時、お互いの小指を結んで約束するの」

「証を作るって意味だね。わかった」

少年は頷くと、小指を差し出して少女の小指に絡めた。そして

。

少年が少女の小指を引き寄せて、顔を近づけてくる。状況が読めずに驚き眼でその場に立ち竦む少女。

少年の唇が少女の額に優しく触れる。

ゆっくりと、少年は少女から離れていき、そして何事もなかったかのように微笑む。

「これは僕の帝国での『約束の証』。約束は必ず守る」

仄かな感触が残る額に手を当てて、少女は頬を赤らめる。

少年は呆然とする少女の手を取り、そこに懐から取り出した白い羽ペンを置いた。

「これ、君にあげる」

「私に……？」

「君はこれを持って、またこの島に来るんだ」

少女はにこりと笑って頷く。

「うん、わかったわ」

「それから君に魔法をかけておいた」

きよとんとする。

「……魔法？」

少年は頷く。

「僕と君がちゃんと出会えますように、という魔法。君を見失いたくないんだ」

「どんなことが起こるの？」

「それは秘密。君が十六歳になってこの島に来ればわかるよ。」

そう。この神々の島に「

一、そこにある何かの縁【1】

雲海を抜けると、きらめく太陽の光が差し込んできた。
思わず手をかざして影を作る。

視界いっぱいに広がった透き通るような青い空。

大空に包まれるようにして、その島は存在した。

火竜にまたがった十六歳の少女　ミリアーノは、目を見張るよ
うな光景に「うわぁ」と感嘆かんとんの声をもらした。

「これが神々の島……」

光かざした手を頭へと移動させ、視界をちらつく淡い金髪を押さ
える。

「私、本当に来ちゃったんだ。ここまで」

まだ彼方ではあるが、ミリアーノにしてみればもう目前だった。
行く手を阻むものは何も無い。

このまま順調に飛べば、あの島に辿り着いたも同然だ。

思い返せばたった一人で故郷を旅立ち、ずっと不安を抱えていた
日々。

気流によって運ばれるその島を探す方法は一つ。

それは目撃証言のみ。

勇気を出して飛び込んだ見知らぬ土地で、共用語が通じない異種

民族の人たちに戸惑いながらも、ジェスチャーや手書きの絵だけで、なんとかここまで辿り着くことができた。

熱心にねばり訊き続けた甲斐があったというものだ。

求めていた光景にミリアーノは歓喜し、両腕を思いっきり伸ばした。

「あはは。やったね私！」

心地よい風を胸いっぱい吸い込んで、そのまま身をゆだねるように火竜の背中に寝転ぶ。

大きくノビをして、深呼吸を一回。

「いい風……」

眩きを風に乗せて、真上に広がる上空を見つめる。

自分の瞳と同じコバルト・ブルーの色。

その空を見つめながら、ミリアーノはやんわりと微笑む。

「天気も良好だし、大気も安定。風も気持ちがいいし、なんだかこの感じ」

まるで夢みたい。

「！」

ミリアーノは慌ててガバツと火竜の背の上から身を起こした。

すぐさま自分の頬をつねる。

……うん。たしかに痛い。

じんじんとする頬の痛みを実感しながら、ミリアーノは自分に言い聞かせる。

「そんなわけないじゃない。私はちゃんと目覚めてる。今まで苦勞してきたことを思い出すのよ、ミリアーノ」

本腰入れ、火竜の手綱を手取る。

きゅつと手綱を引き締めて両足に力を込め、ミリアーノは前方を睨み据えた。

島に向けて「逃がさないよ」とばかりに不敵に微笑んで、「そうよ。これで夢なんかしたら私、神様を一生恨んじゃうからね」

別世界にいるであろう神様にきつく忠告し、ミリアーノはいざ気合いを入れる。

「よし！ じゃ、行くとしますか。神々の島に！」
そんな時だった。

ふと、腰に装着していたポシエットがもこもここと動く。それと同時にポシエットの中から聞きたくなかった声が聞こえてくる。

『おや？ なぜここはこんなにも暗いのでありましよう？』

ミリアーノのテンションが一気にダウンする。

手綱を緩めてがっくりと肩を落とし、しびしびポシエットへと視線を落とす。

何もこんな時に起きなくてもいいのに。

ポシエットに向けて沈んだ声で問いかける。

「あら、起きたの？ フレスヴァ」

ポシエットの中から聞こえてくる、くぐもった声。

『この声はミリアーノお嬢様。おはようございます。ここはどうしてこんなにも暗く狭いのですか？ わたくしめの身に何が起きているのでしょうか？』

問われ、ミリアーノは下顎あごに指を当てて、わざと惚けてみせる。

「んー。別に悪気はなかったのよね。相棒と家出するには少しばかり心細かったっていうか。ちょっとくらい口うるさいのが居てもいいかなって思ったんだけど、やっぱりうるさそうかなって思って、とりあえず食事に超強力な睡眠薬を盛って丸一ヶ月ほどポシエット

の中で眠らせていたってとこかな？」

『なんと！ わたくしめをポシエツトの中に入れるとは！』

「あ。問題はそこなんだ」

『幼少の頃よりラステルク家の執事を勤めて百五十年。ミリアーノお嬢様がお生まれになった頃からずっと側でお仕えしてきたというのに、いったい何が不満だったというのですか！』

「いや、だから」

『このような仕打ちを受けるのは初めてのことでありますぞ！』

「だから悪気はなかったんだって」

「いったい、ポシエツトの何に不満を感じたというのだろう。」

ミリアーノは理解できずに小首を傾げた。

相棒の火竜が会話に加わるように翼を二、三度羽ばたかせる。

しばらくして。

ポシエツトの入り口からひょこりと出てくる、丸々と太った小型フクロウの尻。

そして、眩き。

『今日はやけにお尻が涼しく感じますぞ』

「頭を逆さにしてごらん、フレスヴァ。涼しいのは火竜に乗っているからよ」

フクロウの尻がポシエツトの中へと戻る。

そして、ポシエツトの中からもごもごと聞こえてくる声。

『朝のお散歩でございましたか。いやはや、これは失礼いたしました。』

奥様がお亡くなりになられてから早一年。ミリアーノお嬢様はいつも部屋にこもりつきりで泣いてばかりおられましたから、お体を心配していたところでございます。

なにはともあれ、お嬢様が外出できるほども元気になられたのは、わたくしめにとって何よりの幸せ。

これでやっと奥様の墓前に顔向けができますよ。

ぷはっ。　よいしょ、と

ようやくポシエットから顔を出す、手のひらサイズほどのフクロウ　執事のフレスヴァ。真下に広がる大海原を覗き込み、

「おや？　今日は新しい散歩コースのようですね。ふむふむ。

で、ここはどの辺でありますかな？

むう？　なぜでしょう。この風はなぜか異国の匂いが　「

すいっと、フレスヴァの顔が前方へと向く。

「つて、ぎよえええええ！」

目玉と舌が飛び出るのではないかと思うくらい、フレスヴァは目の前の光景に驚いてくれた。

「ミリアーノは得意げに胸を張って「ふふーん」と鼻を鳴らす。

「どお？　驚いた？」

「こ、こ、これはッ！」

声を詰まらせるフレスヴァに、ミリアーノは風に髪をなびかせて、笑顔で「そうよ」と答えた。

「私、とうとう来ちゃった。神々の島に」

一、そこにある何かの縁【2】

ポシエットの中でフレスヴァが「ぎゃあぎゃあ」と騒ぎ出す。

「何をお考えですか、ミリアーノお嬢様！ 神々の島ですぞ！ お転婆にも程があります！」

ミリアーノは白々しく顔を背けて、

「今日も良い天気よねえ」

「 って、完全無視でございますか！」

「フレスヴァもこの光景を目に焼きつけて感動してみたら？」

「すでにディープ・インパクトに焼きついていきますよ！ こんな行為を黙認したら、わたくしめは旦那様に大目玉を食らってしまいます！」

はあ、と。ミリアーノは重いため息を吐いて、呆れるように肩をすくめる。

「ほんと堅物ね、フレスヴァって。神々の島を間近で見られる瞬間なんて、もう一生来ないかもしれないのに……」

「来るわけないでしょう！ この時点でわたくしめの人生はジ・エンドでございますよ！」

「ねえねえ！ あれ見てフレスヴァ」

「 って、振っておいて完全無視でございますか！」

ミリアーノは目前の光景に喜びの声を上げる。

「神々の島に、もうあんなに人が集まってる」

だんだんと見えてくる島の周囲。

島の周囲には無数の小さな影がたくさん飛び交っていた。

数多の帝国からやってきた飛行艇や火竜、大鷲や鳥羽人が島の周囲を往来している。

あの島では年に一度、神具を使って世界最強を決めるイベントが催される。

その開催日はもう間近。

故にこんなにもたくさんの方が集まってくるのだ。

もちろん、ミリアーノもそのイベントに参加しようと思気込む一人だった。

「いったいどんな人たちがあの島には来るんだろう。楽しみだなあ」
呟いて、自分の服を見下ろす。

「あ。もうちょっとお洒落してくれば良かった……」
ショートパンツに半袖シャツ、薄手のジャケット。火竜の乗り手としては身軽で相応しい服装だが、恋をするにはラフ過ぎて女の子らしくない。

「ま、いつか。べつに恋をすることもないだろうし、それにあの島には観光で行くわけじゃないしね」

フレスヴァが首を傾げて問い掛けてくる。

「と、言われますと？」

ミリアーノはぴっと人差し指を立て、笑顔で答えた。

「もちろんイベントに参加するために行くのよ。これから」

「なっ」

声を詰まらせるフレスヴァ。その顔がみるみる一変。途端に、せきを切ったように喚き立ててくる。

「何をお考えですか、ミリアーノお嬢様！ イベントに参加するのですか？ 何を馬鹿なことを申されているのですか！ イベントはお戯れで参加するものではありませんぞ！」

キーンと響く声にミリアーノはうんざりと両耳をふさぐ。

(やっぱり連れてくるんじゃないやなかった)

ため息をついて答える。

「わかっているわよ、そんなこと」

彼が怒るのも無理はない。

神々の島で催されるイベントはただの祭りではない。

イベントの伝統は古く、その昔、空を漂うこの島に誰もが神がいると信じていた。そこで各帝国の王様が神の恵みを求めてこの島に

お供え物をしたのが始まりなのだと言つ。

金銀宝石、財宝の数々。

世界中の空を漂い流れるこの島には各帝国の財宝が次々と置かれていった。

そんな中、一人の王様が、とある国の財宝にケチを付ける。

『この財宝じゃあ、国が知れるな』

そこから始まった王様たちの意地と見栄の張り合い。果てに『この帝国が最高のお供え物か』という滑稽なバトルが勃発。

しだいに有形の物では限界が出てくる。そこで生まれたのが魔法の道具 『神具』だった。精霊の力を借りられる異種民族 魔法使いの技量と、道具屋の目利きで選ぶ道具。そして具現化できる使い手と呼ばれる者が組み合わせることで織り成す、美しき幻影の素晴らしさ。

それこそが神への最高の贈り物だといえよう。

以来毎年、神々の島ではイベントが催されるようになり、幻影を競技するという風になったわけだ。

まあ、そんなわけで

「ねえ聞いてプレスヴァ。私、どうしてもこのイベントに参加してみたいの」

「冗談言わないでください！ 神々の島で催されるイベントは各帝国の意地とプライドをかけた」

「建前は『栄光と名誉をかけた』ね」

「そんな神聖なる試合なんですぞ！ 祖国を巻き込む戦争に発展したら、どう責任を負われるつもりなんですか！」

「だから、戦争にならないように気をつけるわ」

「ミリアーノお嬢様！」

「あーはいはい。わかっていますよーだ」

んべつと舌を出して、ミリアーノはぷいっつとそっぽを向く。

するとフレスヴァが急に泣きすがって懇願してくる。

「ほんと。お願いですから、本気でイベントに参加するのだけはやめてください。わたくしめは平穩で安全な執事生活をエンジョイしたいのでございます」

「人生つて、やっぱり山あり谷ありでしょ」

「平坦が好きなんですッ！ わたくしめは！」

ミリアーノはフレスヴァへ顔を向けると、ふっとその顔を緩めた。にこりと微笑んで、

「大丈夫だつて。参加するのはこれが最初で最後。それならオツケ
ーでしょ？」

顔を渋めるフレスヴァ。

「し、しかし……」

優柔不断そうに言葉を濁し、顔を伏せて返答に戸惑う。

ミリアーノは最後の押し手とばかりに、懐から白い羽ペンを取り出した。フレスヴァの目前で振ってみせる。

フレスヴァが驚く。

「そ、その神具は！」

「そうだよ。お母さんの形見、持ってきた。えへへ」

「『持ってきたかった』じゃございません！ それは奥様の大事な

ー

「わかってる。でもね、聞いてフレスヴァ。私、十六歳の誕生日の
夜に、お母さんの夢を見たの。

すごく不思議な夢。

見知らぬ森を歩いていたら、お母さんが迎えに来てくれて、そし
て私の手を引いてこう言ったの。

『一緒に神々の島に行ってみない？』つて。

もしかしたらあの島に行けば、死んだお母さんに会えるような気
がして……」

ふと母の面影を思い出し、心の奥底にずっと押し込めていた感情
が込み上げ、目の淵ふちにじわりと涙が浮かんだ。ぎゅっと目を閉じ、

激しく首を横に振って涙を払う。

そして目を開いて肩を竦め、何事もなかったかのようにニコリと笑うと、ちろりと悪戯っぽく舌を出した。

「なんてね。会えないってことぐらい、ちゃんとわかっているよ。でもね、フレスヴァ。お母さんが夢でそう言ってくれたのは、きつとそこに何かの縁があるからなんだよ。」

ううん、何も無かったっていい。あの島に行けば、自分の中で何かが変わる気がするの」

「ミリアーノお嬢様……」

同情を見せるフレスヴァを直視することができず、ミリアーノは前方に浮かぶ神々の島へと目をやった。

「独り立ち記念っていうのかな。いつまでも家でめそめそ泣いている女の子にはなりたくないの。私もお母さんみたいにこの神具でイベントに参加してみたい」

母は生前、自分の過去を何一つ語ってはくれなかった。父も、結婚後の母のことは語ってくれても昔の母のことは一切語ってはくれなかった。

だから知りたい。

昔の母のことを。

この神具を使ってイベントに参加していた、あの頃の母のことを。

「一、そこにある何かの縁【3】」

ふと、フレスヴァが何かに気付いたらしい。

気を取り直したように咳払いして、半眼で問い掛けてくる。

「あの……ミリアーノお嬢様？」

「なに？」

「ところで、神具の扱いはご存知なのでございますか？」

問われ、ミリアーノはきよとんとした顔で目をぱちくりとする。

「え？ 知らない」

「……」

「あ、なによその目！ みんなのやり方を見ていれば私だって扱えるようになるわよ。うん、きつと」

「……」

ぐっと拳を握り締めて気合いを入れるミリアーノをよそに、フレスヴァは重いため息をついた。

「やれやれ。やはり最後はわたくしめが尻拭いする結果になるんでしょうね」

「うわっ、なによその言い方。すっごくムカツク」

「ムカツクのは凶星の証拠でございます」

「フンだ。もういいわよ。フレスヴァなんか頼らなくなつて、私一人で何でもできますよおーだ」

「あーはいはい。さようでございますか。それは嬉しい限りでございます。わたくしめはもう知りませんよ？」

「知らなくてもいいもん！ 絶対自分で何とかしてやるんだからぶつぶつと独り言を呟いた後に、」

「あっ！」

ミリアーノは前方からこちらに向かって来る豆粒サイズほどの白い物体の接近に気付いた。

すぐにフレスヴァに知らせる。

「ねえねえフレスヴァ。あれ見て。なんだと思う？」

しかしフレスヴァはそっぽを向いたまま知らぬ顔で、

「『もう頼らない』と言っていたのはどこのどなた様でございま

」

「そんなことより、とにかくあれを見て」

「ぎゃっ！」

フレスヴァの頭を無理やり目的の方へと捻じ曲げたからであろう。フレスヴァが痛々しい悲鳴を上げた。

「み、ミリアーノお嬢様……今、わたくしめの首がグギツと」

「どうでもいいじゃない。とにかくあれを見て」

「ど、どうでもいいって……。はて？ 『あれ』とは何でございませぬかな？」

「ほら。あれよ、あれ。鳥の方向から真っ直ぐこっちに向かってくる白い豆粒みたいなやつ。」

あれ、なんだと思う？」

フレスヴァは狭い額に片翼を当て、顔をしかめて目を細める。

「ほう……。たしかに白い豆のようなものがございませぬ。はて？

なんでございませぬか。鳥のわたくしめには理解できません」

「鳥のあなたに理解できないなら、あれは鳥じゃないってことね」

「ごもつともで」

ミリアーノは持っていた羽ペンを懐へと入れた。火竜の手綱を両手でしっかりと掴み、ピンと張って火竜に緊張感を与える。

「スピードを落としていた方がいいかも」

一、そこにある何かの縁【4】

ミリアーノは手綱を少し手前に引き寄せ、火竜に速度を落とすよう指示した。

火竜の速度が徐々に落ちていく。

豆粒くらいだった物体はしだいに大きくなっていった。羽ばたかず、真っ直ぐに伸びた白い翼。そして向かってくるスピード。明らかに生き物では出せないスピードである。

ミリアーノは呟く。

「もしかしたら小型飛空艇かもしれない」
しかも

「一機だけじゃない。後ろに三機、すごいスピードでこっちに向かってきているわ」

後ろを振り向いてみたが誰もいない。自分の後ろに大型の飛空艇が待機していたのならまだ納得がいったのだが……。

（ちよつとした移動に使っているわけじゃなさそうね。しかも何だか様子が変だわ）

小型飛空艇は街中を散策する為に開発された遊具物である。浮石の面積を小さくし、誰でも簡単に操縦できるよう軽量化して乗れるようにしてある。だけどデメリットが一つ。浮石を小さくされたことにより、ただでさえ脆いモノが更に脆くなったことで、無茶な乗り方をすれば浮石はすぐに砕け散ってしまう。

そんな乗り物をこの果てしなく広い　ましてや空中で使うなど自殺行為に等しい。

「誰かに追われているのかしら？」

追われていて空に出ってしまった。と、結論付ければ納得がいく。

小型飛空艇は狭い所でもスイスイ行けて小回りもできるので、追っ手から逃げる際によく使われている。きつと逃げるのに夢中にな

って地上の感覚で島から出てしまったのかもしれない。

フレスヴァが心配そうに訊ねてくる。

「どうするのでございますか？ ミリアーノお嬢様」

「どうするもこうするも、向こうが避けられないなら私が避けるしかないじゃない」

「ごもつともで」

「でもこの状況からして助けに入った方が良さそうよね。このまま放っておいたら墜落するわ」

「しかし相手は四人でございますぞ？ どうやって助けに入るのでございますか？」

「四人も一気に助けられるわけないでしょ。先頭の人を助けて島に引き返せば、あとの三人も自然と引き返してくれるわよ」

「なるほど納得。否しかし、先頭の方を助けてしまっただけは何か厄介事に巻き込まれてしまう恐れが……」

「そんなこと言っている場合？ いつ墜落するかもわからないものをこのまま見過ごしたら目覚めが悪いじゃない」

「そうではありますが……」

悩んでいる様子のフレスヴァだったが、ふと何かに気付く。

「ところでミリアーノお嬢様」

「なに？」

「飛行している相手を空中でこちらに移すというのは可能なのでございませうか？」

「そんなのやってみないとわからないでしょ。救出のチャンスは一度きり。ここで交錯する時よ。向こうは鉄の塊で、こっちは生身。もし失敗すれば私達がどうなるかわかるわよね？」

「……………」

ミリアーノは手綱を持つ手に緊張を走らせた。ごくりと生唾を飲み込んで続ける。

「生存確率ゼロだから」

フレスヴァの体がカタカタと小刻みに震え出す。気まじく視線を

逸らして、ぎこちない声で、

「そ、そそ、空怖い、空怖い」

すぐにもそもそもポシエットの中に身を隠していく。

ミリアーノは「もう！」と不機嫌に顔を曇らせ、ポシエットをばしばしと叩いた。

「そんな弱音吐かないでよね。こっちまで不安になってくるじゃない」

ポシエットの中から声。

『ならば見なかったことにして、さりげなく避けてみてはいかがです？』

「できるわけないでしょ！ 私がやるんだから上手くいくに決まっているじゃない」

不安を隠しながらも、ミリアーノはこちらに乗り移りやすくする為にさらに火竜の速度を落とした。

肌を叩いていた風が撫でるほどの微風へと変わる。

これ以上速度を落とすとこちらの飛行が難しくなるので危険だ。

ミリアーノは前方を見据えて覚悟を決める。

(ここには私しかいないんだから助けてあげないと……)

機影の姿はしだいに大きくハッキリしてくる。

一機を追いかける形で後ろに三機、それぞれ一人ずつが機体またがに跨っていた。

ミリアーノは緊張を落ち着かせようと深呼吸をした。

(よし！)

手綱をきゅつと握り締める。

そんな時だった。

急にミリアーノに襲い掛かる鋭い頭痛。ピンと弦を張ったかのような突き刺さる痛みが頭を貫通して駆け抜ける。

たまらずミリアーノは頭を抱えて蹲った。

(何、この痛み！ こんなときに)

一、そこにある何かの縁【5】

だんだんと激しさを増してくる痛み。あまりの痛さに手綱が緩まる。

(ダメ。なんとかしなきゃ！ このままじゃ飛空艇と正面からぶつかっちゃう！)

意識が朦朧まぶらとしてくる。集中できず、手綱を掴んでも引き寄せることができない。

相棒の火竜が動揺していることを筋肉の収縮で察する。

(せめて避けるだけでも何とかしないと)

だが痛みはガンガンと波打って頭を叩き、我慢できないほどにまであっていた。

(頭が割れそう……)

小型飛空艇との接触まであと数十秒。このままでは大事故は免れない。

瞬間だった。

急にスツと、今までが嘘であったかのように頭の痛みが消失する。戻る意識。

ミリアーノはすぐに身を起こして正面を見た。

(え?)

目前の光景に驚く。

もうそこまで迫った先頭の小型飛空艇にも驚いたが、何より一番驚いたのはそれに乗っていた人物。黒の魔法衣に身を包んだ銀髪の彼。も、自分と全く同じことをしていたからだ。

まるで鏡に映る自分を見るかのように、同じタイミングで顔を上げ、お互い驚いた表情をしたまま時間を止めている。

(あ。ぶつかるかも)

第三者の目で見ているかのごとく心境で、ミリアーノは何の回避判断もせず、その後の結末をただの言葉として受け入れた。

指示がないことに異常を察したのか、火竜が本能で判断を下す。両翼を強く、大きく羽ばたかせて無理に急上昇する。

視界が上から下へ。

力を抜いていたこともあって、ミリアーノは火竜の背の上でがくと体勢を崩した。

小型飛空艇と火竜が紙一重で交錯する。

そのすぐ直後。

ドン、という衝撃音でミリアーノに冷静さが戻った。

(ぶつかった！)

小型飛空艇だけをこの至近距離で避けるならまだしも、それに乗った人の高さまでは越えられない。

ミリアーノはすぐさま手綱を右に開いて火竜の首の向きを変えた。接触を感じたこともあってか、火竜は首と同時に体までぐるりと半回転させ、目的の方向へと体勢を変えてくれた。

ミリアーノがそこで目にしたもの。

それは主を失い飛び去っていく、小型飛空艇の姿だった。

ミリアーノの顔からサツと血の気が引く。

視線を真下に落とし、乗っていた彼の姿を急いで探す。

居た！

落ちていく人影を見つけ、ミリアーノは手綱を両手に巻き取ると、火竜に両足を強く叩き込んだ。

「下よ！ 行って、早く！」

助けられるのはミリアーノだけである。

後続していた三機は浮石のせいで下降できずに平行のまま通り過ぎていく。

指示を受けた火竜は頭を落とし、翼をたたんで急降下する。

目を開けられないほどの速度の風がミリアーノの肌を叩く。

力抜けそうな落后感に耐えながら、それでもなんとか四肢の筋肉を締めて振り落とされないように踏ん張る。

(お願い、間に合って！)

最悪の光景が脳裏を過ぎる。

こんな高度から真下へ落ちれば彼の即死は確実。たとえ下が海面であっても、高度があればあるほど水面は石のように硬くなるのだ。また、ミリアーノ自信も危険は同じだった。ある程度の高度に達すると救出を諦めなければならぬ。大気には空の精霊と海の精霊の境界線が存在する。空から海へ。その一線を高速で超えた瞬間、どんなにベテランの乗り手であっても気を失ってしまうのだ。気を失えば火竜から落ちて死ぬ。

(あともう少し……あともう少しで彼を助けられる！)

一、そこにある何かの縁【6】

救出は　ギリギリのところまで成功する。

魚を掴む感じに、火竜は前足で彼の体を捕まえる。

ミリアーノは歓声を上げた。

「さっすが私の相棒！　頼りになるう〜」

火竜の背を手でばんばんと叩いて誉めてあげる。

その後ゆっくりと元の高度に上昇し、雲海から顔を出したミリアーノは他の三機の行方を目で探した。

すると向こうの方からミリアーノの姿を見つけ、機体を接近させてきた。

ミリアーノはその三機に笑顔で手を振り、そして指先を下へと向けて彼の無事を知らせる。

三機のリーダーと思われる黒服のハンサムなおじさまが、親指を立てて「よくやった」とばかりに甘いマスクで微笑してくれた。

「えへへ」

ミリアーノは顔を赤くし、つられるように照れくさく笑った。初めての救出にしては上出来だったと自分でも思う。

そんな油断が失敗だった。

ふいに横から流れてきた大きな雲の塊に、ミリアーノはすっぱりと飲み込まれた。

ミリアーノに焦りの色が広がる。

「しまったッ！」

視界の先は薄暗く、どこまでも白い霧状の幕に覆われており、スビードも方向も定まらない。

（もうすぐ航路に入るというのに）

島の周囲にはたくさんの飛空艇や生物が往来していた。そんな中をこのまま突っ込んだら

(方向を変えなきゃ！)

しかし雲の中ではどの方向を飛んでいるのかさえ分からなくなっていた。さきほどまで一緒に居たはずの小型飛空艇の三機も行方がわからなくなってしまうっている。

ミリアーノは手綱を握り締め、ピンと張った。

(速度を落としていた方がいいかも)

いざ手綱を手前に引こうとした、その時！

雲を抜けて、視界が晴れる。

ミリアーノの視界に飛び込んでくる大空、島、そして

「きゃああああ！」

すぐ目前を過ぎっていく大型の飛空艇の側面。

その後次々に色んな人や乗り物、大型飛翔生物が横切っていく。手綱を引くことを忘れ、パニックに悲鳴をあげるミリアーノ。

更に追い討ちかけるように翼の生えた人たちの団体が！

「退いてえええッ！」

叫ぶミリアーノの声で異常に気付いたのか、その団体が散り散りになって逃げていく。

その後続を流れていたモノ達は連鎖するようにどんどん玉突きしていき、その度に罵声が増えていく。

ミリアーノを乗せた火竜は本能で障害物を上手くすり抜けて回避し、風の流れに乗るようにして神々の島の底へと入っていった。

ここならもう誰も通ることは無いだろう。島の底　岩山を丸ごとひっくり返したような荒々しい地形　を逆さまになった気分で飛んでいく。

(どうしよう、どうしよう)

どうすれば航路の流れに入れるか。ベテランの乗り手ならまだし

も、ミリアーノはまだ初心者のちよつと上くらいの實力でしかない。故郷では火竜の乗り手は珍しく、数人しか存在しなかった。その為、何の規制もなくいつも自由気ままに空の散歩をしていたミリアーノ。当然、アクシデントを回避できる術を身につけてなどいない。何も思いつかないまま、どのくらい飛んだらうか。視界がぱあつと開けて大空が広がった。島の底を抜け、再び上空へと舞い上がる。

が、最悪なことにそこは数多の飛行物が往来する、島の係留港の入り口だった。

「きゃあああ！」

鳴らされる警笛と飛んでくる罵声。赤旗を激しく振って危険を知らせる警備員の横をすり抜けて、ミリアーノは逆走していく。

「ごめんなさい！」

もはや謝るしかなかった。

一、そこにある何かの縁【7】

火竜は風に乗リ、飛行物の側面を舐めるようにして旋回していく。警笛や罵声を浴びると同時にひたすら謝り続け、ミリアーノはようやく流れから一旦外へと抜け出すことに成功した。

島の上空で体勢を整えて安定させる。

額の冷や汗を拭って、やっと安堵のため息を一つ。

「ふう。危なかった」

本当は『危なかった』の一言では済まされないことだった。運が悪ければ大事故を引き起こしていたかもしれないからだ。

ミリアーノは今にも飛び出さんばかりにバクバクと動いた心臓に手を当てた。両手は小刻みに震え、手の平にはじつとりと汗がにじんでいる。

（航路に入る前に少し休憩した方がいいかも）

この状態で航路に入るのは危険だ。なぜなら興奮状態と焦りに押しされ、狭い間隔に入ってしまうがちになるからだ。

ミリアーノはその場で大きく深呼吸する。

一回、二回……。

しだいに心臓が落ち着きを取り戻していく。

周囲を見回し、少しずつ分析する余裕が生まれってきた。

真下に広がる島の絶景に、ミリアーノは目を輝かせていく。

「わぁー。これが神々の島なのね！」

島の大半は樹海に覆われており、その中心には鋭く切り立ったいくつもの岩山があった。その岩山に囲まれた窪地には大きな湖になっていて、人々はそこを神が舞い降りる秘境の地として崇めていた。

「あの湖がイベントの舞台……」

『フィールド』　そう呼ばれている。得た情報によると、今は美しい湖だが、開催の日になるとその湖が自然と塩の塊になって白い闘技場の舞台が誕生するのだと云う。どうしてそういう現象が起きるのかはいまだ説明されていない。

ミリアーノはある一点に目を止めた。

島の北側だけ緑がないからだ。

そこは島が人間に一時的住居を許可している場所だった。精霊しか住むことができない島

(それが神々の島……)

だからこそ、地上の人々はこの島をそう呼んでいる。

ミリアーノはさきほど通り過ぎてきた人工の係留港へと目をやった。

浮かぶ簡易な人工の係留港と、神々の島とを結ぶのは太く大きな架け橋。

あれを渡って、みんな島の中へと安全に入っている。

(とりあえず係留港に降りるしかないってことね)

相棒の火竜もだいぶ疲れているはずである。早く降りてあげないとかわいそうだ。

ミリアーノは航路の流れを目で追いながら独り言を呟く。

「係留港に行くには……なるほど。ここからだともう一息ってところね。流れがこうだから、入るには一度あの向こうまで回ってそれから入らないと」

「邪魔よ！　退いて！」

どこからか威勢の良い女性の声が飛んできた。

次いで襲ってくる重い衝撃。

ミリアーノは反射的に手綱を握り締め、四肢を引き締めて衝撃に耐えた。

体が激しく横転し、逆さまになる。

ぶつかってきたのは一回りも大きい火竜だった。ぶつかってきたというよりは襲い掛かってきた感じだ。気性が荒く、今にも噛み付かんばかりに口を大きく開けて鋭い牙を見せている。

どうやらこの火竜、こちらの火竜を掴んだまま島の森の中へと落とそうとしているようだ。

一回りも大きいその火竜の背の上で、赤毛をショートカットにした褐色肌の女性が叫んでくる。

「火竜から離れて！ じゃないとあんた、このまま火竜の背に押し潰されて死ぬよ！」

たしかにこのまま火竜に乗っていても島の地面に落ちた時に押し潰されてしまう。

「助けてあげるから！ あたいを信じて！」

ミリアーノは急いで鎧あがみから足を抜き取ると、鞍くらの上で両足をそろえ、そこから一気に折りたたんだ膝をバネにして跳躍した。

空中に投げ出したその身を、同じく火竜から飛び降りたその女性が抱き掴む。

女性の背からパラシュートが開く。

落下速度も弱まり、ゆっくりと空中を舞い降りていく。

二匹の火竜は砲弾のようにして森の中へと落ちていった。

島の大地を一直線に削り、濛々もつもつと砂煙を昇らせる。

「レイグル！」

ミリアーノは相棒である火竜の名を叫んだ。

すると女性が宥めるように声を掛ける。

「大丈夫。ただの子供の喧嘩だから」

「でも！」

「大丈夫だって。それにこれは航路の真ん中でボケっとしていたあんたが悪いんだよ？ まずはあたいに謝ってもらいたいんだけど」

ハツとして、ミリアーノは慌てて謝った。

「ご、ごめんなさい！ 私、ここが空いていたから」

「さっきの暴走騒ぎ、あんたでしょ？」

言われ、ミリアーノは無言でこくりと頷いた。

女性がため息をつく。

「まったく。ここは田舎の上空じゃないんだから冷静になったら即座に判断してもらわないと困るんだよ。それが出来ないようなら最初から乗らないこと。いい？ わかった？」

身の縮こまる思いだった。

「ごめんなさい……」

女性の表情がフツと和らぐ。

「もついいよ。次からはちゃんと気をつけるんだよ。」

あたいは南大陸にある砂漠の谷帝国のリズ。あんたは？」

ミリアーノはしばらく呆然と女性 リズを見つめていた。

答えないミリアーノにリズが首を捻る。

「……あんた、名前は？」

そこでようやくミリアーノはハツと我に返った。慌てて答える。

「わ、私は水の帝国のミリアーノ・ラステルク。東大陸の」

「ラステルク……」

リズの顔が一瞬険しくなる。しかしすぐに何事もないように表情を戻し、

「へえ。 ところであんた、この島に来るのは初めてかい？」

「ええ」

「だからあんな無茶苦茶な飛び方をしていたんだね。まあ相手があったら良かったから良かったものを、もし衝突していたら大惨事に」

「あっ！」

ミリアーノは『衝突』という言葉で思い出した。

「忘れていたわ！ 私、人を助けて」

「人？」

「どうしよう！ レイグルがその人を掴んだまま下に落ちちゃった

の！」

「落ちたって、火竜と一緒にかい？」

「そう！ 助かるかしら？」

リズの表情が急に悲しく曇り、声を沈ませて答える。

「だったらもう諦めた方がいいよ。火竜の喧嘩に巻き込まれたら、人間はひとたまりもないからね」

その言葉に、ミリアーノはしゅんと頂垂れた。

一、そこにある何かの縁【8】

削られた森の地面へと降り立つ二人。

二人の横にパラシュートがはらりと舞い落ちる。

鬱蒼うつそうと生い茂る森の樹海は陽の光を遮るほど深く、削られた地面から先が見えないほど暗く翳かげっていた。

人間の侵入を快く思わない島の樹海に、ミリアーノは悪寒を感じる。

ここに長居は無用だ。

ふと、ミリアーノは相棒の火竜の姿を見つけた。

「レイグル！」

駆け寄ろうとして相棒の異変に気付き、すぐに足を止める。

なぎ倒された樹木の終始地で対峙する二頭の火竜の石像。

一頭は二足立ちで今にも炎を吐きださんとばかりに構え、もう一頭はそれを威嚇するように四つん這いで体勢低く牙をむき出していた。

ミリアーノは不安を覚えて一歩後退する。

「こ、これはいつたい……？」

目前の光景が理解できずに呆然と呟いた。

リズが額に手を当てて疲労のため息を吐く。

「やっぱりこうなると思った」

「どういうこと？」

ミリアーノはリズへと振り向き、問いかけた。

リズがお手上げて諦めの笑いを見せる。

「この島は昔から平和の島として有名なのさ。特に森の中はあたいた達の目に見えるものから見えないものまで、数多くの精霊達が住んでいる。」

何が住んでいるかもまだ解明されていないこの島で争い事なんて

しよつものなら、争い事をする生き物はみんなこつやって石に変えられちゃうのさ」

「そんな！ じゃ、レイグルは」

「けど大丈夫。次の日には元に戻ってケロリとしているはずだから」

「本当？」

「本当さ。精霊は生命あるモノを殺すことなんて出来ないからね。」

だからどうすれば争いが止まるか、みんなで考えるんだってさ」

と、リズがこめかみをトントンと指で叩いてみせた。

なるほど。ミリアーノは納得する。そしてレイグルへと視線を戻した。

「あー！」

見えた。

一瞬だったけど、レイグルの後ろに隠れるようにして、なにやら蠢くこめ小さな生物がいる。

「何か……いる」

「どうかしたのかい？」

訊ねるリズに、ミリアーノはその方向を指で示した。すると、

「あ、ほらまた」

ひよいと。森と同じ色をした小さな草のお化けが見え隠れする。

しかも一匹だけじゃない。よく見れば何十匹も隠れている。

リズがくすくすと笑う。

「あれが島の精霊さ。見るのは初めてかい？」

「島の……？」

「そう。専門家が言うには森の精霊の一種らしい。姿を見せてくれるのはこの種の精霊だけ。けどまだ詳しく解明されたわけじゃないからアイツ等が絶対安全って保証はどこにもないんだけどね。」

ただわかっていることは一つ。

あたい達の火竜を石にしたのはアイツ等さ。たぶん、あたい達も石にしようかどうしようか迷っているんじゃないかな」

ミリアーノはおろおろとする。

「ど、どうしよう。この騒ぎのこと、ちゃんと謝った方がいいかな？」

「大丈夫。あの様子じゃ、あたい達が何もしなければ何もしないって感じだね」

「本当？」

すると「待ってました」とばかりにポシエツトからくぐもった声が聞こえてくる。

『森の精霊とあれば、このわたくしめにお任せを！』

急にひよこりとポシエツトから顔を出してくる小型梟フクロウ フレス

ヴァ。それはまさに春を迎えた小動物のように嬉輝いていた。

リスが顔をしかめてフレスヴァを指差す。

「なにこれ？」

ミリアーノは苦笑いを浮かべて頬を掻いた。

「名前はフレスヴァ。一応これでも森の精霊なの」

「精霊だつて？ あんたの国じゃ精霊と人間が共存しているのかい？」

「事情はよくわかんないんだけど、代々ラステルク家を守護し、色々身の回りの世話をしてくれる執事的存在なの」

「精霊が人間の面倒を見るのかい？」

「主に口だけのお仕事なの」

フレスヴァがポシエツトから紳士的に挨拶をする。

「どうも初めまして。ラステルク家の守護兼執事をしております、名をフレスヴァと申します。森の精霊のことならば、このわたくしめにお任せを。」

こう見えてわたくしめ、『森の番人』と恐れられておりましたので、この状況はわたくしめが打開してみせましょう」

とう！ と、フレスヴァは掛け声を発しながら意気揚々にポシエツトから飛び出した。

そして空中で懸命に羽ばたいてみせる。

恐らく本人としてはカッコ良く飛んでいるつもりなのだろう。そ

の肥満体は重力に逆らうことができずにゆっくりと地面に下降して
いつている。

リズがぼそりと、

「鼻かと思った」

「本当は鼻なの」

「飛べないのかい？」

「体が重くて飛べないらしいの」

めげずにフレスヴァは地面スレスレを超低空飛行　いや、すでに
に足で直立ながら、

「それではミリアーノお嬢様。わたくしめが挨拶に行つてまいりま
す」

「うん、わかつたわ。気をつけて、フレスヴァ」

手を振るミリアーノに勇気付けられてか、フレスヴァは向かう。

ほぼ歩行ながらに羽ばたきつつも、森の精霊たち挨拶しに行く。
「神々の島に住む紳士淑女の精霊の皆様。どうも初めまして。わた
くしめはフレスヴァと申しま」

言葉半ばにゴトリ、と。フレスヴァは石となって地面に倒れた。

リズがぼそりと、

「思いつきり敵視されているし」

「きつと微妙な飛び加減が怖かつたんだと思う」

「森の番人と恐れられているじゃなかつたのかい？」

その問いに、ミリアーノは人差し指を顎に当てて首を傾げる。

「実は私も初耳だったりするのよね。きつと自称だつたんだと思う」

「ふーん。それにしても」

リズが腕を組んで唸り考え込む。

「こんなにも島の精霊が過剰に警戒するなんて。争い事以外で生き
物を石にすることなんて無いはずなのに……」

「そうなの？」

「実際あたい達は石にされていないだろうか？」

「そついえば……そつね」

ミリアーノは自分の無事な姿を見て納得した。

ふとリズが何かを閃ひらめいたらしく、ぽんと手を打つ。

「あ。もしかしたら」

「もしかしたら？」

リズはレイグルへと目を向けた。

一、そこにある何かの縁【9】

ミリアーノもつられて同じ方向へと目をやった。

相変わらずレイグルの後ろでは森の精霊がざわざわと蠢うごめいている。リズが問いかけてくる。

「ねえあんた。さっき人を助けたとか言っていたよね？」

「え、ええ」

「あんた、自分の火竜を見て何か思わないのかい？」

「レイグルを？」

そう言われてみれば。ミリアーノはもう一度レイグルを観察してみた。

（あつ！ もしかして）

ようやく気付く。

レイグルはまるで背後の何かを守っているかのように威嚇し構えていた。

リズが続ける。

「あんたが助けたって人、どこにもいないだろう？ この森に住む精霊は怪我した人を放っておけない習性があつて、だからきつと

「
リズの足がレイグルへと向かう。

ミリアーノは危険を感じて慌てて呼び止めた。

「ち、近づいちゃ危ないよリズさん！」

だがリズはミリアーノに振り向き安堵の笑みを見せる。

「大丈夫。あんたもこっちに来てごらん」

そう言って手招く。

多少の不安を残しながらも、ミリアーノは恐る恐るリズの後ろをついていった。

リズと二人でレイグルに近づく。

するとレイグルの背後に隠れていた森の精霊は、怯えるようにしてどこかに逃げていってしまった。

二人でレイグルの背後へ回り込む。

リズが先にレイグルの後ろを確認した。

フフと笑う。

「やっぱりね」

遅れてミリアーノも覗き込む。

「あっ」

そこには額に薬草を貼られた銀色の髪をした十六歳の彼。あの時助けた人が、仰向けで倒れて気絶していた。

リズがミリアーノの肩にぽんと手を置く。

「あんたの火竜は身を挺して彼を守っていたんだね。あたいの火竜を相手にしながらだよ？ 普通考えられないって」

「レイグル……」

ミリアーノは石となったレイグルに近づき、その冷たい体に優しく手を当てた。

そつと頬を寄せる。

「ありがとう、レイグル」

「あんたよつぽどこの火竜を愛情込めて育てていたみたいだね」

リズの言葉にミリアーノはこくりと頷く。

「ええ。だってレイグルは私の家族だもん」

リズは気まわず後頭部を搔く。

「それに比べて、なんだってあたいの火竜はあんな凶暴に育ったのかなあ？ 喧嘩っ早いし、本能剥き出しで あたいの育て方がマズかったかな？」

ミリアーノは首を横に振った。

「そんなことないわ。だって砂漠の国には地上にも空にも肉食蟲がいるんでしょ？ 私の国にはそんな危険な生物なんて居ないもの」

「まあね。そういう調教もしてきたし、仕方ないといえば仕方ないか」

リズが肩を竦めてニコツと笑う。

「ミリアーノも笑みを返す。」

そして話題は、助けた彼のことへと変わった。

「ま、それはいいとして。ところであんた。」

倒れている彼を指差して、リズが訊ねてくる。

「彼とはどんな関係だい？」

「関係？」

ミリアーノはきよとんとした顔で小首を傾げた。

その反応にリズが驚く。

「知っていて助けたんじゃないのかい？」

「この人とは初対面よ。ここに来る途中で　まあ、色々あって助

けたの。」

「馬鹿だねえあんた。こんな奴、放っておけば良かったのに。」

「え？ どうして？」

「彼、その時誰かに追われてなかったかい？」

「追われていたと言われれば追われていたのかもしれない。でも

」

「わざわざこんな厄介事に首を突っ込むなんて。後悔したって知らないよ。」

ミリアーノは事情が飲み込めずに呆け顔で目を数回瞬かせた。

一、そこにある何かの縁【10】

夜の帳が降りた樹海で、場所を移動せずにレイグルの背後で夜を明かすことにしたミリアーノとリズ。

リズが、常用していたランプに人為的魔法の光　幻影を灯す。
森で本物の火は使えない。なぜなら森の精霊は火の精霊を嫌っているからだ。火は森を焼き払う。たとえ火の精霊にその気が無くとも、森の精霊の一方的な思い込みにより、精霊同士で喧嘩が始まる。それに人間が巻き込まれたらひとたまりもない。

けど、だからといって明かりの無い森で過ごすのは危険だとリズは言う。

ミリアーノはリズの話に耳を傾け、相槌を打つ。
そして話題は、同じ神具の使い手ということに変わる。

「それじゃ、リズさんもその剣でイベントに？」

リズの手にある剣を指差し、ミリアーノは訊ねた。

少し驚いた表情でリズがミリアーノを一瞥^{いちべつ}し、

「『も』ってことは、まさかあんだ、イベントに参加するつもりでこの島に来たのかい？」

「ええ、そうだけど……」

ミリアーノは頷いて、懐に入れていた白い羽ペンを取り出しリズに見せた。

へえ。と意外そうな顔で見つめるリズ。

「てっきり観光で来たのかと思ってた」

観光か……。

ミリアーノはがつくりと頂垂れる。

(やっぱりそう見られちゃうんだ)

旅の行く先々でそう言われ続けてきたミリアーノ。あまりのシヨツクに気分を沈ませる。

服が問題？ それとも年齢？ 雰囲気？

どれもこれも当たっていきそうで泣きたくなる。

「できればイベントに参加したいなって思っていたの。でも、まだどうしていいかわからなくて……」

リズが啞然とした顔で訊ねてくる。

「まさか『参加は一人で』とか言わないよね？」

ミリアーノは当然とばかりに顔を上げた。

「そのつもりだったんだけど、ダメなの？」

リズが呆れるように肩を落としてため息をつく。

「当たり前じゃない。ある程度の仲間を集めないとイベントには参加できないよ。それにあんたのその軽装備姿、すぐ帰ることを前提にかい？」

軽装備とは恐らくミリアーノが荷物も持っていないことを指しているのだろう。リズの服装を見比べてもミリアーノと大して変わらない。違っていることと言えば荷物。リズは大きなバックパックを背負っていた。おまけとしてサイドに小さな鍋やコップ、ランプや圧縮された寝袋がはみ出すようにして括りつけてある。もちろんバックの中はパンパンに膨らんでいた。

一方のミリアーノの持ち物かというと、現金とポシェット、そして大事な羽ペンとフレスヴァだけである。いや、それだけで充分だった。旅で足りなかった物など一つもない。足りない物は行く先々の宿で全て補えた。

二人の違いは旅慣れにあった。

ミリアーノはおろおろとする。

「これはその……なんていうか、森で野宿するなんて思わなかったから」

「そういう問題じゃないと思うんだけど」

グサリと胸打つリズの言葉。

「あんた、よくここまで無事に辿り着けたもんだね。よっぽどの強運じゃなければ途中で野垂れ死んでいるところだよ？」

「街を転々とするルートを通ってきたから」

「そうじゃなくて。街を移動する途中の天候とか事故とか、何が起るかもわからないっていうのに非常食も寝袋も持ってきていないなんて。」

まあ、慣れた奴だけがわかる危険っていうんだろうね、こういうの」

後半は呆れるように呟いて、リズは横に置いていた大きなバックパックの中から干し肉と乾パンを取り出し、ミリアーノに差し出した。

ミリアーノは驚く。

「え？ 私に？」

「どうせ食べ物とか持ってきてないんでしょ？」

それに合わせるよう偶然に、ミリアーノのお腹がきゅると鳴く。

ミリアーノは顔を真っ赤にして慌てて自分のお腹を隠した。

「ち、違うの。これは」

リズがくすつと笑う。

「いいから食べな」

「でも、それじゃリズさんの分が……」

「そういう人のことも想定して、普段から食べ物を多めに持って出てきているから気にしなくていいよ」

ミリアーノはその気持ちに応え、素直に受け取ることにした。

「ありがとう」

「あとこの寝袋も、あんたが使っていていいから」

「いえ、それは」

「『旅慣れしていない人には優しくしろ』って、あたいの祖母ちゃんのお癖なのさ。だからこれは、あんたが使っていていいから」

「……ありがとう」

気まずく頭を下げた礼を言う。

(やっぱり私、観光者向きかも)

ミリアーノはつくづく自分が箱入り娘であることを痛感した。

(フレスヴァやレイグルと一緒に居なかつたら、私、どうしていた
だろう……)

誰かに助けられてばかりの自分を恥ずかしく思う。

助けられた。

(あ。そういえば)

ミリアーノは思い出し、「」とここで「」と話を変えた。

一、そこにある何かの縁【11】

「ねえリズさん。あの時の話なんだけど」

リズは首を傾げ、

「あの時？」

「私が助けたこの人のこと」

と、ミリアーノは自分の後ろに寝かせたままにいる彼を指で示す。

「この人誰なの？ 有名な人？」

その問い掛けに、リズは「まあね」と知り合いであるかのごとく頷いた。

「毎年優勝しているチームの一人さ」

「チーム？」

「そう、チーム。つまり一緒に参加してくれる仲間ってこと。イベントに出場するならチームワークがないと誰にも勝てないよ」

「ちーむわーく？」

「グループ対抗ってこと」

「そんなのがあるの？」

「そういうイベントなんだけど」

知らないとは言えなかった。そこまで調べなければならなかったのだ、イベントのことを。旅の目的も神々の島に行くことを重点にしていたし、教えてくれた情報屋もまさかミリアーノがイベントに参加するなど思いもしなかっただろう。

参加してくれる仲間などミリアーノには居ない……。

ミリアーノはがっくりと肩を落とした。項垂れる。

「そんな急に、仲間なんて……」

リズが笑って「大丈夫」と慰めてくれる。

「まあそんなに落ち込まなくてもいいよ。仲間なんてこの島ですぐにでも見つかるだろうから」

ミリアーノは不安残る顔を少しだけ上げて訊ねる。

「本当？」

「まあ絶対なんて保証はないけどさ。でもせつかくこの島まで来たんだから諦めるなんてもつたないよ。とりあえず参加することだけを目的に、この島で仲間を集めてみたらどうだい？」

ミリアーノは自信なく頷く。

「……うん」

「大丈夫だって。ここは地上と違ってみんな親切だから安心しなよ。怖い人に出会ったら森の精霊にお願いすれば、大抵なんとかしてくれるから」

ミリアーノは薄く笑みを浮かべて頷いた。

「……うん、わかったわ。ありがとう」

リズがぼんと手を打つ。

「あ、そうだ。どんな仲間を集めるのかを教えておかないとね」
きよとんとするミリアーノ。

「え？ 出場したいって人じゃダメなの？」

「もちろん出場したい人を集めるんだけど、チームにはそれぞれ役割分担つてのがあるのさ」

「役割分担？」

「そう」

リズが親指だけを折り曲げた手の平をミリアーノに向ける。

呆けた顔でミリアーノ。それを見つめて小首を傾げる。

するとリズは、解説を交えながら残る四本の指を一つずつ折り曲げていった。

「チームに必要な人数は最低でも四人 あんたを入れてあと三人つてとこだね。ポジションは全部で四つ。使い手、道具屋、魔法使い、そして知識者」

「知識者？」

「知らないのかい？」

「ええ。道具屋と魔法使いは分かるんだけど、知識者ってなに？」

嫌な顔一つせず、リズは笑って答えてくれた。

「わかった。じゃあまずはそこからだね。知識者っていうのは神具作りに欠かせない人物　つまり、神具のレシピ担当のことをそういうのさ。」

例えば、あんたが今その手に持っている乾パン」

「これ？」

「そう。どんなに良い材料と道具をそろえたって作り方がわからないと乾パンは出来ないだろう？」

「うんうん」

「つまり、その乾パンを神具に置き換えて話すと、良い神具を作るにはある程度の知識が必要だってこと」

「え？　でも神具って一つ持っていればいいんじゃないの？　幻影を競い合うイベントなんでしょ？」

リズは片手を振って苦い顔をする。

「ダメダメ。競い合うは競い合うでも幻影同士を戦わせて競い合うイベントだからね。予選はけっこうサバイバルな感じになるから神具一つじゃ最後までもたないよ。」

それに最近じゃ、剣の神具がよく使われているから神具はすぐにボロボロになる。だからストックをたくさん準備しておく必要があるのさ」

「もしかして凶器で戦いあったりするの？」

「まさか。神具を凶器に使ったら神具じゃなくなる。使うのは幻影の基盤作りの為だけ。剣の方が幻影に鋭いキレが生まれるからみんなが愛用するのさ」

「鋭い……キレ？」

急にリズは開いた手の平を突き出してきた。

「おっと、ここまで。あたいがそうポンポンとライバルに手の内を明かすと思うかい？」

言われてみればそうである。ミリアーノもリズと同じ、神具の使い手。そう、彼女は初心者であるミリアーノをライバルとして見て

くれているのである。

そう思うと、ミリアーノの心の中でだんだんとやる気がみなぎってきた。興奮気味に両拳を握ってリズに言い迫る。

「私、仲間を集めて絶対このイベントに参加してみたいの。どんな人を探せばいい？」

リズは馬鹿にせず質問に答えてくれた。

「いいよ。それだったら教えてあげる。アドバイスをするのであれば、心身強い奴を探せるところかな」

「拳で語り合えってこと？」

「そうじゃなくて。まあとりあえず最後まであたいの話を聞いて。

予選で求められるのは、幻影の技術力と戦闘力」

「技術力と戦闘力？」

「そう。予選は幻影同士を戦わせるイベントだからね。どんな内容かは毎年変わるからアドバイスできないけど……うーん、まあそうだね。なんていうか、参加してみればわかるって感じだね」

ミリアーノは重いため息をついた。

「なんだか難しそう。私にも出来るかしら？」

「あたいが『やめときな』って言ったらやめるのかい？」

「そうだよ。はあ……。イベントって想像していたのと全然違うわ。てつきり誰が一番美しい幻影を作り出せるかを競い合うものだとばかり思っていたのに」

「それは決勝戦」

「え？」

「決勝戦で競われるのが美術力。つまり、あんたが言っていた通り最終的には『誰が一番美しい幻影を作り出せるか』で今年の優勝者が決まる」

「じゃあ、最初のサバイバルみたいな競い合いには何の意味があるの？」

「特に意味はないよ」

「じゃ、いったい何の為に？」

「イベントをより面白くする為の一工夫ってやつさ。その方が見ている観客も退屈しないし、大いに盛り上がるからね」

「そんなのひど過ぎる！ こっちは一生懸命やっているのに！」

「イベントの苦情をあたいに言っただうすんだい？ そんなに文句があるなら」

と、リズの視線が銀髪の彼へと向く。冷たい目で見やりながら吐き捨てるように、

「アイツに言いなよ」

ミリアーノもその視線を追うようにして振り返り、後ろで寝ている彼を見つめた。

一、そこにある何かの縁【12】（前書き）

お気に入り登録してくださった二名の方、ありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

一、そこにある何かの縁【12】

ミリアーノはリズへと視線を戻すと小首を傾げた。

「どういうこと？」

「チームが優勝した時、神具の奉納と引き換えに一つだけ願い事ができるのさ」

「願い事が……？」

リズが頷く。

「その時彼が『神具は最強で最高の物じゃないといけない』って言うって、イベントのルールを全部変えたのさ」

ミリアーノはあまりに勝手なやり方に怒りを覚えて拳を握り締めた。

「そんなことしたら優勝者に有利な条件になってくるわ！」

「まあね」

「『まあね』って……」

当然とばかりに返してくるリズに、ミリアーノは呆気にとられた顔で拳を緩める。

リズはフフと笑う。

「不満があるなら優勝すること。チャンスが無いわけじゃないんだから」

「チャンスって、例えばどんな？」

「んー、そうね……。しいて言うなら審査員の目を惹くってところかな」

「審査員？」

リズが疲れたように肩を落としてため息を吐く。

「あんだ、ほんと何も知らないんだね。イベントの歴史を考えればすぐにピンとくると思ったんだけど」

「イベントの歴史を？」

「そう。元々これは神様に奉納する幻影を選出する為のイベントなんだよ？ だから当然、神殿の教皇様や司祭様たちが審査員になれるのは常識だと思うんだけど」

「じゃあ教皇様や司祭様たちの目を惹くような幻影を作ればいいってことね」

「簡単に言ってくれるね、あんた」

「え？」

リズは言葉を払って、

「まあどうあれ。あんたも優勝を目指すんだったら本気でやらないと、彼のいるチームには絶対勝てないよ」

「そんなに強いのか？ この人のチーム」

「毎年優勝しているって意味、わかっている？ 嘗^なめてかかっていると痛い目に遭うよ」

「毎年……？」

リズが真顔になる。急に声のトーンを落とし、怖い話でもするかのよう^にに重々しく口を開く。

「そっぴやあんた、彼のことを知らないって言っていたよね？」

彼女の雰囲気^にに圧されてミリアーノは動揺ながら頷く。

「え、ええ」

「じゃあ彼がどこの帝国の名を背負って参加しているのかも当然

」

ミリアーノはこくりと頷く。

「知らないわ」

「それじゃ一つ忠告しとくけど、これ以上彼に関わるとあんたもタダじゃ済まなくなるよ」

「済まなくなるって……どういうこと？」

「彼の背負う帝国の名はファルコム大帝国。それを言えば、いくら箱入りのあんたでも全てがわかるでしょ？」

「ファルコム っつて、えっ！ あの独裁軍事国家で有名な！」

その名を聞いてミリアーノは身震いした。ファルコム大帝国とい

えば中央大陸をわずか一代で武力制圧し、巨大な帝国を築き上げた侵略型大帝国である。そんな国に目をつけられたら武力の弱い水の帝国は簡単に滅亡してしまう。

「そ、そんな……」

リズが頷く。

「そう。だから彼には関わるなつて言っているのさ。彼はこの島じや有名な厄介者でね、毎年この時期になると島の周辺でファルコム大帝国の兵士に追いかけては他人を巻き込んでいるつて話だよ」「どうして追いかけているの？」

「彼はイベントに出たくないみたいなんだけどファルコム皇帝がそれを許さないらしいんだ。地上じゃ彼にとつて何かと不利なところがあるからね。だからこの島で逃げるチャンスをつかっているつて話だよ」

「それつて無理やり参加させられているつてこと？」

「国じゃよくある話だよ。それに、彼は『大魔法使い』と恐れられるほどの凄腕の魔法使いだからね。だから余計に野放しにできないんじゃないかな」

「この人、魔法使いだったんだ……」

ミリアーノは振り返り、後ろで寝ている彼を一通り観察した。小首を傾げてリズへと視線を戻す。

「魔法使いつて、もつとこう 邪悪な服を着て、暖炉で毒々しく煮えたぎる液体の大釜をかき混ぜながら『イーヒツヒ』と笑つてそんなイメージだったのに」

リズが肩を滑らせ、げんなりとした顔で呟く。

「あんた……いったいどんな魔法使いとチームを組むつもりだったのさ？」

ふと、彼が小さく呻くのが聞こえ、ミリアーノは彼へと振り返つた。

「あ。気が付いたみたい」

一、そこにある何かの縁【13】

彼の指が動き始める。

ミリアーノは様子を窺^{うかが}おうと彼の顔を覗き込んだ。

「具合はどお？ 大丈夫？」

訊ねると、彼はうつすらと目を開けていった。そしてミリアーノを見て、顔をしかめる。

「……お前は誰だ？」

惹かれるくらい男性独特のとてもいい声をしていた。思わずミリアーノの心臓がドキンと高鳴る。そういえば今まで彼をこんなにも直視していただろうか？ よく見れば顔立ちも整っているし、何より真つ直ぐこちらに向けられた異国的な色の双眸が、ミリアーノを魅了する。

ミリアーノの声が緊張に震えた。

「わ、私は水の帝国のミリアーノ。ミリアーノ・ラステルクよ」

「みり……？ いや、本気で誰だ？」

ミリアーノは慌てて両手を振って言い換える。

「あ、あの、知らなくて当然なの。初めましてだから。えっと、あの 火竜にぶつかった時のこと、覚えています？」

「火竜に……？」

彼はしばし虚空を見つめて考えを巡らせた後、

「あー。あの時火竜で道を塞^{ふさ}いでいた邪魔な女が」

「邪魔な女って……」

助けてあげたのにひど過ぎる。

ミリアーノは怒りにひくひくと口端を引きつらせた。

彼が不機嫌に表情を曇らせて問いかけてくる。

「オレに何をした？」

「へ？」

意外な質問をされ、ミリアーノは目を丸くした。

「オレに激しい頭痛を仕掛けてきたのはお前だろう？」
慌てて両手を振って否定する。

「ち、ちよつと待って、誤解よ。なんでそんなことになっているの？ 私だつてすごい頭痛がしてあなたを避けることができなかったんだから」

「お前も？」

「ええ。なぜかよくわからないけど急に激しい頭痛がして、でも、あなたとぶつかる寸前にその頭痛が嘘みたいに消えたの」

「ふーん……」

嘘くさいとでも言いたげな、彼はしばし疑うような目でこちらを見た後、やがて諦めるかのようにため息をつく。

「まあいいや。お前のおかげでアイツ等から逃げ切ることができたしな。……ん？」

と、額に貼られた違和感を覚えてか、彼がそこに手を当てた。ペロリと薬草を剥がして、それをしばし観察する。そして、

「これは？」

薬草を突きつけて問いかけてきた。

ミリアーノはあの事故のことを思い出し、笑って誤魔化する。

「ああそれね。森の精霊さん達。あなたが気絶している間に色々あったの」

ぴくりと片眉を吊り上げて彼。

「色々？」

「そう色々」

「具体的に言えないのか？」

「ミリアーノは一瞬言葉をためらって、やがて視線を流して答える。
「知らない方がいいと思うわ」

「なぜだ？」

「生きた心地がしないと思うから」

「……。わかった。じゃあ訊かないことにする」

会話を切って、彼は静かに上半身を起こすと夜空を見上げた。
深い森の木々に遮られた夜空。

何か居たのだろう、そこを見上げたまま愕然と、

「なぜ神々の島の精霊がここに？　ここは地上じゃないのか？　な
んでオレ、こんなところに……？」

「だからあんまり深く追求しないでねって。そこんとこ」
今までの経緯をさらりと流す。

「……………」

彼は無言で視線を落とした。状況を知ろうとしてか、周囲の森を
見回し始める。

そしてある一点で視線が止まった。

リスだった。

リスは今までの会話に口を挟むことなく、ずっと彼を睨んだまま
聞いていた。

彼もまた、リスを睨み返す。

「え？　え？」

状況がわからずオロオロと二人を見回すミリアーノ。
するとリスの方が先に目を伏せてフツと笑う。

「あんたも相変わらずだね」

彼の視線をはね退けるようにしてリスは大きく欠伸をし、ノビを
した。

「あたいはもう寝るよ。ごたごたに巻き込まれるのはご免だから」
ミリアーノは慌てる。

「えー、そんなんっ！　私だって面倒事はヤダよぉ！」
泣きつこうとして、

「泣き言なんて聞きたくないね。自分のことは自分でどうにかしな
リスから言葉と同時に寝袋を投げ渡される。

「わぶっ……………」

ミリアーノは寝袋を顔面でキャッチした。

ふわりと甘い花の香りがミリアーノの鼻孔くわいをくすぐる。

(すごく良い香り)

手に取ってくんくんと寝袋の匂いを嗅ぐ。
瞬間、彼の鋭い声が飛んでくる。

「この匂い！ 馬鹿、嗅ぐんじゃない！」

いきなり寝袋をひったくられ、ミリアーノに怒りが込み上げてくる。

「ちよつと、それ返しッ」

拳を振り上げたその時、

「あれ……？」

急に体が鉛のように重くなり、全身から力が抜けていく。そのままミリアーノは地面に崩れ、眠るようにして倒れこんだ。

意識がしだいに遠のいていく。

混濁こんだくした意識の中でリズの小さな笑い声が聞こえてくる。

「ふふ。こんな手に引つかかるなんて」

「リズ、お前！」

「ちよつと茶化してみただけ。ライバルからのご挨拶ってやつ。心配しなくても二時間ぐらいで目を覚ますから」

「ライバルだと？」

「そう。まさかこんなところであの最強と謳うたわれた伝説の白羽使いシンシア・ラステルクの娘に会えるなんて。

ふふ。今年のイベントは骨がある奴が居て楽しめそうだよ、クレイシス。彼女がここからどう這い上がってくるかが楽しみだね」

(お母さんのこと、何か知っている……？)

ミリアーノの意識はそこで途切れた。

二、奪われた神具【1】

朝の木漏れ日が差し込む樹海で、ミリアーノは寝袋の中で心地よい眠りについていた。

すやすやとまだ眠りの中にいるミリアーノの頬を、相棒の火竜レイグルが鼻頭を何度も当てて揺すり起こす。

「う……う、ん……」

目を覚まさない様子を見かねてか、レイグルは彼女の頬を舐め始めた。

「まだもうちょっと……」

体勢を変えて肢体を折り込み、蹲ひづるようにして身を丸めるミリアーノ。

するとレイグルがまた鼻頭を近づけてきて揺すり起こしてくる。

耐え切れずに肩を震わせクスクスと笑って、

「わかったわ、起きるからやめて。くすぐりたいよお」

ミリアーノはようやく目を覚ました。寝袋から手を出してレイグルの下顎に触れ、にこりと微笑む。

「おはよう、レイグル」

そしてレイグルの喉元を優しく撫でてあげる。

レイグルが気持ちよさそうに目を閉じ、甘えるように鼻頭を摺り寄せてきた。

相棒の元気な様子にミリアーノはホッと胸を撫で下ろして安堵する。

「良かった。元に戻ってくれて……」

ミリアーノは寝袋から這い出し、身を起こした。

そこでようやくやく気付く。

寝袋へと視線を落として、

（あれ？ 私、いつの間に寝袋に？）

昨夜はどうやって寝袋の中に入ったのだろう。記憶がすっぽりと抜けていた。

レイグルが心配そうに顔を覗き込んでくる。

ミリアーノは小首を傾げてレイグルに訊ねた。

「ねえ、レイグル。私がどうやって寝袋に入ったか知らないよね？」

レイグルも首を傾げる。

そりやそうだ。知るはずがない。

ミリアーノはレイグルの反応のかわいさに思わず抱きつく。

「ごめん。聞いてみただけ」

そしてレイグルから離れ、今在る状況を知ろうと周囲を見回してみた。

まるで昨夜のことが夢であったかのように誰の姿もない。

(リズさん、どこか行っちゃったのかな……?)

それに助けた彼も姿がなくなっている。

消え行く意識の中で聞こえてきたリズの言葉。

【まさかこんなところであの最強と謳うたわれた伝説の白羽使い シンシア・ラステルクの娘に会えるなんて】

(お母さんのこと、何か知ってそうな感じだった)

今までずっと謎に包まれていた母の過去。それがちょっとだけ、紐解けてきたように思えた。

(でも『白羽使い』って……)

更なる疑問が心の中に生まれる。もしかしたらこの島で誰かに聞けば、もっと詳しくわかってくるかもしれない。

ふと、聞き覚えのある声がミリアーノに掛かる。

「目、覚めたみたいだな」

ミリアーノが声のする方に振り向くと、樹木の向こうから姿を現

したのはあの時助けた銀髪の彼だった。その手には

「ミリアーノお嬢様、お助けをッ！」

「フレスヴァー!?」

生け捕りにされたフレスヴァーがいた。

彼は捕まえたフレスヴァーへと視線を落とし、

「ああ、これか？ 子豚を見つけたから食材に使おうと思っていたんだ。腹減っただろう？」

「こ、子豚って……」

ミリアーノは啞然とした顔で言葉を失う。

青ざめたフレスヴァーが必死の思いで泣き叫んでくる。

「ミリアーノお嬢様！ どうか、どうかお助けを！ お助けをおいッ！」

なんだか可哀想になってきた。

フレスヴァーを指差し、ミリアーノは彼に申し訳なく返答する。

「き、気持ちはありがたいんだけど。聞いての通り、私の連れなの。そして、それ豚じゃなくて一応梟だから」

彼はまじまじとフレスヴァーを見つめた。

「梟？ これが？ 新種の豚だろう？」

「えっと、まあそれ言われると何とも言えないんだけど。森の精霊なの。それでいて私の大事な執事よ」

彼はミリアーノへと視線を変え、嫌々そくに顔を洗める。

「豚を執事にするなんて変わった奴だなあ」

「えっと、だから……」

どこをどう修正していいかわからず、ミリアーノは眉間に指を当てて考え込んだ。

その間にも彼はフレスヴァーが食べられないとわかってか、さも興味なさそうにフレスヴァーを放してやった。

彼の手から落下し、ぼてんと地面に尻餅ついた後、フレスヴァーは命懸けな形相で泣ながらにこちらに駆け込んできた。

「ミリアーノお嬢様！」

はいはい。と、母親のような気分でポシエツトを開けてフレスヴァを迎え入れる。

ポシエツトに飛び込んで隠れるフレスヴァの元気な姿に安堵したミリアーノ。ホツと息をついて、彼へと視線を戻す。

「フレスヴァのこと、見つけてくれてありがとう」

すると彼は素っ気無く顔を逸らして肩を竦め、

「別に。オレはこの島の精霊に頼まれて退治してやったただだ。朝からぎゃあぎゃあと騒がしかったからな、そいつ」

「そ、そう……」

「ペットの管理ぐらい飼い主がちゃんとやれよ」

「だからペットじゃなくて執事だって。それよりあなた……えっと、名前」

「クレイシスだ」

「ねえ、クレイシス。なんでまだここに居るの？」

機嫌を損ねたらしく、彼が怖い顔で睨んでくる。

「誰のせいでこんなところに居ると思っっているんだ？ お前のせいだぞ」

「え？ 私の？」

「そうだ。言つとくが、あの匂いを嗅いだ奴は普通二時間で目が覚めるもんなんだぞ。それなのにお前がいつまでも無防備にぐうぐうと寝ているもんだから、リズから『目が覚めるまで傍にいて守ってやれ』って頼まれたんだ。ありがとうの一言ぐらい言えないのか？」

「そ、そうだったんだ。ごめん、ありがとう。で、リズさんは？」

「リズならもう街に向かった」

「街って、この島にあるあの【国際交易都市】のこと？」

「他にどこがある？」

「い、ごめん。そんなに怒らないでよ」

「怒ってねえよ。普通に答えただけだ」

「ごめん……」

気まづくなつて、ミリアーノはそそくさと寝袋を折り畳み始めた。適当に丸めて小脇に抱え、レイグルに近寄り手綱を取る。

乗りやすくなる為、レイグルが地面に伏せてくれた。

レイグルに乗る前に、ミリアーノは彼　クレイシスへと振り返る。

「今までごめんね、ありがとう。私もこれからその街に向かうことにするわ」

ミリアーノは相手の返事も待たずに早々と鎧あてみに片足を置いた。

跨る前に、彼の声がミリアーノを引き止める。

「待ってくれ。お前に一つ訊きたいことがある」

二、奪われた神具【2】

ミリアーノはきよとした顔で振り向いた。

「何？」

「話はリズから聞いた。お前、イベントに参加する為にこの島に来たんだってな」

「ええそうよ」

「やっぱり今回の出場は王者の座奪還ってやつか？」

「……………」

ミリアーノは眉間にシワを寄せると小首を傾げて問い返す。

「王者の坐骨関節症って何？」

「それはそれでオレが知りたい」

「あなたが言ったんでしょ？」

「どう聞けばそうなる？　それよりお前、白羽使いなんだろう？」

「白羽使い？　なにそれ」

「違うのか？」

クレイシスが素っ頓狂な顔で驚く。ミリアーノを指差して、

「え？　いや、だってお前、シンシア・ラステルクの娘なんだろう？」

リズから聞いた話だと白羽神具も持っていたと　「」

「ええ」

さも当然とミリアーノは頷く。鎧あぶみから足を下ろし、クレイシスと向き合う。

「確かにシンシア・ラステルクは私のお母さんの名前よ」

「じゃあ白羽使いで間違いないだろ？　お前」

「……………」

ミリアーノは首を横に振った。

「もしかして、母親から何も聞いてないのか？　白羽神具のこと」

その問いかけに無言で頷いて。

ミリアーノは悲しげに表情を曇らせると、きゅつと唇を噛み締め、口を閉ざした。

一変した様子にクレイシスが心配そうに問いかけてくる。

「どづいうことだ？ そのつもりで参加しに来たんじゃなかったのか？」

「……………」

自分の知らない母親の過去を、白羽神具のことを、みんなが知っている。

なんでだろう。なんで私だけ知らないんだろう。

ミリアーノはこぼれそうになる涙を手の甲で拭いた。そして答える。

「わかんない。ただ、ここに来れば何か分かるんじゃないかって。

お母さんみたいに参加してみたら自分の中で何かが変わるんじゃないかって。そう思っこの島に来たの」

ミリアーノは顔を上げる。涙を払うように微笑して、

「笑っちゃうかもしれないけど、私、死んだお母さんから夢の中でこの島に一緒に行こうって誘われたの。だからここまで来たの。この島はお母さんがとても好きだった島で、小さい頃、枕元でよくお話ししてくれていたから」

『ねえ、お母さん。聞かせて。お空に浮かぶ神々の島のお話』

まだ幼かったあの頃の記憶。

王様が宝物を競っていたこと。この島には神様がいること。そして、この島はとても豊かで幻想的だということ。

でもそれだけ。一つのファンタジーとしての話でしか、母は語ってくれなかった。どうしてその話に母が詳しいのか気にしなかったのは、この島のイベントの話は有名で、あの頃は誰もが口にしていたから。どこの国が優勝したとか、誰が今年の英雄か、とか。

でも、七年ほど前から急に、誰もあまり口にしなくなつた。
クレイシスが落胆に肩を落として問いかけてくる。

「じゃあ……イベントには参加しないってことか？」

ミリアーノは首を横に振つた。にこりと笑う。

「参加はするよ。昔、お母さんが白羽神具を使ってイベントに出場していたっていうことは調べたの。きつと参加してみれば何かが分かる。もしかしたら昔お母さんと一緒に参加していた人にも出会えるかもしれないし、だから」

急にクレイシスが真顔になる。

「お前、何も知らずに白羽神具を使う気だつたのか？」

「え？」

「何の覚悟もなく、神具に殺されるかもしれないということも知らずに……」

小さく呟き漏らし、クレイシスはそこで口を噤つぶんだ。

「どういうこと……？ それ」

言葉を払うようにして話題を変えてくる。

「もういい。とにかく、リズから伝言を頼まれている。『白羽神具を返してほしいければ決勝戦まで来い』ってな」

「！」

ミリアーノは慌てて懐に手を当てた。

「無いッ！ 無いわ、私の大事な白い羽！」

どこを探しても白羽神具は見つからない。

「大事なお母さんの形見なのに！」

「だから」

「泥棒！ 私の白い羽を返してよ！」

「いや、オレに言うなよ。持ってたのはリズだ」

「じゃ取り戻してきてよ！ あなたとリズさんっていったいどんな関係！？」

「え……？」

クレイシスが驚いた顔で目を瞬かせる。

「知らないのか？ 関係も何も、オレとリズは同じチームなんだが……」
ミリアーノの眉間にシワが寄る。険しい顔をして疑いの目つきで彼を見やる。

「同じチーム？ あなたとリズさんが？」

「あ、ああ。知らずに話していたのか？ ずっと」

「ええ。だってリズさんは砂漠の谷帝国の人でしょ。あなたと同じチームだなんて何かの間違いだわ」

「何の間違いだ、それは。リズは傭兵だ。毎年ファルコム皇帝から金で雇われて出場しているんだ」

「じゃあもしかしてあなたも？」

「オレはファルコム大帝国に住んでいるから出場しないといけないんだ」

ミリアーノは納得してポンと手を打った。

「あ、なるほど。そういう仕組みだったのね」

「いや、今更知ったのか？ それ」

「だって私、この島もイベントのこともあんまり詳しく知らないもの」

「……………」
クレイシスの頬がひくひくと引きつる。呆れるようにため息を吐いて、

「なんか色々大変そうだな、白羽使い。ま、これから先も苦勞が多いと思うが一人で頑張れよ。じゃあな」

後ろ手を振って去っていく。
ミリアーノは慌てて彼の元へと走り、背中の服を掴んで引き止めた。

「ちょっと待ってよ。私の神具は？ 取り戻してくれないの？」

振り向いて面倒くさそうな顔をするクレイシス。

「は？ なんでオレが？」

「だってリズさんと仲間なんでしょ？」

「だったらなんだ？」

無視するように歩き出す。

「あ、ちよっと待ってよ」

ミアアノは慌てて彼の服を引っ張って止めた。

「取り戻してって言ってるでしょ」

再び振り返り、面倒くさそうに答えてくる。

「だから、なんでオレがそんなことしなければならいんだ？」

「あ。そういうこと言うんだ……」

ミアアノは企みある笑みを浮かべた。

その様子に動揺を見せるクレイシス。

「な、なんだよ」

「あっそ。わかったわ」

彼の服を放してくるりと踵を返す。

そしてレイグルに向け歩きながら、人差し指を立て、意地悪く言った。

「あなたを追いかけていた人たちって、まだどこかこの辺の上空を捜していそうよね。」

レイグル

ミアアノの声を聞いてレイグルが首をもたげて反応する。

すると急に彼が焦ったように追いかけてきて、今度は逆にミアア

ノが引き止められる。

「わ、わかった、わかったよ。言う通りにする。だからやめろ、それだけはやめてくれ」

「どうしてそんなに怯えるの？ そんなに怖い人たちなの？」

「ああオレにとってはな。だから 手伝えばいいんだろ？ 手伝えば」

「手伝いつて？ 私の神具を取り戻す？」

「そうだ。ただし、一つ条件がある」

「条件？」

ミアアノはきよとした顔で小首を傾げた。

二、奪われた神具【3】

クレイシスとは街で落ち合う約束をして森で一旦別れ、ようやく正規のルートで人工の小島 係留口の入り口へと辿り着いたミリアーノ。警備員の赤旗の指示に従い、係留口に降りる順番待ちをする。

この人工の小島は係留口の為だけに造られた港町の島で、そこから架けられた橋で神々の島へと入る形となっている。これは島の精霊たちを刺激しないよう地上から来る人々の安全を考えてのことだった。

順番待ちをしていた時にふと、ポシエットからフレスヴァがひよこりと顔を出してくる。心配そうな表情でミリアーノを見つめ、

「あの、ミリアーノお嬢様？」

「ん？ どうしたの？ フレスヴァ」

「ちょっとお訊ねしてもよろしいですか？」

「何？」

「本当にあの条件を受け入れるつもりなのでございますか？」

「うーん……」

ミリアーノは人差し指を顎に当て、唸り考え込む。

「正直迷っているところ」

「よろしいのでございますか？ あのクレイシスとかいう魔法使い、あれに関わるとかなり厄介ですぞ？」

「確かにそうなんだけど。でも、彼に手伝ってもらわないとイベントに参加できる仲間なんて私一人じゃ集められないし、それに……」

ミリアーノはフレスヴァを見つめて不安に問いかける。

「ねえ、フレスヴァ。私、決勝戦までいけると思う？」

「神具も無しに参加されるおつもりなのでございますか？」

フレスヴァの問い返しにぐったりと頂垂れる。

「そうなんだよねえ。そこなんだよね、問題は。彼が直接リズさんから取り戻してくれたら助かるんだけど」

「ミリアーノお嬢様が直接取り戻されてみては？」

「あ。それ、今思った」

「あー……」

フレスヴァが両翼で顔を覆って嘆く。

「わたくしめがもっとしっかりしていれば……」

「だからどっちにしても、もう一回彼に会わないといけないうってこと」

「否しかし、厄介ですぞ？」

「わかっているわよ。あの条件さえ受け入れれば何とか大丈夫って言うっていたし」

フレスヴァがさらに嘆く。

「ああしかし……厄介ですぞ？」

「あーもう！ 何度も繰り返し返さなくてもわかっているってば」

順番が回り、ミリアーノは警備員の指示に従い、レイグルをゆくりと降下させる。

「……………」

ちらりとフレスヴァを見やれば、フレスヴァがものすごく心配そうな顔でミリアーノを見つめている。

ミリアーノは半眼になってフレスヴァに訊ねた。不機嫌な声で、

「何？」

「もしもの時は頼ってください、ミリアーノお嬢様。わたくしめの長年培った年の功、何かの役には立ちましょう」

「フレスヴァ……………」

じん、と胸打つフレスヴァの言葉がミリアーノの目に涙を浮かばせる。涙を指でそっと拭いて、

「心配かけてごめんね、フレスヴァ。ありがとう」

フレスヴァは頼もしく胸を張って、

「わたくしめを誰だと思っっているのですか？ ミリアーノお嬢様の

執事ですぞ」

ミリアーノは思わず感極まって手綱を手放し、フレスヴァをポシエットから出して抱きしめた。

「うん、わかっているよフレスヴァ。だからありがとう」

レイグルが係留口に舞い降りる。

ミリアーノは係留口の先へと目を向けて、そこに広がる光景に「うわぁ」と感激の声を漏らす。

さすがに世界中の人たちが集うだけあって、そこは珍しい服装や肌の色、各々の環境で進化した姿かたちをしたたくさんの異種民族の人たちが行き交っていた。短く鋭い嘴くちばしと背中に翼を持った鳥民族や、爬虫類はちゅうるいの顔と青いウロコ肌と鋭い爪が特徴の竜民族、赤い蛇目と長い舌、それにつるつると湿っぽい肌が特徴の蛇民族、人間の二倍の長身を持つ巨人民族、狼のような尻尾と耳を持つ獣民族などなど。色んな国の人々が往来していた。

小さな人工島ながらも大きな街一つ分くらいの広さはある。まるでどこかの街をそのままごっそりと持ち上げてきたかのような感じだった。でもここは係留口として造られただけの島。あまり観光としての期待はできない。ここでは誰も交易をしない。在るのは総合案内所や小型飛空艇の貸し出し、乗り物や荷物の預かり所、停留所といった最低限の施設しかないのだ。

ミリアーノはレイグルの背から降りるとフレスヴァをポシエットに入れ、物珍しそうに周囲を見回す。

人々の雑踏。馬やトカゲをひいた乗合車が人波の向こうに見える。「さすがに火竜を連れて歩いている人は誰もいないみたいね。」

と、すれば、まずはレイグルを預けなきゃだね」

レイグルの手綱を引いて、ミリアーノは火竜専門の預かり所へと連れて行った。

預かり所に到着する。

お金は先払い制。宿泊数の指定はなく、期間は一律でエサ代込み体の大きさと料金が変わるシステムとなっている。公認の預け所なので一般客が気軽に払える金額だ。

「良いご旅行を」

「ありがとう」

ここから島にある街までは徒歩で行くこととなる。

乗合車になるだけのお金は持っていたのだが、この先何があるかもわからないので節約したかった。

途中、総合案内所に立ち寄って、交易都市の地図とパンフレットをもらう。

ミリアーノは総合案内所を出ると気合いを入れた。

「さてと。あとは人の流れに乗って街に入ればオツケーね」

「あのおく、ミリアーノお嬢様？」

ポシエットからフレスヴァがそつと顔を出す。こちらの機嫌をうかがうように、

「もうこの際ですからイベントに参加なんてお止めになって、島の観光に変更されてみてはいかがです？」

「でもお母さんの形見、取り戻さないと」

「奥様の形見を取り戻す使命は重々承知。しかし、わたくしめはさきほどから心配なのでございます」

「何が？」

「もし、魔法使いの出したあの条件に失敗して、戦争の引き金になつてしまったらと考えると胃がキリキリと」

「心配性ね。フレスヴァ」

「ですが、もし万が一のことがあった場合、わたくしめはこの時この一瞬を一生悔やむような気がしてならないのです。あの時嫌われなくても良いからミリアーノお嬢様をお止めていれば、と……」

ミリアーノは気にも留めない様子で人差し指をぴつと立てて明る

く答えた。

「先のことをあれこれ考えたって何も始まらないでしょ？ だって今見える道を進むしかないじゃない。」

大丈夫よ、フレスヴァ。あのクレイシスとかいう人、そんなに悪い人って感じには見えないし、とりあえず信じてみよう？ ね？」

「ですが……」

「大丈夫大丈夫」

「そこが心配なのでございます」

「大変だあ！」

叫びながら、人の流れに逆らって走ってくる中年の男が一人。長い耳が特徴のエルフ民族である。

「風の森帝国の奴等が氷河大帝国の奴等に目を付けられて、イベント終了後には戦争が始まるらしいぞ！ 風の森帝国出身の人がここにいたら今すぐ国に引き返して避難の準備を始めた方がいい！」

ミリアーノの近くにいた人たちがひそひそと話し合う。

「やあね、また戦争かしら」

「前もどこかの帝国が氷河大帝国にやられていたよな」

「また今年も地図から一つ、町が消えるな」

「今年は風の森がやられたか」

「かわいそうに……」

「地図から消える前に行つとけばよかつたな」

「ファルコム大帝国と氷河大帝国。この二大大国には気をつけるか

ああ怖や怖や」

あちこちから次々と、流れとは逆の 係留口へと向かっていく人たちがいる。岩のような装甲皮膚を持つ岩人民族だ。岩人民族の住むと言われる土地は

「風の森……」

ミリアーノは呟いた。その民族の人たちとすれ違い、その去って
いく後ろ姿を見つめる。

(こんな強そうな人たちでも戦わず逃げちゃうんだ……)
フレスヴァが心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ミリアーノお嬢様？」

「だ、大丈夫よフレスヴァ。うん、きつと」

動揺して、少し声が震えた。

二、奪われた神具【4】

人工島の出入り口として聳^{そび}える見事な大門をフレスヴァと一緒に見上げる。

まるで要塞の門であるかのように大きくて重厚だった。

ミリアーノは間抜けにぽかんと口を開けて呟く。

「す、すごい……」

「南無南無」

フレスヴァがポシエツトから両翼を合わせて大門に向かって拝む。

「神々の島ってすごいね、フレスヴァ」

「あのお、ミリアーノお嬢様？ 島はまだ先 この門を過ぎ、橋を超えた向こうにございます」

「わ、わかっているわよ、そんなこと」

言い間違っただけじゃない。

ミリアーノは恥ずかしさを隠すように足早に進んだ。

大門を潜^くり抜け、そこで見えてきた光景にミリアーノは「わあ」と息を呑む。

人工島と街とを架ける長い空中棧橋。

白い雲が棧橋の下を魚のようにゆるりと泳いでいく。

それを多くの観光客が橋の上から見下ろし、写真を撮ったり絵を描いたりしながら楽しんでいた。

神々の島でしか見ることのできない風景。

ミリアーノは駆け出し、橋にあふれる人ごみをすり抜けて、興奮しながら橋の手すりから身を乗り出した。

「ねえ見て見てフレスヴァ！ 雲だよ、雲！」

橋の真下を流れる雲を指差し、喜々とはしゃぐ。

「あのお、ミリアーノお嬢様。わたくしめには見えませんが」

「ごめんごめん。ポシエツトから出してあげるね」

ポシエットからフレスヴァを取り出し、橋の手すりにちょこんと置く。

「ね？ どお？ すごいでしょ！ 雲だよ、雲！」

テンション低めのフレスヴァ。半眼で、

「雲と申されましても……。いつもレイグルの上から見ている風景とどう違うのでございますか？」

「違うよ！ だって橋の下に雲なんて絶対通らないもの」

フレスヴァは顔を赤めて言葉を濁す。

「しかし……。わたくしめにはどこも同じに見えるのですが」

「ンもう！ フレスヴァとなんか来るんじゃないか！」

気分を台無しにされ、ミリアーノは不機嫌にツンとそっぽを向いて橋の手すりから離れた。

「あ、ちよつとミリアーノお嬢様！ わたくしめを置いていかないでください！」

橋の手すりから慌てて羽ばたいて、フレスヴァが人ごみの足場へと舞い落ちる。

踏まれそうになりながらもフレスヴァはギリギリのところまで何とか身をかわしていた。

「お？ おお？ お？ ぎゃあッ！」

あ、踏まれた。

フレスヴァの叫び声を聞いて、ミリアーノはうんざりと肩を落としてため息を吐いた。

元来た道に戻ってフレスヴァを迎えに行く。

フレスヴァの傍で腰を下ろし、ミリアーノはポシエットを開けた。

「おいで、フレスヴァ」

「ミリアーノお嬢様！」

とてとてと。フレスヴァは泣きじゃくりながら走ってきて急いでポシエットの中に飛び込む。

ふう。

ミリアーノはもう一度ため息を吐いて腰を上げた。

神々の島へと目を移す。

(あともう少し……)

この橋を渡れば、国際交易都市に入ることになる。
ミリアーノは大きく息を吸い、そして吐き出した。
気持ち落ち着け、いざ歩き出す。

目指すは彼との待合場所。

(何も起きなければいいけど)

不安を抱えながらも、ミリアーノは橋を渡った。

二、奪われた神具【5】

橋を越え、ミリアーノは街への第一歩を踏み込む。そして、

「これが国際交易都市……」

島を覆っていた流れ雲が晴れて、不思議な空中都市が姿を現す。街の外れまで真っ直ぐに抜けた一本の大通りの道。その道には二頭立ての馬車が行き交い、その脇道を通行人がごった返していた。その道の果てに目をやれば、遠く向こうに聳え立つ大きな山脈が見える。

「あの山脈の向こうにイベント会場があるのよね。　　ってことは、この道が会場までのメイン・ストリートになるわけね」

覚えておこう。ミリアーノはふむふむと一人頷いた。

世界中のありとあらゆる異文化が集う国際交易都市。規制も比較的緩く、その国でしか買えないような貴重な品々を扱う行商人の屋台がたくさん並んでいる。

ミリアーノはある店で視線を止め、興奮に目を輝かせた。

「わあ」

急いでその店に駆け寄る。

その店は珍しい異国の服を取り扱っていた。

「かわいい」

ミリアーノは飾られていた服を手を取って見つめる。

羽織り型の膝丈ほどのワンピース。真っ白な布生地に一つ一つ手作りで細かい刺繍が施されてる。どれも全部違うデザイン。シンプルなものから華やかなものまで、見る物全てに心奪われる。

恐らく南大陸にある砂漠地方の伝統衣装だろう。南大陸から留学してきた女の子がこんな衣装を身にとっていて、とても羨ましかつたのを覚えている。

「いいなあ、これ」

ポシエットから声。

「あのお、ミリアーノお嬢様？ 目的が違う方に向いておりますが、今は行商に目を奪われている場合じゃないのでは？」

ミリアーノはテンション落として服を戻す。

「あーうん。わかつている」

そして、店を後にして大通りを人波に乗って歩き始める。

歩きながら、ミリアーノはきよろきよろと周囲を観察した。

屋台の多さ、そして人の多さに呆気に取られる。まるで街全体が大きな祭りでも開いているかのようだ。

でもここに建てられている屋台や建造物 木造や軽石を使った建築物等 は、全部簡易な組み立て移動式用である。この島の土地はあくまで島の精霊たちに借りている場所。イベントが終われば街は解散、即撤収なのである。

(なんだかもつたいたいなあ……)

「あのお、ミリアーノお嬢様？」

「何？」

「どこへ向かわれるおつもりですか？」

「あ。そうだった」

ミリアーノは人の流れから外れ、野菜を売る屋台の傍で休憩し、

「ふう」と息をつく。

「お嬢ちゃん、野菜はどうだい？」

店からエルフの店主が声を掛けてくる。

ミリアーノは丁重に断って、手持ちのパンフレットに視線を落としました。

開いて現在地を確認する。

「クレイシスと待ち合わせした場所って、たしか大道芸人がいる広場だったわよね？」

独り言のつもりだったが、フレスヴァがポシエットから答えてくれる。

「はい。そう言っておりますな」

ミリアーノはパンフレットに指先を落とす。

「現在地がだいたいこの辺だから……うーん。ここからだとちょっと遠回りになるわね。あ、この先二つ目の角を右に曲がれば、ちょっとだけ近道になりそう」

「行き先が分かりましたかな？ ミリアーノお嬢様」

「うん」

ミリアーノはパンフレットを閉じた。

再び人の波に乗って歩き始める。

そして、大通りから二つ目の角を曲がり、歩行者のみが通行できる小さな通りへと入っていった。

その時　！

体格の良い中年男がぶつかってきた。

ミリアーノは地面に尻もちをついて転び、男はこちらに気にすることなく走り去っていく。

同時に、通りの方から飛んでくる声。

「泥棒おー！ 誰か捕まえて！」

(え……?)

ミリアーノが去っていった男へと目を向けた時にはすでに、男は石像になって道に固まっていた。

バックを盗まれたのであるう女性の格好をした犬面民族の人が、その石像となった男に蹴りを入れてバックを取り戻し、肩を怒らせながら去っていく。

ミリアーノはぼかんと口を開けたまま、終始その様子を見つめていた。すると、

「大丈夫かね？ 君」

見知らぬ通行人がミリアーノを心配して手を貸してくれる。

「あ、はい……」

手を借りてミリアーノは立ち上がり、そして石像となった男を指差しながら、その通行人に訊ねた。

「すみません。お聞きしたいんですけど、あの石像ってさっきの

「ああそうだよ。この島で争いや騒ぎを起こせば森の精霊の裁きを受けて石になるんだ。ここは地上と違って精霊が支配する土地だからね」

ミリアーノはそこでようやく、あの時リスが言っていたことを理解した。

(そうか。こういうことになるってことだったんだ……)

ミリアーノは人通りがまばらな道を歩きながら、ポシエットにいるフレスヴァへと声を掛ける。

「そうよ。だからつまり、そういうことなんだよね」

「はい？ 何がでございますか？」

「警邏隊けいらたいよ。どうして居ないのか不思議だったのよね」

「？」

フレスヴァは話の趣旨がつかめず首を傾げて疑問符を浮かべる。

「あーごめん、フレスヴァ。さっきの石像になった人のこと。この島にはたくさんの方が居るのに警邏隊が一人も居ないって不思議だよねって思っていたの」

「この島の精霊はわたくしめとは気が合いませんな。短気というか小心者というか、すぐに魔法で人間を石にするなど精霊の風上にもおけません」

腕組みして怒るフレスヴァに、ミリアーノはクスツと笑う。

「あ。もしかしてフレスヴァ、あの時石にされたことまだ怒っているの？」

「当然でございます」

「いいじゃない。もう許してあげたら？ だってこの島がこんなに平和なのは、この島の精霊さん達のおかげなんだよ？」

「そうではありますが、なぜわたくしめを石にする必要など云々、以下略。」

ミリアーノはフレスヴァの話そのままに、ある店の中へと目をやった。

足を止める。

入り口がとてもオープンな感じの簡易な酒場。中に入るには勇気が要りそうな人相の人たちのたまり場だった。そこでは異国の人たちが同じ空間で楽しく飲みあっており、すでにだいぶ酔っている人、石像になった人たちが多々見受けられた。

平和な反面、そのしかし。

血の気の多い輩が集まるこの酒場では、この島のルールはストレスが溜まりまくりのようである。

まず一つに、物が投げられない。

次に、武器も所持できない。

締めめにムカツク相手に手が出せない、の三重苦。

口と小物が唯一の武器となる。

よくよく観察してみれば、中の男たちは意気投合というわけではなく、こめかみに青筋立てて目を血走らせ、睨みをきかせつつも笑顔で低レベルな口喧嘩をしている。

「あ？ なめてんのか、てめえ」

「上等じゃねえか、おい。てえんとこのチンケな帝国なんざ、地上に帰ったらこうしてこうしてこうしてくれ」

ぼきぼきぼきと、焼き鳥の串を細かく折っていく男。

「おう、いいぜ。イベントが終わったら、てめえんとこの鼻クソみてえなシヨボイ町を襲撃に行つてやるよ」

と、鼻の奥を指でほじる下品な男。

拳句の果てには店の奥でケツを叩きながら、

「お前の皇帝でーべーそお」

と言い出す者や、

「てめえの皇帝ブタゴリラあー」

舌を出しながら罵り合う男達の熱いバトル。

「……………」
ミリアーノは何事もなかったかのように視線を遠いお空へと飛ばして、再び歩き出した。

「きれいな空ね」

「とうわけでごさいますって、わたくしめの話を聞いてお
りますか？ ミリアーノお嬢様」

あー。まだ続いていたんだ、あの話。

「聞いていたわよ。ちゃんと」

「ですから」

「あ、ねえ見てフレスヴァ」

「ぎゃあ！」

グギッとフレスヴァの顔を無理やりその方向へと捻る。

「向こうに大道芸人のいる広場が見えるわ」

「み、ミリアーノお嬢様……わたくしめの首が……」

「途中で道間違えちゃったんだけど無事に着いて良かったわ」

「へ？」

間の抜けた声を出すフレスヴァを無視して、ミリアーノは大道芸人がある広場へと向かって駆け出した。

だが

ミリアーノは足を止める。

広場へと抜けるあと一歩のところまでミリアーノの行く手を遮る三人の黒服の男たち。

しかもなんだか見覚えがある。

(うっ！ まさか……)

嫌な予感にミリアーノは顔を引きつらせた。

二、奪われた神具【6】（前書き）

お気に入りくださった二名の方、ありがとうございます。
心からお礼申し上げます。

二、奪われた神具【6】

ハンサムな男性と以下二名。この島に来る途中、小型飛空艇でクレイシスを追いかけていた人たちである。

ミリアーノは身を引くように一歩後退した。他人のフリをしようと顔を逸らして逃げるように背中を向ける。

すると声は唐突に掛かった。

「ミリアーノさん、ですよね？」

穏やかな、それでいて恐ろしくも冷たい口調で。

その男はミリアーノに訊ねてきた。

ミリアーノはびくりと身を震わせて、逃げ出そうとしていた足を止める。

（逃げられない……！）

自分の素性が相手にバレている。逃げても無駄だ。

覚悟を決め、ミリアーノは恐る恐る振り返る。

男はにこりと紳士的に微笑んで、

「彼の居場所、知っていますよね？ 教えていただけませんか？」

これで彼を裏切ってしまうえば厄介事に巻き込まれなくて済む。だけれど彼との縁がここで切れれば、これから一人でリズさんから神具を取り戻さなければならなくなる。

取り戻す為にはやはり彼の協力が必要不可欠。その彼の協力を得るには

「隠し立てするつもりですか？ そうなると、イベント終了後にはあなたの故郷である水の帝国が大変なことになりますよ？」

まず、ファルコム大帝国の兵士に嘘をつくしかない。

ミリアーノの脳裏を過ぎる彼の言葉。

【ただし、一つ条件がある。ここから街までは別々で行こう。これ

以上お前と一緒にいるとオレの事情に巻き込んでしまう恐れがある。だが別々になつたからといって安心はするなよ。オレが捕まらないとなると今度狙われるのはお前だ。オレを追つていた奴らと遭遇しても『オレの行方は知らない』とその一点張りで答えるんだ。いいな？ たとえどんなことを言われても、どんな脅しをかけられても絶対だ】

フレスヴァが心配そうにポシエツトからミリアーノを見上げる。

「ミリアーノお嬢様……」

「大丈夫、フレスヴァ。大丈夫だから」

ミリアーノは影でぐつと拳を握り締め、気丈に自分を奮い立たせた。

彼らを見据えてハッキリと答えを返す。

「知りません。彼なら目を離れた隙にいらなくなっていました」

「では、あなたは彼の行方を知らないと言い切るのですね？」

ミリアーノはごくりと生唾を飲み込む。そして、

「ええ。彼の行方なんて知りません」

頷いてみせた。

男はミリアーノの言葉を受け入れる。

「そうですか。わかりました。あなたを信じましょう」

あとの二人を引き連れて、男は歩き出す。

ミリアーノの横を過ぎ去るその間に、背筋も凍るような言葉を残していく。

「もし、あなたが嘘をついているとわかったその時は、覚悟してくださいね」

男と以下二名はそのまま静かに人ごみの中へと消えていった。

「……………」

しばらく呆然とその場に立ち尽くしていたミリアーノ。

やがて緊張の糸が切れたようにヘナヘナと膝を折って座り込む。
「どうしよう、私……とうとうあのファルコム大帝国相手に」
嘘をついてしまった。

込み上げてくる後悔と恐怖に体が小刻みに震え出す。
(嘘がバレたらどうしよう。私の故郷が……)

自分の過ちのせいで大切な人たちが、土地が、何もかも失ってしまふ。

心配そうな顔でフレスヴァが様子をうかがう。

「ミリアーノお嬢様？」

「どうしよう、フレスヴァ。私のせいで水の帝国がファルコム大帝国と戦争になっちゃったらどうしよう……」

今更になって不安になった。涙がぼろぼろと勝手に溢れてきて、ミリアーノは両手で顔を覆って泣き出した。

フレスヴァがポシエツトから出てくる。

そしてミリアーノの膝の上に載って言葉をかけてきた。

「もう諦めませんか？ ミリアーノお嬢様」

「え？」

ミリアーノは覆っていた両手を退けてフレスヴァを見つめる。

「奥様の形見はお忘れくださいませ、ミリアーノお嬢様。そしてさきほどの男達を追い、正直に話しましょう。彼の居場所を」

「でも」

「今ならまだ間に合います。さあ追いかけましょう」

「でもフレスヴァ！ 私、お母さんの形見取り戻せなかったら一生自分を許せなくなる！」

フレスヴァが急に怖い顔して語気を荒げる。

「何をおっしゃっているのです、ミリアーノお嬢様！ そんな物より大事なものはお嬢様の命と安全でございます！」

「フレスヴァ……」

「もう諦めましょう？ ミリアーノお嬢様」

諦める、か……。

ミリアーノは悩み、顔を俯ける。
すると後ろから何気にトントンと軽く肩を叩かれた。

二、奪われた神具【7】

肩を叩かれ、ミリアーノは振り返る。

するとそこには腰を屈めたウサギの着ぐるみが、固定された円らかな瞳を向けて心配そうにミリアーノを見つめていた。

「……………」

きつと泣いていたから大道芸人の誰かが気にしたのだろう。

ミリアーノは目の涙を拭って、にこりと笑う。

「ごめんなさい。大丈夫です」

するとウサギの着ぐるみは、励ますかのように手持ちの赤い風船をミリアーノに差し出した。

「……風船いるか？」

ミリアーノは相手の気持ちを汲んで、その風船を受け取る。

「ありがとうございます」

が、

「オイ。本気で受け取るなよ」

「え？」

「声を聞いてもまだわからないのか？ オレだよ、オレ」

「……………」

ミリアーノはしばし考え込んだ後、

「ぎゃああああ！」

身の毛がよだつ思いで悲鳴を上げた。

「ば、馬鹿っ！」

ウサギが慌てて口を塞いでくる。

ミリアーノの悲鳴を聞いて集った注目。それをウサギがおどけて何とか誤魔化し、視線を散らしていった。

そして、ミリアーノの前にウサギのかわいらしい顔がぐっと急接近してくる。

思わず身を仰け反らせるミリアーノ。

ウサギの空いた口の向こうから、ひそひそと声を落とした彼の怒鳴り声が聞こえてくる。

「なんで悲鳴をあげる必要がある？ オレが何をした？」
「言えない。裏切ろうかどうしようか迷っていたなんて。」

ミリアーノは慌てて言い訳を繕う。

「え、だって、突然でびっくりしちゃって」

「こっちはお前を巻き込まないよう最大限の努力をしてきたんだぞ。それを全部無に帰す気か？」

「だからって、なぜその格好？」

「お前の言いたいことはわかる。なぜこんな格好をしているかだろ
うっ。」

「どうしてわかるの？」

「今一瞬オレの上から下までを非難じみた顔で見たからだ」

「う、ごめん」

「オレが素のままでお前と接触したらどうなると思う？ 奴等の脅しは本気だ。だから変装したんだ」

「そうだったんだ。」

ミリアーノは男の言葉を思い出して暗い表情で俯くと、申し訳なく謝った。

「ごめん……」

「……………」

ため息をついて。ウサギは座り込んだままのミリアーノに向け、手を差し出す。

「ほら、立てるか？」

「あ、うん。ありがとう」

ミリアーノは膝にいたフレスヴァをポシエツトの中へと入れ、彼の手に掴まりその場から立ち上がった。そして訊ねる。

「いつから私の後ろに？ まさかずっと私の後をつけていたとか？」

「いや、ついさっきだ。お前を探していたらここで泣いていたから」

存在に気付けた。もしかしてあの三人と接触したのか？」

「うん、今ここで。でもまた接触してくると思う」

「だよな。これで撒^まけるようなら毎年苦勞はしない。それにお前の名前や故郷、調べられていただろう？」

ミリアーノは驚きに目を見開いて、

「どうしてわかるの？」

「そういう国なんだ。ファルコム大帝国っていうのは」

さも当然と答えてくるウサギに、ミリアーノはゾクリと背中を駆け上がってくる悪寒に身震いした。

(このまま彼に関わっていたら絶対故郷が戦争に巻き込まれる)

スツと。さりげなく一歩、後退する。

首を傾げてウサギ。

「ん？ どうした？」

ミリアーノは鳥肌のたつた自分の両腕を擦りながら、少しずつウサギから後退していく。

「私もう……これ以上あなたに関わりたくない」

ウサギはポンと手を打って嬉しそうに、

「よし、わかった。じゃあここで解散しよう」

くるりと踵を返して立ち去ろうとする。

「待って！」

ミリアーノは慌てて追いかけて、彼の背をむんずと掴んで引き止めた。泣きすぎる声で、

「お願い。せめてリズさんからお母さんの形見だけでも取り戻してきて……」

「……………」

ウサギがうんざりと肩を落とす。影でぼそりと、

「他人任せかよ」

「え？」

パツと顔を上げて首を傾げ、問い返すミリアーノ。

ウサギがこちらに振り向いてくる。なんでもないよと言わんばか

りの明るい声で、

「いや、こつちのことだ」

「ねえ。今『他人任せかよ』って言ったでしょ？」

「聞こえているじゃねえか。聞き返すなよ」

「お願い。だつたらせめてリズさんの居場所だけでも教えて。リズさんはこの街には居るんでしょ？」

「ああ居るよ。知ってどうする？」

「直接会って取り戻そうと思うの。だから居場所を教えて」

「わかった。居場所を教えればいいんだな。リズなら」

ウサギは広場よりももつと先の遠い方角へと指を向け、

「どこかあの辺りだったかな。ファルコム皇帝の宿泊施設がある。

リズはそこに居る」

「え、ちよつと待って。皇帝がここに来ているの？」

「ああ。公務を放棄して本国を離れる皇帝って珍しいだろう？」

「珍しいも何も、普通に考えてあり得ないでしょ。それにここは特別施設が建てられないから来ないはずなのに」

ハハと笑ってウサギ。

「あの皇帝は変わり者だからな。独裁者だからって冷徹なイメージを持つ人が多いが、実際はイベント好きの変なおっさんだ」

「変なおっさんって……。あんだ、自分の国の皇帝でしょ？」

「いいんだ。オレ、アイツ嫌いだし」

「嫌いつて……」

「じゃ、そういうことで。オレはいつまでもお前に構っている暇はないんだ。あとは一人でやれるだろう？ 頑張れよ。じゃあな」

再びくるりと踵を返すウサギの背を、またまたむんずと掴んで引き止める。

「ちよつと待ってよ。私なんかが入れてもらえるわけないじゃない」

「だろっね」

「『だろっね』って、私のことをからかっているの？」

「からかっているよ」

カチンと頭にくる。怒りをぶつけるかのごとくミリアーノはウサギの背を思いきり叩いた。

「ちよっ……ふざけないで！ 私は真剣なのよ！ あれはお母さんの大事な形見なんだから！ 私の気持ちを知りもしないで、よくそんなことが」

ウサギが吐いたため息がミリアーノの言葉を止める。

雰囲気は圧されて思わず身を引く。

「な、なによ」

ウサギはミリアーノともう一度向き合うつと、苛立たしげに指を突きつけ言ってきた。

「もうこの際だ。リズには黙ってると言われていたんだがハッキリ言ってる。」

リズはお前とサシで勝負をしたがっている。決勝戦でな。

お前が本当にシンシア・ラステルクの娘なら神具はイベントで取り戻せ」

ポシエットからフレスヴァが怒り心頭に顔を出す。

「黙って聞いていれば何たる物言い！」

「ごめんフレスヴァ。ちよっと黙ってて」

ミリアーノはフレスヴァをポシエットの中に押し込んだ。

そして真剣に、

「だから私の神具を奪ったというの？」

「このままあの神具を宝の持ち腐れにする気か？ 白羽使い。扱えないならリズにくれてやれ」

「お母さんの大事な形見だっけって言うているでしょ」

「だったらイベントに参加して取り戻してみろよ」

「参加って そんなすぐに私に仲間が集まるわけじゃない」

「イベントに参加する仲間が居ないならオレが集めてやる。それでいいだろう？」

ミリアーノは怪訝に顔をしかめて首を傾げた。

「どういうつもり？ それ」

お手上げをしてウサギ。

「リズムもそうだが、オレも見てみたいと思ったんだよ。白羽神具の生み出す幻影を。けどお前にやる気がないんなら」

「私、国からの推薦状も何も持つていないわ。それでもいいの？」

「参加は可能だ。昔のルールは全部オレが変えた。最高で最強の幻影を出せれば誰も文句は言わない。他に質問はあるか？」

「神具も無しに私に参加しろって言うの？」

「それがどうした？ 無いなら作ればいい。それが出来る仲間を今から探してやる。他に質問は？」

「無いわ」

「よし。それじゃ最終選択だ。どっちかに決めろ。」

「ここで解散か？ それともこのまま仲間探しか？」

「仲間探しに協力して」

二、奪われた神具【8】

大通りへと出て、ミリアーノはウサギの着ぐるみ姿の彼とともに街中を歩いていった。

先へ先へとどんどん進んでいく彼の後ろを半ば駆け足でついていきながら、ミリアーノは問う。

「ねえ、誰か紹介したい人でもいるの？」

急にウサギが足を止めた。

その背にぶつかる。

「痛っ！」

ぶつけた鼻頭を手で押さえ、ミリアーノは文句を言う。

「ちよつと、急に止まんないでよね」

「なあお前……」

そこで言葉を一旦区切り、呆れるように顔を手で覆って項垂れてから続ける。

「もしかしてさっきからずっと馬鹿みたいにオレの後をついてきていたのか？」

「ば、馬鹿って何よ。そんな言い方」

「よし。じゃあこうしよう」

急に明るく気持ちを切り替えるウサギに、ミリアーノはテンションを合わせられずに肩をコケさせる。

「な、何なの？」

「仲間探しはこの範囲でやろう。さあ適当に選んでこい」

驚き顔で目を瞬かせてミリアーノ。

「『さあ適当に』って……何を、どうやって？」

「適当だよ。この辺をざっと見回してみても気に入った奴に声をかけていくんだ。魔法使いと道具屋はすぐに見つかるだろうから」

「え？」

「いや、『え?』って……周りを見ればわかるだろう? この街で店を出している奴はみんな道具屋だ。道具屋なんて腐るほどいる。魔法使いも同じだ。魔法が使えれば魔法使い。使い手も神具を持っていけば使い手だ」

「なんかすごく当たり前のことを言われている気がするんだけど」「当たり前のことを言っているんだ。まさかオレに手取り足取り探してもらおうとか考えていたわけじゃないだろうな?」

「違うの?」

「ただオレに気を許してんだ。言つとくが、イベントが始まればオレはお前の敵になるんだからな。わかっているのか?」

「え?」

「は?」

「決勝戦に行くまで手伝ってくれるんじゃないの?」

「何の義理でオレがそこまで世話しなければならなんだ?」

「……」

ミリアーノは半眼になってぼそりと、

「神具どろぼー」

「誰がだ。持っていたのはリスだ。オレに言うなよ」

「わかったわよ。　で?　ここにいる人たちに片っ端から声を掛けていけばいいの?」

げんなりとした声でウサギ。

「オイ。そんなことしたら日が暮れるぞ、白羽使い」

「じゃあどうすればいいの?」

「もっと順序良く効率的に探せ」

「わかったわ。近くににいる人から順に範囲を広げていけばいいのね」「余計悪化している」

「え?」

「もういい、わかった。　よし、そうだな。こつしよ。まずは知識者を先に探すんだ、白羽使い」

「知識者ってどんな人を探せばいいの?　本を持っている賢そうな

優等生タイプの人？」

「うーん……」

ウサギは唸り考え込む。耳元 たぶん本人の位置では頭を掻きながら、

「そうだなあ。どう言えばいいんだろう。えっと……。まあいいか。詳しく説明してもアレだしな。

じゃあ今から問題を出すから、それを一字一句間違わずに暗記しろ」

「暗記？」

「そうだ。一字一句間違わずに、だ」

するとポシエットから得意げ顔でフレスヴァが顔を出す。

「暗記とあらば、このわたくしめにお任せを！」

「そうね。任せたわ」

ウサギが身を屈めてフレスヴァと位置を合わせる。

「よし。じゃあ今から言うぞ。

卵に三十パーセント未満の魔力を込めたでしょう。それを塩水に浸した布で丁寧に巻いた後、暗所で半日寝かせてみた。その後、直射日光の下で布を取って卵を風にさらした。

さて、その卵はどうなったと思う？」

顔をしかめてミリアーノ。

「なにそれ？」

問い掛けに、ウサギがミリアーノへと顔を向ける。

「簡単なテストだよ。これの正解を言える奴が知識者だ」

ミリアーノはポシエットにいるフレスヴァへと視線を落とした。

「知識者のテストだって。正解わかる？」

フレスヴァがきつぱりと即答する。

「その問題は専門外でございますな」

ミリアーノはウサギへと視線を戻した。

「だそうよ。どうしよう」

「『どうしよう』じゃねえだろ。オレにどうしろって言っただ？」

「知識者ねえ……」

ミリアーノはぐるりと街中を見回してため息をつく。

「見つかりそうにないわね」

「諦め早すぎだろ、白羽使い」

「でもすごいよね、知識者って。こういう問題が本当に解けるの？」

「まあな。だからこそ見つけ出すのがけっこう難しいんだが」

「その問題、私が解いてあげる」

会話に割り込んできた幼くかわいらしい声に、ミリアーノとウサギは目を向けた。

いつの間に傍に来ていたのだろう。そこには長い栗色の巻髪をした翡翠色の瞳の女の子が、愛想ない顔でぼつんと立っていた。

歳は七つそこそこだろう。

見た感じ、名のあるご令嬢といったところか。黒いドレスに、頭には白いレースで結ったリボン。フリルの付いたシヨルダーバックに、手にはかわいい熊のぬいぐるみを抱いていた。

二、奪われた神具【9】

女の子はミリアーノを見つめて淡々とした口調で答える。

「正解は『爆発する』だよ」

ミリアーノは首を傾げた。

「爆発する？ どういうこと？」

「神具を作る際、魔力は必ず三十パーセント以上じゃないとダメ。それ以下は全部アウト。」

あと卵に塩水はダメ。海で生まれたモノじゃないから純粋な水に浸した布でなければならぬ。暗所で半日は正解。仕上げをするまで直射日光は禁止。あと風もダメ。風の入らない暗所で布を取って、最後に人の息をそつと吹きかけるの。

これで神具は完成。幻影は鶏。ただ見て楽しむだけのもの。イベントでは役に立たない代物ね」

「す、すこい……」

ミリアーノは呆気に取られた顔で目を丸くし、感嘆の声をもらした。

解説し終えた女の子は鋭い目でウサギを睨みやり訊ねる。

「そうでしょう？ クレイシス」

「え？」

ミリアーノも追うように視線を向ければ、隣にいたはずのウサギはいつの間にか距離を置いた場所で背中を向けて固まっており、その場から逃げ出そうとしている格好だった。

ウサギはぎこちなく首を回し、引きつる声で答える。

「き、奇遇だな、サラ」

女の子 サラは肩を竦めて呆れる。

「素人相手に難題を出すなんて相変わらず面白いことしているのね。知識者が私じゃ不満？」

慌てて両手を振ってウサギ。

「そ、そうじゃなくて……えっと、その、なんだ。あれだ。こんなところで何しているんだ？」

「退屈しのぎの散歩よ。あなたが早く捕まってくれないからイベントの登録が出来なくて暇なの」

「そ、そっか。悪いな、毎年迷惑かけて」

「気にしてないわ。結末としてあなたが捕まってくればそれでいいから。試したい神具の知識があるの」

「それ試す際、オレに『死ぬほどの膨大な魔力を出せ』なんて命令しないよな？」

サラは平然とした顔で答える。

「換えの魔法使いなんていくらでもいるわ」

「よし、サラ。まずは命の大切さについて学ぶことから始めてみようか」

「興味があれば学んでみるわ」

ミリアーノは身を屈めてサラの視線に合わせた。

「ねえサラちゃん。あなたクレイシスと知り合い？」

「そんなところね」

「知識者、だよな？ もし登録がまだだったら私の仲間になってくれない？」

サラはツンとそっぽ向いて、

「お断りするわ」

即答で切り捨てられ、ミリアーノの気分は深海のごとく沈んだ。

その場に膝を抱えてうずくまる。陰気くさくブツブツと、

「いいんだ、私なんて……」

「ミリアーノお嬢様」

フレスヴァが慌てて励ます。

「そんなことありませんぞ。わたくしめがついております。絶対にそんなことは 元気をお出しく下さい」

その間にウサギがサラに詰め寄り、声を落として頼み込む。

「悪い、サラ。さつきコイツが言ったこと、あの皇帝には内緒にしないでくれないか？ コイツをオレの事情に巻き込みたくないんだ」
サラは顔色変えずに「別にいいけど」と退屈そうに呟いて、くると方向転換した。

去り際に言葉を残す。

「他人の心配よりも自分の心配をしたらどうなの？ クレイシス。ついでに言っておくけど、イベントの出場登録期限は今日までだから。次にあなたに出会った時、目が虚ろで決められた言葉しか話さない廃人になっていないことを祈っているわ」

サラはそれだけを告げると、てくてくと人ごみに紛れ歩いていった。

見送って、ウサギが呟き漏らす。

「強制参加かよ……」

盗み聞きしたわけじゃないけども。

ミリアーノはウサギのところへと歩み寄る。

「ねえ、あの子何者なの？」

「知識者だよ。愛国心の強いフルコム大帝国宰相の愛娘だ」

「……。私、声を掛けちゃいけない人に声掛けちゃった？」

「ああそうだな」

ウサギは屈んでいた腰を起こし、立ち上がった。

「ここでお別れだ、白羽使い」

「え？」

「これ以上一緒に居ても仕方ないだろう？ あとはオレが言った通りに探して行け」

「で、でも！」

「探す相手はあと三人だ。知識者、魔法使い、道具屋。わかったな？」

告げて、ウサギは背を向けた。

ミリアーノはその背を掴もうとして。
察したのか、ウサギが忠告してくる。

「ファルコム大帝国に関わるつもりか？」

その言葉に、ミリアーノは手を止める。

「そつだよね……」

宙に浮かせた手を引き寄せて、ミリアーノはくるりと背を向けた。後ろ手を組んで、わざと明るく振舞う。

「大丈夫だよ。あとは一人で何とか探してみる。色々ありがとね」

「……」

無言で。ウサギは背を向けたまま歩き出す。

それをちらりと一瞬見送って。

ミリアーノは気分を紛らわせるようにポシエットのフレスヴァに声を掛けた。

「さてと。仲間を探そう、フレスヴァ。手伝って」

「御意に」

手っ取り早く、今通り過ぎた鳥人民族に声を掛ける。

「すみません。この近くに、邪悪な服を着て暖炉で毒々しく煮えたぎる大釜の液体をかき混ぜながら『イーヒッヒ』と笑う老婆の魔法使いを知りませんか？」

「どんな魔法使いを仲間にする気だ、白羽使い！」

少し離れた場所で、ウサギが突っ込みを入れてきた。

二、奪われた神具【10】

そして。

息抜きに街の外れに出て、深呼吸をする。

青々とした丈の短い草原が広がる大地。でも広大というわけではない。どちらかといえば街沿いを囲むちょっとした庭、と表現した方が正しいか。

ここから真っ直ぐに程よく歩いていけば、もう島の端だ。

でもこれは島が狭いのではなく、島に許可されたスペースぎりぎりまで街が広がっているということなのだ。

島の端へと向かって歩きつつ、ミリアーノは肩を落としてため息をついた。

「あゝあ。仲間探して、なんでこんなに難しいんだろう」

そして島の端 崖のように切り立った場所 に辿り着くと、その先端に腰を掛ける。島の外へと足を投げ出し、そのままぶらぶらさせた。

退屈そうに地上を覗き込む。

八つ当たりするように手短にあった草をむしって、崖下 地上に投げ落とす。

パラパラと。

舞い落ちていく緑の葉。

それを見つめながら、ミリアーノは愚痴る。

「誰もみんな苦笑い。イベントに参加するなんて馬鹿げているのかなあ？」

足の下に広がる白い絨毯のような雲。その時々に見える青い海。

火竜の背から見る風景とは、また違う風景。

まるで地上を見下ろす天使にでもなったかのような気分で、とて

もしい眺めだった。

座る場所に生えた草、そして海の青を見ると、なんだか気持ちが落ち着いてくる。

故郷が森と水に恵まれた豊かな国だから。

気付けば自然と、故郷の歌を口にしていた。

そんなミリアーノの隣に、ウサギが疲れたように腰を下ろす。

「お気楽な奴だな」

「え？」

「毎日悩みなんてないだろう？」

「あるわよ、失礼ね。今だって上手く仲間探しもできなくて」

「お前がこだわるからだろう？ 誰でもいいんだよ、仲間なんて」

「だって、やっぱりこう……なんていうの？ 拳で語り合えるよう

な、熱血あふれる猛者を」

「格闘士でも目指すつもりか？ 白羽使い」

「でも二次予選は戦闘なんですよ？」

「戦うのは人じゃなく幻影だ」

呆れるようにため息を吐いて、ウサギは背中を倒して草原に寝転がった。

こちらに背中を向けたまま素っ気ない声で訊いてくる。

「この島には何しに来たんだ？ 白羽使い」

「前にも話したでしょ。夢でお母さんに誘われたって。ただそれだけよ」

「それだけか？」

「他に理由があつた方がいい？」

「……。いや、もういい。期待したオレが馬鹿だった」

小うるさそうに手で払って、それ以上何も言っただけになった。

ミリアーノは不思議に小首を傾げて訊ねた。

「そういえば、どうしてクレイシスはイベントに参加したくないの？」

「お前には関係ない」

言い方にムツとしたミリアーノはツンと顔を背けると、口を尖らせてばそりと続けた。

「何が最強の魔法使いよ。クレイシスって逃げてばかりですごく弱そう。やっぱり魔法使いといえば邪悪な服を着て暖炉で毒々しく煮えたぎる液体の入った大釜をかき混ぜながら『イーヒツヒ』と」

「魔法使いにどんなイメージを抱いているんだ、お前は！」

ウサギが勢いよく身を起こして突っ込んできた。

ミリアーノはウサギへと向き直ると真顔できっぱりと言いつつ。

「そう思わない？」

「……………」

口を閉ざして沈黙したまま、ウサギは再びこちらに背を向けて寝転がった。

「無視、か」

そう呟いて。ミリアーノは空へと視線を流すと、止めていた歌の続きを再開した。

何呼吸かの無言を置き。

ぼそりと急に、ウサギが認める。

「まあな」

「やっぱりね。魔法使いは」

「違う。オレが言っているのはそこじゃない。人としての弱さの」とを言ったんだ」

ミリアーノは目を二、三度瞬かせると、きよとんとした顔で小首を傾げた。

「人としての弱さ？」

二、奪われた神具【11】

「お前がオレのことを『弱そう』と言うから、ほんとそうだよなと思っただ」

ウサギは片手を顔前へと持っていくと、無言でしばらくそれを見つめる。

やがて何かを思い噛み締めるようにきつく握り締めていくと、止めていた言葉を続けた。

「戦うだけの力は持っているのに、それをせずに逃げ回っている。それって結局負け犬と一緒になんだよな」

「戦うって、誰と？」

問いかけてみたが、それに対する答えは返らなかった。代わりに、「なあ、白羽使い。聖樹の森帝国って聞いたことあるか？」

聖樹の森帝国……？

ミリアーノは聞き覚えのない言葉に首を傾げた後、静かに首を横に振った。

「聞いたことないわ」

「だよな。オレの故郷、本当はそういう名前なんだ」

「え？ でもあなた、ファルコム大帝国だって」

「五年ほど前にファルコム大帝国の攻撃を受けて消滅したんだ。その後、土地を占領されて仕方なくそう名乗っているだけだ。噂じゃ誰かがイベントで失敗したんじゃないかって云われている」

ミリアーノは身を乗り出して迫った。

「本当なの？ それ」

「別に珍しい話じゃない。この島は世界中の人間が集まる場所だ。関わらずに済んだことに関わるはめになるなんてことはよくある」と。そんな覚悟もなくこの島に来たなんてどうかしている

「そう……」

俯いて、ミリアーノは膝を折りたたみ身を丸めた。今頃になって、あの口うるさかったフレスヴァの言葉が身にしみる。

(私、本当にこの島に来てよかったのかなあ)

母のことだ。きっとそれが何かの縁だというに決まっている。

「なあ、白羽使い」

呼ばれ、ミリアーノはウサギへと視線を向けた。

相変わらず背中向けたままのウサギ。その状態で質問を続けてくる。

「お前はイベントに参加すること、怖くないのか？」

ミリアーノは膝に顔を埋めたまま答える。

「……わかんない」

「頼みがある。イベントに参加して、オレ達のチームを潰してくれないか？」

「え？」

「お前にはリズに勝てる力がある」

リズさんに勝てる……？ 私が？

彼の言葉が信じられずに、ミリアーノは呆けた顔で頭を横に傾けた。

ウサギが静かに上半身を起こす。そして気持ちを切り替えるように自嘲し、肩を竦めてみせる。

「なあーんてな。なんでオレ、お前にこんなこと話したんだろう？」

お前に話したら何かが変わるとでも思ったのかな？」

「ねえクレイシス」

「ん？」

ミリアーノは真剣に、言葉を切り出した。

「私の仲間になってよ。そうすれば、きっと何かが変わる気がする」
「変わる？」

「本当は嫌なんでしょう？ 故郷を攻撃した帝国の名を背負って参加すること」

ウサギが鼻で笑う。

「オレにファルコム大帝国を裏切れって言うのか？」

「だって嫌なんでしょう？ ファルコム大帝国の名前で参加するのは」

「まあな」

「じゃあ私の仲間になつてよ。イベントで勝つて神具を奉納して、そしてお願いごとをするの。『もう戦争をするのはやめよう』って。そしたら戦争なんてこの世からなくなる。ファルコム大帝国に逆らつても大丈夫になる。みんな自由になれて誰にも怯えることなく平和に暮らせる。ね？ そうしない？」

……。

冷めた口調でウサギ。

「平和な頭してんだな、白羽使い。毎日悩みなんてないだろう？」

「だからあるって言っているでしょ！」

「勝てる自信はあるのか？」

……。

ミリアーノは言葉を少しためらったが、やがて真剣な顔をして胸を張り、ハッキリと答えを返す。

「あるよ」

「それはオレの言葉を鵜呑みにしての自信じゃないよな？」

「リスさんだってあなたが欠けるんだから何かが変わるはずでしょ？」

「オレが欠けたらチームの力が変わるとでも思っているのか？」

「それじゃあなたはチームに居ても居なくてもいい存在だった。違う？」

「面白いこと言う奴だな、白羽使い。オレの魔法使いとしての実力を馬鹿にしているのか？」

「だったら最初から誘わない。そうでしょ？」

言つて、ミリアーノはウサギへと右手を差し出した。

ウサギはその手をしばし考え込むように見つめた後。 。
差し出したその手を掴んで握手を交わした。

「いいだろう。乗った。ただし、その言葉には責任を持ってよ。もしお前が負けるようなことがあれば、お前もオレも共に地獄行きだ」
「わかったわ」

ミリアーノは握手を解いて勢いよくその場を立ち上がる。

「そうと決まれば善は急げよね。残る仲間はおと……魔法使い、使
い手、えっと」

指折り数えていく。

「道具屋、知識者 二人だ。大丈夫か？ 白羽使い」

「そう二人。道具屋と知識者ね。なんだかやる気がみなぎってきた
わ」

やる気を出すミリアーノをよそに、ウサギがテンションを落と
して頭を抱える。

「オレは急に不安がみなぎってきた」

「休憩は終わり。さっそく探しに行きましょう。フレスヴァも居る
から大丈夫よ。 ね？ そうでしょ、フレスヴァ」

ばふ。

ポシエットに手を当ててはじめて気付く、空気の抜ける音。異様
なポシエットの軽さ。

(あれ……?)

忘れている？ いや、そんなはずはない。

そんな自分を認めたくなくて、でも現実には居ないわけで。

目を点にして何度もポシエットを叩いてみるミリアーノ。

だが何か入っている感触はないし、聞こえてくるのも抜ける音だ
け。

そついや変に静かだと思っていたのよね。さっきから。

ミリアーノの異常な行動が気になったのか、ウサギが首を傾げて
訊ねてくる。

「何しているんだ？」

呆け顔でミリアーノ。いつからこんなに軽かったかを虚空を見つ
めて脳裏で探る。

探りながら、心あらずの声で答える。

「……居ないの」

「何が？」

「フレスヴァ」

「なんだそれ」

「私の鳥」

「あーあれか。そういやお前、たしかどこかの道具屋で小さな瓶かめに中に入れて遊んでなかったか？」

……。

みるみる蘇ってくる記憶。

ミリアーノはハツと思い出して叫んだ。

「あー！ あの時蓋ふたを閉めたまま忘れてきちゃった！」

「おーい……」

二、奪われた神具【12】

とある道具屋で。

所用で少し店を空けていたその店の主　小麦色に焼けた肌、短い朱髪をツンツンに逆立てた青年　は、番台へと戻ってきた。

陳列台に変わりなく並ぶ見飽きた売り物。それを退屈そうに眺めてため息を落とす。

「店主の居ない間に売り物が盗られんとか、あり得んやろ」

一つも欠けることなくきれいに並んだ売り物イコール客が来ていない証拠だ。

「あ。これちよつと位置ずれてんな」

少し横に移動している小さな瓶を元の位置に戻す。

誰か来て触って、そのまま置いたか。

「ここは神々の島やし、盗る方があり得んか」

ふと、さきほど位置を修正した小さな瓶が、ひとりでにカタンと動く。そして声。

「あの、すみませんがその人」

「ん？」

青年は目を向ける。

小さな瓶の中から、何やら微かに声が漏れ聞こえてきているようだ。

「そこの人、わたくしめの声が聞こえておりますかー？」

「なんやっ！　売り物が急にしゃべるようになったる！」

青年は反射的に席を立ち、怯えるように身を引いた。
なんとなく防御の構えを取る。

……。

なぜか急に静かになった。

青年は防御の構えを崩し、その小さな瓶と距離を置きながらも興味津々に眺める。

「すげー気味悪。誰かのイタズラか？」

虫といって投げられたモノが草だった。そんな幼稚なイタズラを思い出す。

「……つたく、アホくさ。誰や、こんな夕子の悪いイタズラ仕組んだのは」

青年は気だるく陳列台に身を乗り出すと、さきほどの小さな瓶を小馬鹿にするように指で弾いた。

カタカタと揺れる小さな瓶。

それを合図にするかのように、再び声が聞こえてくる。

「ミリアーノお嬢様！ そこにいらっしやるんでしようー！」

「だあッ！ なんやこれ！」

青年は怯えるようにその場から飛び退いた。

悪寒に総毛立つ鳥肌に両腕をさすり、声を震わせる。

「幽霊の仕業とかあり得んやろ、昼間やし。あーでもここは神々の島やし、死んだら神様んとこ逝く言っし。幽霊か？ やっぱ幽霊の仕業か？」

するとタイミング合わせるように肩を叩かれる。

「よおグランツエ」

「うわっ！」

飛び上がって驚く店主の青年　グランツエ。

肩を叩いた友人　耳長民族の青年も飛び退いて驚く。

「な、なんだよ、肩叩いて声掛けただけじゃねえか。そんなに驚く

なよ」

「いきなり声掛けんなや！」

「何をそんなに驚いてんだ？」

「つてかコレ、お前らの仕業やる！ 俺を驚かして何が楽しいんや

！」

「は？」

耳長民族の青年は間抜けな顔で問い返す。

そんな時、店の客から声が掛かる。

「雰囲気の悪い店だなあオイ。喧嘩でも始める気か？」

視線を向ければ、洒落た服を着た二人の友人　鳥民族とドワ

ーフ族の青年　が、客として遊びに来ていた。まあ客というより、

「相変わらずこの店には客が居ないのか？ グランツェ」

「なんなら俺らがサクラになつてやろうか？」

半眼で、グランツェは鬱陶しく手で払って追い出す。

「何の用や。冷やかしたら帰れ」

その様子に三人の友人　肩を叩いてきた耳長民族の青年と客と

して来た二人の友人　は、互いに顔を見合わせて笑う。

「寂しい奴だなあ」

「せつかく遊びに来てやつたのによお」

「売れない腹いせに八つ当たりか？」

「うるせえ、帰れ。商売の邪魔や」

グランツェはさきほどよりも強く、手を払って彼らを追い出す。

ドワーフ族の青年が店の商品を手に取って眺める。

「売れるのか？　こんなの」

グランツェはすぐさまその売り物を奪い取って、

「ほつとけや、ほんまに」

元の位置に戻す。

「つたく。お前らやる？　大事な売り物にイタズラしたんは」

鳥民族の青年が首を傾げて問い返す。

「は？　イタズラつて何のことだよ」

「とぼけんなや。瓶がしゃべるように細工したやろ」

ブツ、と。思わぬ言葉に三人の友人は同時に噴き出し、笑い堪えた。

拳を固めてグランツエ。

「お前ら、今すぐえ俺のこと馬鹿にしてんやろ」

笑いで引きつる顔をどうにか抑えながら、耳長民族の青年が答える。

「いや、だつてお前……」

同じく腹に手を当てて笑い耐えながらドワーフ族の青年と鳥人民族の青年。

「平和ボケなこの島で、ついに頭がイカレたか？」

「商売繁盛しなくて悩んでいたのは知っていたが、お前とうとう……
……くくつ」

「待てやお前ら。しかも『ついに』とか『とうとう』ってどういう意味や？」

訊ねるグランツエに耐え切れなくなった三人の友人は、とうとう盛大に笑い始めた。

ひいひい笑いながら、

「あー笑い過ぎて腹痛えー」

「面白え奴だよなグランツエ」

「しゃべる瓶だつて、しゃべる……だははは！」

グランツエは呆れるようにため息を吐いて、三人をそれぞれ面倒くさそうに手で払う。

「笑い過ぎや、お前ら。もういいから帰れ。商売の邪魔や」

「あー悪い。もう笑わねえってグランツエ」

「機嫌なおせよ」

「しゃべるだつて……しゃべる、だははは！」

一人笑う耳長民族の青年を、二人の友人とグランツエが同時に睨む。

三方向からの鋭い視線を向けられ、耳長民族の青年が畏縮するよ

うに笑いを消して謝る。

「ごめん……」

ドワーフ民族の青年が咳払いして取り直し、改めてグランツェに真面目に話しかける。

「お前が古風重んじる家系に生まれたのはわかるが……その、なんだ？　なんとというか、道具屋なんだからもつとこつ派手にやらねえか？　コイツんとこなんか剣と槍を扱いだしたんだぜ？」

鳥民族の青年が胸を張る。

「すげえだろ？」

「ふーん」

さも興味なく適当に相槌打って、グランツェは台の下から古布を取り出すと売り物を磨き始めた。

耳長民族の青年が売り物の一つである古びた碗わんを手に取って、顔を歪める。

「こんなダセエ道具なんて売って何がしたいんだ？　もつとこつ俺たちと一緒に派手にやらねえか？」

顔も合わせずグランツェは答える。

「んなことは俺の祖父ちゃんに言ってくれや」

陳列台に身を乗り出して鳥民族の青年。

「お前なあ。俺らがこんなに誘ってんのにいつまで意地張る気だよ？　そんな似合いもしいない田舎者の格好してガラクタなんか売って何が面白いんだ？　もつと輝けよ。お前の人生だろ？　古いこだわりに意地張ってないで、俺たちみたいにデザインにこだわった力ツコイイ服とか着てさ、若者相手に剣とかダガーとか売って儲けるよ。じゃねえとお前の店、本当に潰れちまうぜ？」

「そつだよグランツェ。俺らと一緒に店やろうぜ？　な？」

「毎年優勝している道具屋なんて見るよ。すげえモン扱ってんだぜ

？ 俺らもそういつのを見習ってさ、色んな武器を取り揃えてみるつてのはどうだ？ お前もそういつのに憧れているって言ったじゃねえか、グランツェ」

「そうだよ。そしてゆくゆくはチームに入れてもらって強そうな魔法使いとタッグ組んでさ、道具屋の聖地であるこの島のイベントに参加して、使い手が俺らの道具でカッコイイ幻影を生み出して優勝するんだ。考えただけでも最高だろ？ な？」

グランツェはうんざりとはかりに肩を落として重いため息を吐く。磨く手を休めず、言葉を返す。

「俺かて色々と家の事情があるんや。人生がくすもうと店が傾こうと俺の知ったことやない。道具が売ればそれでいいんや。お前からこそ、いつまでも俺に構っている場合やないやろ？ 早くチームに入れてもらわんと、それこそ俺と共倒れや」

耳長民族の青年がグランツェの肩をぽんぽんと叩く。去り際に、

「あーあ。お前、道具屋としてイイ腕してんのにもつたないよな」

ドワーフ民族の青年もお手上げしながら去り際に、

「気が変わったらいつでも声かけるよ」

「とりあえずコレ一本だけでも試しに売ってみる」

と、鳥人民族の青年が陳列台の上に一本のダガーを置いていく。

慌てて顔を上げるグランツェ。

「あ。お前勝手にこんなモン　！」

「売れば問題ないだろ？ じゃあな」

「ちょ、待てや！ 売れなかつたらどうするんや！」

さあな。とばかりに肩をすくめて、素知らぬ顔で鳥人民族の青年も去っていく。

「おい！」

再度グランツェが声を掛けたが、三人の友人はこちらを振り向きもせずに人ごみの中へと消えていった。

「はあ……」

ため息を吐いて。グランツェは気が抜けたように頂垂れ、陳列台へと視線を落とす。

「ったく。俺にどうしてほしいんや？ アイツ等は」

愚痴りながらも自然と、グランツェの目は友人が置いていったダガーへと流れていく。

流行のものというだけあって、やはり一番輝いて見える。

つい見入ってしまった、思わず手がダガーへと伸びていく。

恐る恐るといった感じにそれを手に取り、見つめる。

黒の柄に竜の彫りこみが入った、今人気のデザインだった。

「こんなところで仕入れてくるんや？ アイツ」

観察ついでに色んな角度から眺め回す。

鋭い両刃に白い煌きが走る。

（この刃……あの有名流派の鍛冶師の癖が出てる。なんでこんなモンを造って）

そんな時だった。

「あのっ！」

ふいに掛けられた幼い少年の声に、グランツェは我に返って顔を上げた。

二、奪われた神具【13】

店に訪れたのは変声期のまだきていない少年だった。

白髪に白狼耳、そしてふさふさの白い尻尾。北大陸に生息する獣民族の子供だった。

グランツェはため息をつく。

（なんや。氷河大帝国のガキやないか）

見た目十二歳そこそこか。ずり落ちそうな大きな眼鏡　おそろくサイズが合っていないのだろう　の位置を何度も手で正しながら、その少年は懸命に背伸びをしていた。

少年は恐る恐るといった口調で訊ねてくる。

「あ、あの、その……」

「なんや。早よ言えや」

「あ、あの……か、買いたいんです」

「何を？」

「こ、この、しゃべる瓶を買いたいんです……」

「しゃべる瓶やと？」

グランツェは嫌々ながらも陳列台に手を伸ばし、そこに並べていた『しゃべる瓶』を手に取った。

「この瓶が欲しいんか？　坊主」

と、見せる。

しかし少年はなぜか急に行動が落ち着かなくなり、おろおろもじもじと気恥ずかしそうに顔を俯けて髪を何度も手でとき始める。

「あ、あの、僕のこの髪型は坊主ではなくフレッシュア・カットと
いいまして」

「無茶苦茶腹立つガキやな。坊主ってのは愛想や。お前の髪型なんてどうでもええねん」

「す、すす、すみません！　ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

い

謝ると同時に何度も陳列台に頭を打ちつける。

その度に台の上の売り物が今にも割れそうな音を立てて弾んだ。

「もうわかったからやめろ。これ以上やると大事な売り物が壊れる」

「え、あつ、す、すす、すみません！ ごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい」

さらに激しい音を立てて弾みだす売り物。いくつかの売り物が割れたのを目で確認した後、グランツェは重いため息を吐いた。別の売り物を手に取って見せる。

「これじゃダメか？」

少年がピタと動きを止め、グランツェの見せる売り物をじっと見つめる。

そして静かに首を横に振った。

「それではなく、僕はその『しゃべる瓶』が買いたいんです
と、さきほどの瓶に指を向ける。

「そんなにこれがええんか？」

「はい。僕はそれが欲しいんです」

「変なガキやなあ。しゃべる瓶が気味悪いとか思わんのか？」

すると少年は急に気分を沈ませ、自分の尻尾をぎゅっと抱きしめて心境を語り始めた。

「いえ、あの実は……僕には友達がいらないんです。だから話し相手がどうしても欲しくて……その……」

陰気くさくブツブツと、語尾は何を言っているのか聞き取れない。グランツェはあまりの苛立ちに頭をかき乱して、お人よしに小言を一つ。

「あのなあ坊主。友達っていうのは自分で探してなんぼのもんや。

自分から友達探しに行かんと、いつまで経っても一人やで？」

「い、いいんです。僕、みんなに嫌われていますから……」

「あーもうええ。わかった」

グランツェは少年の前に瓶をドンと置いた。

「売ってやるから金出せ。三百や」
途端に少年の表情がぱあっと輝く。

「ほ、本当ですか!」

「売らんと何の為に商売しているのかわからんやろ?」

「ありがとうございます!」

少年は袋財布からルビーを三個取り出すと、台の上に置いた。

それを受け取り、グランツェは瓶を少年に手渡す。

「毎度。また来いよ」

「はい!」

少年は礼を言っ瓶を胸に抱き、嬉しそうにスキップしながら雑踏の中へと消えていった。

はあ。と疲れた息を吐いてグランツェ。台に頼杖をつく。

「変なガキ……。なんであんなモンに興味持つかなあ?」

「ねえ!」

「うをつ、びつくりした!」

店に駆け込むや否や発してきた少女の声に、グランツェは驚いて台から飛び起きた。

「なんや、いきなり……」

「ねえ、ここにあった瓶は?」

客としては珍しい、異国の可愛らしい金髪の少女だった。姿形の特徴からして、恐らく東か西の人間種族の濃い地方の出身だと思われる。

グランツェはやる気なさげに売り物を片付けながら答える。

「瓶ってなんのことや?」

「ここよ! ここにあった瓶よ!」

台を激しく叩いて、さきほど瓶があった場所の空間を示してくる。はいはい。とグランツェ。

「その瓶がどうしたんや?」

「私、その瓶の中に大事な鼻を入れたまま忘れていたの!」
ずるり、と。グランツェは肩を滑らせた。どうやらさきほどの」

しゃべる瓶』は幽霊の仕業でもアイツ等のイタズラでもなかったというわけだ。

少女が勢いよく台の上に身を乗り出して問い詰めてくる。

「ねえお願い！　ここにあった瓶はどこにあるの？　なんなら瓶ごと買っわ！」

面倒くさいことになったもんだ。

グランツェは眉間にシワを寄せると小難しい顔で唸り考え込んだ。なんとなく腕も組む。そして申し訳なく本当のことを告げた。

「……悪い。その瓶やったら、さっき売れたんや」

「え！」

シヨックを受けた顔で、少女は力なくその場に崩れ折れた。

二、奪われた神具【14】

遅れて駆けつけてきたウサギの着ぐるみが息を切らしながら少女に訊ねる。

「どうだった？」

「売られちゃったんだって……」

「売られた？ 誰に？」

「わかんない……」

そう呟いて、少女は顔に手を当てて泣き始める。

「私、もう二度とフレスヴァに会えないかもしれない」

おろおろと対応に慌てだすウサギ。

「いや、そのなんだ。泣くなよ、探せば見つかる。オレも一緒に探してやるから」

だが少女は話を聞いていないようで、

「ごめんなさいフレスヴァ！ 私がこんなことしたからいけないんだわ！ こんなことをしたから！」

ひたすら何かに謝り泣き続けている。

その様子をただただ呆然と見ることにできないうさぎは、首を傾げる。

「な、なんや？ いったい」

すると、少女の泣き声で気になったのか、店の前にぞくぞくと人が集まり始めた。

出来上がる人垣。指を向けたり、ひそひそと耳打ちしたりと、なんと異様な空気だ。

その中にいたワニ族の子供が、母親の服を引きながら指を向けて不思議そうに母親に訊ねる。

「ねえ、見てママ。お姉ちゃんがお店の前で泣いているよ」

「見るんじゃないありません。きつと呪いの道具でもあったんでしょ」

それが始まりとばかりに別の方向からも話し声が聞こえてくる。

「ねえ、なんかここであつたの？」

「この道具屋に来た女の子が急に泣き出したのさ」

「でも普通泣くか？」

「泣くほど怖いものを売っていたとか……」

「呪われた品物とか扱ってそうだしな」

「そついや、なんか俺、噂で聞いたことある。この店で物を買った客が次々と謎の奇病に冒されたとか」

ひそひそと囁きあう声に、グランツエの頬は引きつっていった。黙って拳を握り締める。

「え、営業妨害や、コイツ等……」

「なあお前！」

ウサギの着ぐるみがいきなり店の台を叩いて勢いよく迫ってくる。ぐんと近づいてくるウサギの円らな瞳に、グランツエは思わず身を仰け反らせた。

「な、なんや？」

「早く誰に売ったか教えてくれないか？ オレ、こんな場所にいつまでも長居するわけにはいかないんだ」

「更に誤解を広めるようなこと言うなや」

「こんな目立ったらオレの身が危険なんだよ。いいから早く教えてる」

「つてか誰や、お前。さつきから偉そうに」

「今は通りすがりの知らない人ということに気にしないでくれ。色々事情を抱えていて早急にココを立ち去りたいんだ。いいからさつさと教えてる」

グランツエのこめかみに怒りが走る。客相手に感情のまま睨みつけ、ドスの聞いた声で、

「その前にお前の連れをどうにかしたらどうや？ このままじゃ商売あがったりや」

「オレだって昨日会ったばかりの連れだから、どう扱っていいのか

わからないんだ」

「グランツェ！」

威勢の良い老人の怒鳴り声が、周囲の時間を一瞬にして止めた。人々が道を開けてその人物に注目する。

そこに佇んでいたのは一人のシワがれた老人だった。まるで雨に濡れた子猫のように小刻みに震える貧弱な体。小枝のように痩せ衰えた肢体に、ちよっぴり寂しい白髪頭。さきほど叫んだ時に落としたのであるう足元には入れ歯があり、口元は巾着袋の入り口を彷彿とさせるように萎はしんでいた。

ひとときの沈黙を置いた後。

やがて老人は、足元に落としていた入れ歯を拾い上げると、それを何事なく口に入れた。

周囲が苦虫を噛み潰したかのような表情を見せる中、

「祖父ちゃん……」

グランツェは祖父の体を気遣い、心配に呟いた。商売熱心な祖父のことだ。きつとこの騒ぎを聞いて来らざるをえなかったのだろう。グランツェは介助しようと一歩踏み出す。

その時だった！

急に老人の目が獲物を見つけた鷹たかのように鋭く変わる。杖を投げ出し、裾を捲りあげて片足を後方へと引く。

（つて、いきなり何を始める気や祖父ちゃん！）

老人は瞬時に駆け出すと、少女の前を踏み切りにしてトップアスリートをも驚くジャンプを見せた。

周囲から驚きの声上がる。

構えた老人の右足が陽光に煌き、標的位置にいたウサギの頭部めがけてその右足を放ってくる。

振り向きもせず、ウサギが身の危険を感じてサッとその場に座り込む。

「なっ　！」

避けやがった、コイツ！

しまったと思った時にはすでに遅く、ウサギの真ん前に居たグランツェは老人の放った強烈な飛び蹴りを顔面で受けることとなった。

「このスペシャル大たわけ者があああっ！」

老人の蹴りを受けて、グランツェは後方へと吹っ飛び、区画として仕切られていた壁に激突。

……そこで意識は途切れた。

二、奪われた神具【15】

道具屋が連なる道沿いから一本裏手の道は、多くのテント住居が張り巡らされていた。

安全平和なこの島でも夜は何が起こるかわからないからなのだろう。

島の精霊からの借り物の土地でありながらも、人々は地上と変わらない生活を送っている。

洗濯物が干されていたり晩御飯の準備をしたりと、まるで本当の街の暮らしぶりを見ているかのようだ。

その中の一つに、さきほどの老人と道具屋の青年の住居があった。意外に小さく狭い二人用のテント。その入り口付近で。

「なんじゃ。そういうことじゃったのか」

石を置いて造った堀に鍋を置き、それを取り囲むように四人で座って。

老人はミリアーノから事の経緯を聞いて愉快に笑い、そう言った。「ワシはてつきり三角関係のもつれかと想像を膨らませて、つい」「『つい』で孫を蹴り倒すなや、祖父ちゃん」

青年　グランツエが、さきほど蹴られた顔を手で覆ったまま呟く。

本当になんか見ている痛そうに思えるのだが、当人がこんなにも冷静でいるのは慣れているせいだからだろうか。

ぐつぐつと。

鍋からおいしそうな匂いが食欲をそそってくる。

ここでの火の使用は大丈夫なのらしい。おそらくこの土地を支配している精霊が森の精霊と違って火を敵視していないからなのだろう。

う。誰が調べたのかは知らないが、常識のようにここでは普通に使用されている。

ミリアーノはグランツェに向かって申し訳なく謝った。

「本当にごめんなさい。私、あなたのお祖父さんがそんな想像していたなんて全然知らなくて」

「普通そうやるな。だから気にすんなや」

とだけ告げて鍋の中をかき混ぜる。

言葉では許してくれたものの。声には怒りがこもっていた。表情もなんだか不機嫌そうだ。

もう一度謝ろうとミリアーノは口を開きかけたが、隣から無言でウサギが腕を掴んできて「これ以上言わない方がいい」とばかりに首を横に振る。

そうだよ。とミリアーノは元氣なく俯いて口を閉じる。そして、明るい話題に変えようと老人に向き直る。

「ねえ、お爺さん。私の鼻はなが戻かえってくるって本当？」

老人はニカツと歯を見せて笑った。

「ああ。もちろんじゃとも」

それを聞いて、ミリアーノは胸に手を当てホツと安堵の息をつく。「良かった」

老人が一件落着に満足し、腕組みして何度も頷く。

「うむうむ。鳥は飛んで帰ってくるもの。昔から飼かい鳥とはそういう習性をもっておる。ワシが飼かっていた鳥も」

「でもね、お爺さん。鳥は鳥でも私の鼻は体が重くて飛べないの」

ウサギが横から口を挟む。

「つまり珍種の豚だ」

老人が驚く。

「なに、珍種の豚じゃと？ 他所の国では豚のことを鼻と呼ぶのか？」

ミリアーノは全力で首を横に振る。

「ううん、鳥よ。どこの国でも鼻は鼻だから誤解しないで。本当に

鳥なの。でも鳥なんだけど私の梟は体が重くて飛べないの」

老人は考え込むように腕を組んで唸った。

「うーむ、そうじゃったのか……。それならば皆で手分けして探すしかないのお」

そう呟いて、流すように老人はグランツエへと目を向ける。

「ならばグランツエ。お前もこの子達と一緒に、その鳥を探してきてやるんじゃ」

「はあ!?!」

グランツエが明らかに拒絶する態度で顔を歪める。

「なんで俺がコイツ等と一緒に探さな」

「元はと言えばお前がその瓶を他人に売るから悪いんじゃ。責任とって探して来い」

「祖父ちゃん!」

グランツエが拳を握り締めて立ち上がる。

「俺かて商売したんや! 売ただけでも感謝してしてほしいもんや!」

老人も負けじと杖を手に立ち上がる。足腰をヨロヨロと震わせながら、

「感謝じゃと? 道具の良し悪しもわからんヒヨッコのくせに何が商売じゃ!」

ミリアーノは仲裁しようと慌てて立ち上がった。

「えっと、あの」

だが言葉にならない。

再び隣からウサギが腕を掴んでミリアーノを制止する。

「やらせとけ、ミリアーノ」

「でも……」

「不満があるなら言い合った方がいい。それがお互いの為だ」

グランツエが感情任せに老人に怒りをぶつける。

「祖父ちゃんの売る道具なんて全部古びたダセエ骨董品やないか!

今どきはダガーとか槍とか剣とか、そういうモンが売れるんや!」

「この大たわけ者があ！」

老人は喚いて杖を投げ捨てた。

その杖の行方をミリアーノとウサギは目で追う。

「必要なのか？ あの杖は」

「わかんない」

お手上げて首を横に振るミリアーノ。

それをよそに老人はしっかりとした足腰で胸を張り、グランツエをびしっ指さす。

「道具の心もわからんヒヨッコが粋がりおって！ 何が今どきは虎タイガじゃ！ 何が山羊じゃ！ 何が梟じゃ！」

「お爺さん、『梟』は私が言ったんだけど……」

「待てミリアーノ。それ以前に突っ込むべきところはたくさんあったはずだろう？」

ウサギに止められ、「そうだよね」とミリアーノは口を噤む。

老人の愛のこもった説教は続く。

「お前に『道具心』というものがわからん限り、ワシはお前を一人前の道具屋とは認めん！」

「時代はもう変わったんや！ いつまでもそんな古びた精神にこだわっとつたら道具屋として成り立っていけないのや！」

「出て行け！ お前のような孫はもうワシの孫でもなんでもない！ 出て行って好きなようにやるがよい！」

老人の売り言葉を買ったように、グランツエは言い返した。

「分かったよ！ 出て行つたるわ、こんなところ！」
早々とその場を立ち去る。

「待って！」

ミリアーノはグランツエを追いかけようとして 。 だがお爺さんのことが心配になり、振り返る。

その視界に入るウサギ。

ウサギは落ち着き座ったまま、こちらをじっと見ている。
彼ならばこの場を任せられる。

ミリアーノはウサギに頼んだ。

「あなたはお爺さんをお願い」

「あとは任せろ。早く行って来い」

ウサギは面倒くさそうにシッシとミリアーノを手で払った。

二、奪われた神具【16】

グランツエが去った後、老人はその場にぺたりと力なく座り込んだ。
だ。

「ワシかてわかっておったわい、そんなこと」

そう寂しそうに呟いて、懐から古びた木製の聖杯を取り出す。懐かしそうに見つめながら、

「昔は皆、こういう物を求めておったんじゃが……。時代の流れというものが、何もかもが変わっていつてしまうような気がするの。おため息を吐いて頂垂れる。」

すると横からウサギがスツと手を差し伸べる。

「それ、見せてもらっていいですか？」

老人は顔を上げ、

「む？ これか？」

「はい」

「若いのに珍しいの。こういうものに興味があるのか？」

「まあ……そんなところですよ」

老人は気を良くしたようでニカリと笑う。

「そうかそうか。それならばこんなものよりテントの中に」

「あ、いえ。オレはあなたがその手にしている聖杯に興味があるんです」

ウサギは老人の手にする聖杯を指し示した。

腰を浮かせていた老人。再び腰を下ろして「仕方が無い」とばかりに聖杯をウサギに差し出す。

「まあお前さんがそう言うなら見てみなさい。ただのガラクタじゃがのお」

差し出された聖杯を受け取って。

ウサギは聖杯をそつと撫でた。デザインや形などこれといった特

徴はなく、ただ杯としての役割でしかない古びた器。しかも一部分が欠け、大きく亀裂が走っている。普通なら捨てられているはずの物なのだが

「あなたはとても良い目をしてますね、御老人」

「そう思うか？」

「はい。これはとても素晴らしい道具です。オレが魔法をかけてやれば、使い手の力できつと最高の幻影が生み出されると思います」

老人が自慢げに鼻を伸ばして腕を組み、何度も頷く。

「そうじゃろう、そうじゃろう。　ん？　お主、魔法使いじゃったのか？」

「はい。今はちょっと事情があつてこんな格好していますが」

「魔法使いならば今のこの時代は生きにくかるう。幻影を出す為に魔力を奪われ続け、命を落とす者も少なくないと聞く。最近では魔法使いに人権すらも与えない国があると　」

「だからこそ、誰かがそういう国を壊して平和をもたらしてくれれば良いのですが。例えば伝説の女神ミネルヴァの降臨、とか」

「ほお。かの白羽神具の使い手シンシア・ラステルクの再来か」

「はい」

ふむ、と老人は口を濁す。

「じゃが、彼女は一年前に死んでおる。それでもお主は奇跡を信じ続けるのか？」

ウサギは小さく笑った。

「信じたいと、そう思える人物に出会いました」

「ふむ。お主はその人物とイベントに出るつもりか？」

「まあ、そんなところです」

「道具屋は決まっておるのか？」

「いえ、まだです」

「ならばワシの孫を連れて行け。イベントではきつと、お主等の力となるじゃろう」

「それを決めるのは本人と、チームの主力である使い手です」

老人は笑った。

「そうじゃったのお。しばらくイベントに参加せんうちにボケてしまったわい。じゃがのお、これだけは言っておく。ワシの孫を仲間
にせんかったらお主等はきつと後悔するぞい」

「後悔すると思います。こんな素晴らしい道具を取り扱っているのだから」

言つて、ウサギは持っていた聖杯へと視線を落とした。言葉を続ける。

「この聖杯、不死鳥の宿り木から造られていますね？」

老人の表情から一瞬にして笑みが消えた。真顔になり、スツと目を細める。

「ほお。ワシはまだ一言も不死鳥のことは口にしておらんぞ？ なぜわかった？」

「不死鳥の鼓動を感じたんです。……オレを呼んでいます」

「さてはお主、ただの魔法使いではないな？」

ウサギはハツと我に返ると慌てて自分の口を手で塞いだ。

「やはりな」

老人は興味深そうにウサギに迫る。

「何を隠そうその聖杯はお主が言わんとせん『召喚神具』じゃ。それを見分けられる人物はこの世にたった一人。

「ところでお主、名を何と言う？」

「……………」

ウサギは肩を落として重いため息を吐くと、観念して自分の名を口にした。

二、奪われた神具【17】

人ごみの多い街の中で見失ってしまいそうになりながらも、ミリアーノは懸命にグランツェの背中を追いかけた。

「ねえ、待って！」

小うるさく感じてきたのか、グランツェがようやく足を止めてくれた。

やっと追いついて、ミリアーノは彼の傍で腰を折って膝ひざに手をつくと、息を切らしながら言葉を続けた。

「さつき、から、待ってって、言っているでしょ！」

グランツェが面倒くさそうな顔でこちらへと振り返ってくる。

「何の用や？」

「どこへ行く気？」

「どこへ行くこうとお前には関係ないやろ」

そう吐き捨てて、グランツェは再び背を向けて歩き出す。

「もう！ だから待ってって言っているでしょ！」

そんな彼の背中にがしりとしがみついて、ミリアーノは全体重をかけて引き止めた。

疲労のため息を吐いて振り返るグランツェ。

「なんで待たなあかんのや？」

「だって、あなたのお祖父さんが」

「お前には関係ないやろ」

「本当にこのままでいいと思っているの？」

「俺んこの問題や。お前には関係ない。いいから離せ」

振り解いて歩き出す。

「……」

去っていく彼の背をしばらく見つめていたミリアーノだったが、やがて目を鋭くさせると空になった手をぐっと握り締め、大きく息を吸い込んだ。

叫ぶ。

「関係なくないもん！」

さほど距離のない場所で、グランツエがびくっとして振り返ってくる。

「な、なんや、突然」

ミリアーノはなおも叫び続けた。

「あなたが居なくなったらお祖父さんは絶対寂しがるよ！」

「ってか、こんくらいの距離で喚くなや。もちっと声落とせ」

耳をふさいでグランツエ。

だがミリアーノは声を落とさなかった。

「どんなに意見が食い違っても仲直りだけはしないと、あとで絶対後悔する！」

「お前はそうかもしれないけど、俺は俺。ほっとけや、ほんまに」

「ほっとけないもん！ 私だってお父さんと喧嘩して家を飛び出してきちゃって、今すぐ後悔しているんだから！」

この島に行くことにすぐ反対していた父。現実の荒波を知っているからこそ止めてくれたのはわかっていいる。それでもミリアーノは、自分を信じて家を飛び出し、相棒とフレスヴァを連れてこの島にやって来たのだった。

ここに来るまでの辛かったことや寂しかったこと、今頃父はどんな想いをしているかなどを考えると、ミリアーノの目に自然と涙が溜まっていった。でもその涙を流したくなくて、必死に我慢しようと下唇を噛み締める。

「……………」

グランツエが「はあ」とため息を吐いて、ミリアーノの傍へと歩み寄ってくる。

そして、くしゃりとミリアーノの頭を撫でた。

「わかったからもう泣くなや。また祖父ちゃんに誤解されるやろ」
無言でこくりとミリアーノは頷いて、目の涙を手の甲で「じじ」と拭った。

グランツェは続ける。

「勢いで飛び出した手前、俺にもプライドってもんがある。一人で色々と考えたいことがあるんや。酒の一杯でも飲んだら家に帰る性質やからほっとけや、ほんまに」

「……」

一息の間を置いて、ミリアーノはぼそりと、

「意外と素直だったんだ」

「『意外と』ってどういう意味や」

「しかもすごく純粹」

「やかましいわ、アホ」

軽くポンとミリアーノの頭を叩いた後、グランツェはくるりと背を向けた。

歩き出す。

その背を見つめ、ミリアーノに笑顔が戻る。残る涙を完全に拭いて、彼の背を追いかけ、そして無防備な片腕にしがみつく。

いきなりの行為に驚くグランツェ。慣れないことだったのか、顔が茹蟯のように真っ赤になり、必死に振り解こうとする。

「な、なんやお前！ 離せや！」

「酒場に行くんでしょ？ 私も付き合っよ」

「離せや、こら！ どう見てもお前未成年やろ！ そのくせ酒場に行くとはどういう教育受けとんのや！」

「私が飲むのはオレンジジュースだよ」

「あるか、んなもん！」

「じゃ、持ち込みで」

「アホか！」

「まあそう堅苦しいこと言わないで」

「お前、ほんまどついう教育受けて」

そんな時だった。

「あたいにそんな口叩いておいて許されるとでも思っているのかい
！」

女性の怒鳴り声が聞こえてきた。

割と近くで聞こえてきたように思えたのだが、なにせこの人ごみ。
どこから聞こえてきたのか見当もつかない。

ミリアーノとグランツェは一緒になって視線をさまよわせ、声主
を探した。

するとある一点に人垣ができ、ざわめきが始まる。

「何かしら？」

「行ってみよか」

興味津々に、ミリアーノとグランツェはその人垣の中心地へと掻
き分けながら足を進めていった。

二、奪われた神具【18】

「出てお行き！ この役立たずのクソガキ！」

声は、とある一軒の酒場からだった。

酒場の入り口には声を発したであろう露出度の高い衣服に身を包んだ巨乳の女性が仁王立ちで佇んでいた。氷河大帝国出身の特有ともいえる長い白髪に狼耳、そして飾りのついた綺麗な白い尻尾を優雅に揺らし、美人なその表情を怒りに歪ませている。

その女性の視線先を辿れば、瓶を大事そうに抱きかかえたまま道端に倒れこんでいる同種族の幼く華奢な少年。酒場からつまみ出されたといった感じが。少年は慌てて身を起こし、衝撃で落ちた眼鏡を掛けなおして泣きそうな様子で必死にその女性の足にすがりついて謝る。

「ご、ごめんなさい！ でもこれだけは言うておかないとその方法じゃアミルダさんの身が危険なんです！」

ようやく人ごみを掻き分けてその現場の最前列に来ることができたミリアーノとグランツェ。

グランツェが少年を見てぼそりと漏らす。

「あ。あの子や」

「え？」

ミリアーノは隣にいるグランツェを見上げた後、再びその現場へと視線を戻す。

「知り合いなの？」

グランツェは首を横に振る。

「いや、知り合いじゃない」

「え？」

「あの子が大事そうに抱いている瓶や。見覚えがあるやろ？」

「瓶？ あっ！」

それは紛れもなく、忘れもしないフレスヴァを入れた瓶だった。ミリアーノは今すぐにも駆け寄りたかったが、そういう雰囲気ではなかったので、ひとまず事の収まりを待つ。

巨乳の女性が足にしがみつくと少年を振り払い、道端に激しく転ばせる。

「しがみついてんじゃないよ、鬱陶しい！ 何が『一流の知識者を目指したい』だい。勝手にあたいた等の船に乗り込んでここまで付いてきて。全然役に立たないじゃないのさ！」

少年が地面から身を起こして弁解する。

「た、ただ僕は」

「『ただ』何だい？ 古臭い本ばかり読みふけて、役に立たない道具ばかり勧めてきて。それで一度でも幻影が出てきた試しがあったかい？」

「違います！ それは魔法使いの人がやり方を間違っているだけで、僕の指示した通りにきちんとしてやってください」

そこまで言っつて、少年は失言を呪うように自分の口を手で押さえた。

案の定、巨乳の女性の表情が恐ろしく変わっていく。いやに冷静に声を落として、

「なんだい？ あたいの旦那の腕にケチつけようつてのかい？」

巨乳の女性の後ろ 酒場の中から、体格のがっしりとした筋肉質のガラの悪い男が三人出てくる。しかも背が巨人並みにデカイ。

ガラの悪い男達が放つ威圧に、少年も、そして野次馬で集った周囲も、戦くように後退りする。

パキリパキリと指の関節を鳴らして巨乳女性の合図を待つ。

その男を従えるようにして、巨乳女性は少年を見下し歩み寄る。

「だいたいその瓶はなんだい？ そんな小汚い物をどこで拾ってきたんだい？」

少年は視線を伏せて瓶を抱き、答える。

「拾ったんじゃない。買ったんです」

「買ったただって？ 今どきそんなくだらない物売る馬鹿がいるっていうのかい？ あんたの言葉に嘘がなけりゃ、その馬鹿な道具屋の面を一度見てみたいもんだね」

「その道具屋ってのは俺や」

周囲にざわめきが起こる。

全ての注目を集めて、ミリアーノは慌てて両手を振って誤魔化した。

「ち、違います。私達なにも言っていないです」

だが、そんなミリアーノを横に押し退けて。

グランツェは一步、前に進み出る。

「俺がそのガキに瓶を売ってやったんや。文句あつか？」

二、奪われた神具【19】

巨乳女性は見下すような目でグランツエを一瞥いちべつし、鼻で笑った。

「へえ……」

腕を組んで、程よい距離まで歩み寄ってくる。もちろんガラの悪い三人の男を背後に引き連れて。

「見ない顔だね。あたい等を氷河大帝国と知っての言動かい？ その勇氣は褒めてやるけど覚悟するんだね。どこのチームだい？」

グランツエはきっぱりと告げる。

「どこのチームでもない。ただの道具屋や」

すると巨乳女性の背後にいた男が一人、睨みをきかせながら前に出てくる。

巨乳女性はそれを手で制した。

「お待ち。先に手を出すんじゃないよ。ここは神々の島。先に手を出した方が負けだよ」

仕方なく指示通りに退く男。

巨乳女性は何を思ったか、急に踵を返して少年のところへ歩いていく。

少年のところへ辿り着くと同時に、少年の手の中にある瓶を奪い取って高く掲げる。

「あっ！」

少年が立ち上がる。奪われた瓶を取り戻そうと必死に手を伸ばす。「か、返してください！」

巨乳女性は目ざとく少年と突き飛ばし、地面に転ばせた。そして手にした瓶をくだらなさそうな顔つきで眺め、わざとらしい口調で、「ほんつと汚い瓶だね。あー古臭い。こんな物から出てくる幻影なんて、きつとヘドが出るほどつまらないものだろうね。売っている奴の気がしれないよ」

ミリアーノは言い返そうと口を開いたが、その前にグランツェが声を大にして言い返す。

「その瓶を侮辱するな！」

と、拳を固める。

巨乳女性はそれを見て噴き出し笑った。自分の頬を指先で示しながら、

「殴りたければ殴りなよ。さあ好きにおし。ここは神々の島。殴り合いの喧嘩が出来ない場所だよ」

汚らしい物を持つかのような手つきが瓶を振る。

「こぉーんなゴミの為に精霊から石にされるなんて馬鹿馬鹿しいと思わないのかい？」

そう言つて「きゃはは」と腹を抱えて笑い出した。

グランツェが無言で拳を振りかぶって構える。

周囲からあがる悲鳴。

「やめて、グランツェ！」

ミリアーノは体を張ってグランツェの腕に飛びついて止めた。

それを見た巨乳女性がさらに笑う。自分の頬を再び指で突いて示しながら、

「どうしたんだい？ ほら、殴りに来なよ。殴らせてやるって言つてんだから来ればいいじゃないかい。それともなんだい？ やっぱりこんな貧乏くさい物の為に石になりたくなつていうのかい？」

グランツェが歯軋りに呻く。

「てめえ、言わせておけば……！」

「グランツェ！」

ミリアーノは必死に止めた。

「ダメだよ！ このままあの人に殴りかかって石になったら絶対後悔する！」

巨乳女性はひとしきり笑った後、その笑いを一旦止める。

そして企みある笑みを浮かべ、再び瓶を手の平に載せ、高く掲げた。そのまま手の平を下へ傾けていき、

「あゝら、手が滑っちゃった」

故意的に手の平から瓶を落とす。

瓶は落下し、地面で乾いた音を立てて砕け散った。

砕けた瓶の中から出てきたのは丸々と太った手乗り鼻のフレスヴァ。急に明るくなった視界に、きよろきよろと不思議に周囲を見回す。

「おや？ ここはどこですか？」

それを見た巨乳女性と三人のガラの悪い男は噴き出し笑う。

笑い堪えながら巨乳女性。

「ほらごらんよ。やっぱり汚い物から生み出される幻影はこんなもんじゃないかい。これは豚かい？ それにしても不細工な生き物だね」

フレスヴァの悪口を言われ、さすがにミリアーノもカチンときた。グランツェと一緒に睨む。

その視線に気付いた巨乳女性はミリアーノへと目をやる。

「なんだい。あんたもやる気かい？ かかってきなよ。殴らせてあげるって言うてるだろう？ ほら、やりなよ」

「幻影に殴られたことはあるか？」

声は別の方からした。

巨乳女性が視線を巡らせ声主を探す。

「誰だい！」

全ての視線が一点に集った。ミリアーノもグランツェも振り返ってその先に目を向ける。

そこにはもう、ウサギの姿ではないクレイシスの姿があった。

巨乳女性の顔が恐怖に引きつる。

「お、お前……！ 大魔法使いクレイシス！」

二、奪われた神具【20】

ざわりとどよめき立つ周囲。誰もが皆、作業の手を休め、彼に注目する。さすがは毎年優勝するだけあって、かなりの有名人だったようだ。

クレイシスはミリアーノとグランツエの横を過ぎ去り、巨乳女性のところへと歩いていきながら教鞭ウチウチを振るかのように言葉を続ける。「幻影がこの島で戦っても石にならないのは知っているよな？ 魔法に魔法をかけても意味を成さないし、所詮は幻影だからだ。」

じゃあ幻影が人を殴れるのか？

『幻影だから人体をすり抜ける』なんて二次予選で安直バカなことを言っていた奴がいたが、これは大きな間違いだ。幻影は魔法使いの実力でどうにでもなる。嘘だと思っなら試してやろうか？」

巨乳女性と程よく距離を置いて立ち止まり、クレイシスはその女性の足元へ視線を落とす。

無残に割れて砕け散った瓶。そして状況が読めずに呆然としている梟。

無視して、クレイシスは砕けた瓶の残骸に向けて手をかざした。すると応えるかのように瓶の破片が淡い緑色の光を放ち、カタカタと微動し始める。

「ミリアーノ」

「は、はい！」

急にクレイシスに名を呼ばれ、ミリアーノは慌てて返事をした。振り向きもせず、クレイシスは訊ねる。

「この世で一番強い奴って、どんな奴だと思う？」

「え？ えつと……」

ミリアーノは顎に手を当て虚空に見つめると、考えを巡らせた。それと同時に瓶の破片からみるみると何かが生まれ出てくる。そ

れは想像通りの　筋肉隆々で巨人並みの体格をした　いかにも
城の門番をしていそうな巨岩歩兵が姿を現した。

「うわ、本当に出てきた」

ミリアーノは生まれ出てきたそれに、驚いて身を引く。

巨岩歩兵が足元に居る小さな巨乳女性を一睨みする。

声も出せずに驚き顔でその場に腰を抜かす巨乳女性。ガラの悪い
三人の男も、まるで赤子のように巨乳女性の傍に寄り添い、怯えて
いる。

そんな彼らの様子にクレイシスが冷酷な笑みを浮かべる。そして
更なる脅しを加える。

「たしか好きにやってよかったんだっただよな？」

ああ心配するな。人間と同じように殴る寸前で石になること
はない。これは頑丈な魔法の塊だ。もつとも最初から石で出来てい
るしな。

で、本題だが……」

言葉に合わせるかのように巨岩歩兵が体勢を変え、彼らの前で大
きく腕を振りかぶる。

「幻影に殴られたことはあるか？　殴られて生きていた奴なんて、
まだ見たことないけど」

巨乳女性は涙目で身を震わせ、隣にいた男　旦那と思われるそ
の人の肩を激しく揺する。

「あ、あ、あんた、この状況をどうにかしておくれよ！　同じ魔法
使いなんだろう？」

「無茶言つな！　アイツに勝てるくらいなら毎年優勝している！」

「どうすんのさ！」

「逃げるしかねえだろッ！」

吐き捨てるのと逃げ出すのは同時だった。

「あ、ちよつと！　あんた！」

追いかけるように巨乳女性も逃げ出す。

残された二人の男も無言で顔を見合わせ、そして逃げ出していっ

た。

周囲から感嘆と拍手が起こり、サインや握手を求めて野次馬たちがクレイシスに群がっていく。

事なきを得て、ミリアーノは安堵のため息を吐いた。

「良かった。クレイシスが来てくれて」

彼女の隣で一人、混乱に頭を悩ませるグランツェ。

「なんでや？ わけわからん。なんであの大魔法使いがこんなところ。しかもなんで俺らに加勢するんや？」

ミリアーノは「え？」と首を傾げて問い返す。

「『なんで』って……彼、ずっと私と一緒に居ただけ。もしかして気付かなかった？」

「アホ言つな。お前と一緒に居たのはウサギの格好した変わり者や」

「そうその変わり者。ずっとウサギの格好をしていたの」

「いや、あり得ん」

それがあり得るんです、これが。

言い返す言葉が喉まで出掛かっていたけども、ミリアーノは止めた。イメージは壊さないでいてあげよう。

「ミリアーノお嬢様あー！」

涙を流しながら駆け寄ってくる手乗り梟のフレスヴァ。

「フレスヴァ！」

ミリアーノは座り込んで両手を広げ、駆け寄ってくるフレスヴァを迎え入れた。

ようやく、ミリアーノとフレスヴァは念願の再会を果たす。

「ごめんなさい、フレスヴァ」

「もう二度とわたくしめを瓶の中に入れてたりしないでくださいよ？」

「わかったわフレスヴァ。私、もう二度とあなたをポシエットの中以外に入れたりしない」

「ぐぎゃ！」

フレスヴァを無理やりポシエツトの中へと押し込んで。

「あのっ」

ふいに聞こえてきた声に、ミリアーノは目を向けた。

二、奪われた神具【21】

見やればそこに、気恥ずかしそうにもじもじとしている獣民族の少年。

「さ……さきほどは助けていただき、ありがとうございます」
ぺこりと頭を下げる。

ミリアーノは照れくさく手を振って、

「私は何もしてないから、お礼ならあつちに居る魔法使いの人と最初に助けに入ったこの人に言っておあげて」

と、グランツエを指し示す。

獣民族の少年は改めてグランツエに向き直ってお礼を言う。

「助けていただき、ありがとうございました」

顔を真っ赤にして気持ちをごまかそうと粹がるグランツエ。

「べ、別にお前を助けたわけや」

ミリアーノはグランツエの言葉を手で制して、

「いいじゃない。結果として助けたことに変わりはないんだから」

そんな時だった。

「ミリアーノ！」

突然クレイシスに名を呼ばれ、ミリアーノはびくりと身を震わせて目を向けた。

「な、なに？」

クレイシスがなぜか焦った様子でこちらに駆け寄ってきて、がしりと両肩を強く掴んできた。

怯えるミリアーノ。

「え？ なに？ なんなの？ 私、何かした？」

掴んだまま無視して、クレイシスはグランツエに声をかける。

「えーっと……グランツェだったよな？」

「なんで俺の名を？」

「まず一人」

「は？」

理解できず、グランツェは呆け顔になる。

そのまま今度は獣民族の少年へと視線を移して、

「二人目」

たまらずミリアーノは口を挟む。

「ねえ、いったい何のことを言っているの？」

「あとはお前とオレで計四人。これで仲間は揃った」

グランツェも口を挟む。

「仲間って何のことや？」

その問いかけに、クレイシスはさも当然とばかりに言い放つ。

「イベントだ。今年はこのメンバーで参加する」

その場にいた誰もが驚きの声を上げたのは言うまでもない。

クレイシスはミリアーノに簡潔に説明する。

「いいか、ミリアーノ。今までの流れをよく考えてほしい」

「流れ……？」

小首を傾げるミリアーノ。

「そうだ。そうしたらなぜオレが素の状態でここに来て、こんなに焦りながらお前と接触しているかがわかるはずだ」

ミリアーノは考えた。

（えーっと。なんでこの人変装したんだっけ？）

辿り着く思考。思い起こすファルコム大帝国兵士との接触。

ミリアーノは叫んだ。

「……って、まさか！」

「そう。その『まさか』だ。詳しい話は時間が無いから省略する。このメンバーでイベントに参加だ。いいな？」

「わかったわ」

ミリアーノは頷く。それを確認したクレイシスはグランツェと獣民族の少年に話を振った。

「事情はあとで説明する。とにかく二人の力を借りたいんだ。できれば何も聞かずにイベントに参加登録をしてくれると助かる」

「ええで」

「は、はい。僕でよろしければ仲間になります」

ミリアーノは周囲の異変に気付いた。野次馬の人々をかき分けてこっちに向かってくる見覚えある黒服の男達。

慌ててクレイシスの服を掴んで引く。

「ねえ見てクレイシス。ファルコム大帝国の兵士がもうそこまで

」

「気をつける、ミリアーノ。あいつ等この世の人間じゃない」

え？ と目を丸くしてミリアーノ。

「ちょっと待って。どういうこと？ それ」

無視するようにクレイシスは話を進めた。

「今から一騒動起こすから、その間に全力で走ってくれ」

わけもわからず焦りを見せるグランツェ。

「ど、どういうことや？」

「いいから走れ。事情はあとで話す。もし散り散りになったらイベントの受付所で落ち合おう。オレは連れのミリアーノと一緒に向かう。グランツェはこの……えっと」

獣民族の少年は答える。

「アーレイです」

「アーレイと一緒に行ってくれ」

「了解や」

「じゃ、始めるぞ」

一通り説明をし終えてからクレイシスは巨岩歩兵の幻影に向け、

指を鳴らした。

応えるように、巨岩歩兵は雄たけびを上げてゴリラのように胸を叩きながら人々を追い掛け回し始めた。

蜘蛛の子散らすように逃げ出す周囲。

通りは人々のパニックに陥った。

「行くぞ」

呆然としているミアアーノの腕を掴んで、クレイシスは人ごみに紛れるように駆け出した。

二、奪われた神具【22】（前書き）

お気に入り登録してくださった方、ありがとうございます。
心からお礼申し上げます。

二、奪われた神具【22】

「ちゃんとオレについてきているか？ ミリアーノ」

「言われなくなつて、あなたが腕を引つ張っているんだからついていくしかないでしょ！」

人ごみの中をかき分けながら、ミリアーノとクレイシスは言い合
う。

「ねえ、あの人達つていつたい何なの？ ただの兵士じゃなかったの？ とこでウサギの着ぐるみはどうしたのよ？」

「質問が多い！ 一つに絞れ！」

「わかつたわよ。じゃあまずコレから答えて。あの追いかけている兵士の人達つて何者なの？」

「さつきも言つただろう？ あいつ等はこの世の人間じゃないと」

「だから、それがどういう意味かって訊いているのよ、私は」

訊いた直後、クレイシスは人の流れを縫うように横切つて、リンゴを売っている屋台の裏へとミリアーノを連れ込んだ。

陳列台の下にある空間に二人で隠れる。

「なんだい、あんた達は？」

ふくよかなタコ民族の女性が、台の下を覗き込んで驚き顔で訊ねてくる。

クレイシスは肩で息継ぎながら愛想笑いを浮かべ申し訳なく謝つた。

「ごめん、今追われているんだ。ちょっと隠れさせてくれ」

「あら。あんたどこかで見た顔だと思つたら、もしかしてあの有名な魔法使いかい？」

「よくそう言われます」

上手く会話を流し、クレイシスはミリアーノへと視線を戻す。

「まだ走れそうか？」

不機嫌に顔をしかめてミリアーノ。

「その前に答えて。何があったの？ 彼らがこの世の人間じゃないってどういうこと？」

クレイシスは眉間にシワを寄せ、難しい顔で唸りながら頬をかくと、説明しにくそうに答えた。

「うーん、そうだなあ……。なんというか、闇の民族　　と言つてもわからないだろう？」

「そうね」

ミリアーノは素直に頷いた。

「つまり、だ。要するにこの世の民族じゃない種族　　わかり易く言えば、今までずっと闇の中に封印されていた対人捕食民族なんだが、対人といつても肉を捕食するのではなく、魔力を糧として生きるハイエナ民族なんだ。精霊はそいつ等から身を守る術を本能的に身につけているんだが、オレたち魔法使いはまだその術を知らないだから魔法使いだけを狙つて　　今は皇帝の命令でオレだけを狙つて狩りをしてくる人間外生物なんだ」

「人間外生物って言われても、あの人達普通に人間だったわよ？」

「あの姿はカモフラージュだ。明らかに正体がわかったら狩りなんてできないだろう？」

瞬間、ミリアーノはハッと悟った。

思わず開いた口を手でふさぐ。

「私、この騒動にすごく関係ない」

「お前の言いたいことはよくわかる。だがもつとこつ、上手く説明できないんだが、なんというか、その……」

あまり言いたくないといったジェスチャーを交えつつ、クレイシスは苦々しい顔でやっと一言吐き出した。

「助けてくれ」

「え？ どうやって？ 私が戦うの？」

と、ファイティング・ポーズを構えてみせる。

半眼でクレイシス。

「戦えるのか？」

「ううん、無理。私、喧嘩とかしたことないもの」

「だろうな。とにかくイベント会場の受付まで行こう。そこに行けば島の精霊がたくさん居る。きっとどうにかしてくれるはずだ」

「わかったわ」

頷いて、ミリアーノは早速とばかりにポシエットに突っ込んでいた地図を取り出す。

それを広げて現在地を確認。

ふむふむ。今がココね。

そして現在地から指先で地図を辿って受付会場までの道のりを確認。

その途中でミリアーノの指先が止まり、微動に震え出す。

「受付会場？」

「ああ。受付会場だ」

「冗談でしょ？」

「冗談を言っただろう？」

「だって、現在地はココよ？」

しつこいくらいに指先で地図の右下にある現在地を何度も叩く。

クレイシスも一緒になって地図を覗き込み、

「ああ。そこだな」

「ココを真っ直ぐこっちに行って」

と、地図の中央にある大通りへと指を走らせ、その大通りからそのまま真っ直ぐ地図の上にある『イベント会場へ』と記された所へと指を走らせる。

「どのくらいの距離があると思っているの？」

割り込むようにクレイシスが地図に指を向ける。大通りを指先で

示し、

「この大通りに馬車が走っている」

「あ、それなら良かったわ」

腰を上げようとするミリアーノをクレイシスはすぐさま引き止め

た。

「待てミリアーノ。状況はそんなに単純じゃない。よく考えるんだ。その馬車にオレと一緒に乗れば……言いたい事、わかるよな？」

あなたを置いていってもいいですか？

「　　って、お前今すごく非道な事を考えただろう？」

「よくわかったわね」

「あら、いらつしやい。またリンゴを買いに来てくれたのかい？」
タコ民族の女性がお客を迎え入れる。

屋台の下に隠れていた二人は一瞬にして会話を止めた。
クレイシスがミリアーノの耳元にそつと囁く。

「誰が来たのか見てくれ」

「わかったわ」

「バウ」

ばう？

明らかに人語以外の、何か大型な老犬が一鳴きしたような、そんな声だった。

ミリアーノは台の下から恐る恐る顔を覗かせる。

「バウ」

正体を見て、思わず硬直。

店に来た客人は見たこともない謎の生命体だった。

二、奪われた神具【23】（前書き）

お気に入り登録してくださり、ありがとうございます。
心からお礼申し上げます。

二、奪われた神具【23】

一言でいえば、生きた緑色のゼリーののような生き物である。体格はパンダが二足歩行しているような感じでどっしりとしており、また、顔や頭はツルンと毛の無い丸型だった。顔には丸い小さな二つ窪みくぼと逆三角形の窪みがあり、その逆三角形の窪みから鳴き声を発しているようだ。まるで口のような動きをしながら鳴き声と合わせて逆三角形が変形する。

「バウ？」

次いで丸い小さな二つの窪みが、確実にミリアーノの姿を捉える。

「バウ？」

「ぎゃああああ！」

ミリアーノは初めて見る変な生き物に、身を強張らせて悲鳴を上げた。

その悲鳴に驚いたクレイシスがパニックを起こし、さらに隅っこで身を丸めて縮こまる。

タコ民族の女性がミリアーノの反応を見て盛大に笑った。

「《島の番人》に驚くなんて。あんた、この島は初めてかい？」

涙目でミリアーノ。タコ民族の女性に顔を向け、首を傾げる。

「《島の番人》？　これが……？」

と、緑色の謎の生命体を指差す。

タコ民族の女性は頷く。

「そう。名前はポルメルと言って、この島のマスコットみたいな存在だね。そんな怖がらなくていいって。よっぽどな事がない限り、何もしてこないから」

「で、でも……」

ミリアーノは不安に怯えながら緑色の謎の生命体　ポルメルに、そっと視線を送る。

ポルメルの視線はミリアーノを見つめたまま変わっていない。

なんだろう。なんていうか……

マスコットのはずなのに、あんまりかわいくない。

台の下からクレイシスが這い出てくる。安堵の息を吐いて、

「安心しろミリアーノ。ポルメルは安全な生き物だ」

問題はそこじゃない。

「バウ？」

また、ポルメルが一鳴きした。

しばらくしてポシエットからフレスヴァがそろりと顔を出してくる。

「あの、ミリアーノお嬢様？」

ミリアーノはポシエットへと視線を落とした。

「なに？ フレスヴァ」

「彼の言葉を通訳しますと、『追われているのかい？』と申しあげますが？」

「わかったわ。じゃあ助けしてくれるのかどうか訊いてくれる？」

「御意に」

フレスヴァは咳払いすると、ポルメルと会話を始めた。

「我々を助けてくださるのですか？」

「バウ」

ミリアーノの口端が引きつる。

「私が訊いても一緒じゃん」

フレスヴァはポルメルの言葉を受けて、ミリアーノに通訳した。

「ミリアーノお嬢様。イベント会場を更に奥へと進んだ場所に彼の家があるそうです。『どうせ家に帰るついでだし、もし良かったらハイエナ民族に見つからないようイベント会場付近まで連れて行ってあげようか？』と申しあげますが、いかがなさいますか？」

ミリアーノは額に手を当て難しい顔で、

「ちょっと待って、フレスヴァ。なんで『バウ』の一言にそれだけの言葉が詰め込まれているわけ？」

「わたくしめども精霊は言葉を介すのではなく、心と心、ハート・トウ・ハートのコミュニケーションでございます」

「あ、そう。つまり言葉に意味はないわけね」

「左様でございます」

納得して、ミリアーノは話題を隣に居るクレイシスへと振る。

「と、いうことらしいわよ。どうするの？ クレイシス」

「なぜオレに振る？ 受付所まで走りたいなら断れよ」

「嫌」

「じゃあ決まりだな」

「そうね」

ミリアーノはポルメルに連れて行ってもらうことにした。が、

「……」

しばらく無言でポルメルと見つめ合った後。

ミリアーノは思い直し、再びクレイシスに訊ねる。

「でも連れて行くにしても乗り物らしき物はどこにもないわよ？」

お手上げてクレイシス。

「さあな。オレもポルメルに連れて行ってもらうのは初めてだ。担

いで連れて行かれるとかじゃないのか？」

「……」

ミリアーノは再びポルメルと目を合わせ。

そしてまた、クレイシスへ向き直る。

「でも担がれたりしたら余計目立ちそうじゃない？」

「なぜ疑問をこっちに返してくる？ 訊くならオレじゃなくポルメ

ルに訊け」

「あなたが訊いてよ」

「なんでオレが？」

「わたくしめがおりますぞ、ミリアーノお嬢様」

結局。

「予想外だ……」

「ええ、そうね」

島の風に髪をなびかせて、二人は遠い目をして呟く。

羽もないのに風船のようにして空を飛ぶポルメルに運ばれて、二人は精霊の神秘を知る。

「精霊は空を飛べるんだな」

「そうね。精霊って空を飛べるんだね」

「わたくしめも飛べますぞ、ミリアーノお嬢様！」

二人はそのまま無事、イベントの受付所へと辿り着くことができた。

三、陰謀を阻止せよ【1】

いつも逃げてばかりだった。生き残る為に。

鬱蒼とした森の中に身を隠し、眠れぬ夜を過ごしながらいつも一人で震えていた。

頼りない明かりを放つ偽りの火を、光漏れないよう握り締めて胸に抱き、不気味な鳥や獣の鳴き声が聞こえるたびにハイエナ民族が近くに居るのではないかと、その存在に怯えながら闇の中に息を殺して隠れていた。

でも、いつしかそんな恐怖や緊張感にも慣れ、今ではそれが当たり前のようになってしまっていた。

「お？ 居た居た。なんでこんな場所に テントの中で眠らへんのか？ 魔法使い」

偽りの火を入れたランタンを片手に、こちらへと歩み寄ってくるグランツエ。

あれから受付で出場登録を済ませたその後、イベント役員から支給されたテントを受け取り、指定された参加者野営の場所で各自テントを張って開催を待つ。

夜だというのに島の山頂が妙に明るい。

イベント開始の前兆か。

と、なれば今までの経験からして翌朝が開始となる可能性が高い。

歩み寄って来ていたグランツエの足が目前で止める。身を屈めて手持ちのランタンでこちらの顔を照らし、声をかけてくる。

「木霊か何かやあるまいし、こんな暗い森の木陰で蹲すくまって毛布に包まって眠らんでも俺らと一緒に場所で眠ればええやろ。それとも何や？ 開催当日は迎えに来いとでも偉そうに言うつもりやったんか？」

クレイシスはさらに身を丸めて顔を埋め、相手の声を遮断するよ
うに毛布で全身を覆い隠す。そして冷めた口調で素っ気無く答える。
「ここじゃないと眠れないんだ。放っておいてくれ」

「眠れないって………。ただけ原始的生活送ってんのか、魔法使い」
「朝になれば合流する。それまで一人にさせてくれ」
急にがしりと、毛布の上から頭を掴まれる。

「聞こえてんか？ 魔法使い」
「やめろ。聞こえている」

「だったら顔ぐらい見せろや。本当に俺らのことを仲間やと思ん
のならテントに来れるはずやろ？ 違うか？」

「……………」
返らぬ言葉に、グランツエが呆れるようにため息を吐く。そして
そのまま無言でどっかりと向き合うようにして腰を下ろしてきた。
こちらが少しだけ顔を上げていたのに気付いたのか、手持ちのラ
ンタンを近づけてくる。おそらく表情から何かを読み取りたかった
のだろう。

真剣な顔つきで、グランツエが訊ねてくる。

「前の仲間となんで決別したんや？ 毎年優勝しといて不満がある
とか俺にはさっぱり理解できん。まあお前にも色々と事情があるん
やろ。それは理解しといてやる。事情を言いたくないんやったら
言わんでもええ。」

だが、これだけは答えてくれや。

俺を道具屋として選んだ理由は何や？ 騒ぎの中やったとはいえ、
あのとき道具屋は周りに腐るほどおったやないか。なんでその中で
俺を選んだんや？」

クレイシスはあの時のことを思い出して微笑した。

「……怖くなかったのか？」

「何がや？」

「相手はあの氷河大帝国だったんだぞ。怖くなかったのか？」

グランツエは「あーあのことか」と呟き、虚空を見上げて後頭部を掻いた。

「まあ、あのときは感情任せやっつたいうか、自制できんかったいうか。正直あんたが来てくれへんかったらヤバイとは思ってた。せやけど、あのときあのまま黙っとつたら自分の中で何かが折れるような気がしたんや」

なぜだろう。

ミリアーノも、グランツエも、あの獣民族の少年も。

勝てないとわかっていている相手になぜ、立ち向かうほどの勇氣を持っているのだろうか。

背負っているモノの違いか？ 環境の違いなのか？ それとも

クレイシスはようやく気付いて自嘲する。

「色々考え過ぎだったのかもな、オレ」

「ん？ なんや言ったか？ 魔法使い」

クレイシスは無言で首を横に振った。

そう、今までが考え過ぎだったのかもしれない。周囲のこととか、生きていくこととか、これからのこととか。全てが良い結果になることばかり考え過ぎていて、いつの間にか勝機すらも見失っていた。ただ逃げていればそのうち何とかかなると思っていたが、実はそうじゃなかったんだ。相手に立ち向かわない限り、自分の中では何も変わらない。

クレイシスは被っていた毛布を頭から退け、首元に落とす。

グランツエが「お？」と驚いた表情を見せる。

「ようやく顔を出したな、カタツムリ」

「誰がカタツムリだ」

多少苛立つように言い返し、クレイシスは言葉を続ける。

「あんたを道具屋として選んだ理由は単純だ。ミリアーノが道具屋探しの時に唯一立ち寄った店。それがあんたの店だったからだ。あの時ポシエットの鳥が彼女に文句を言わなければ、彼女は店の商品に手を出すことはなかったし、その手に取った商品が瓶でなければ鳥を中に入れることもなかった」

「つまり、これは何かの縁や言うことか？」

縁？ そんな言葉で片付けていいのだろうか。

これは彼女の本能か？ それとも、ただの偶然が招いた出会いか？ それにもしあんたがあ爺さんの孫じゃなかったら、オレはあんたを仲間にするとはなかった」

「どういうことや？」

「恐ろしい爺さんだ。教皇庁神殿の奴等しか知らないオレの情報を知っていたんだからな」

そう吐き捨てて、クレイシスは虚空から木製の聖杯を出現させた。落下してきた聖杯を手に受けて、クレイシスは手の中のそれを見つめる。

思い返す、老人の言葉。

(今在る環境を変えたければ正々堂々白羽使いと行動を共にせよ、か)

聖杯をグランツェに向け、差し出す。

「爺さんからの頼まれ物だ。あんたに渡してくれと、そして『独り立ち記念だ』という言葉も添えてくれてな」

差し出された聖杯を受け取ってグランツェ。

「これ……間違いない。俺の祖父ちゃんが大事にしていたモンや」
だが急に「ん？」と顔をしかめて疑問符を浮かべ、

「って、ちょい待てや。なんでお前が俺んこの大事な家宝を持ってあるんや？ それに祖父ちゃんから『頼まれた』ってどういうことや？」

「……」

クレイシスは視線を流す。

別に話すことをためらったわけではない。事の成り行きを話しても良かったのだがウサギの格好をするはめになった成り行きから話すのは単に面倒臭かったからだ。

とりあえず黙って、何も考えることなく地面を見つめ続ける。

「……………」

「色々事情がありそうやな、魔法使い」

たしかに色々事情はある。あるのだが……………。

クレイシスは視線を戻す。

グランツエとしばし目を合わせるが、何も思いつかなかったので話題を逸らすことにした。

「やっぱりオレもテントの中で寝るよ」

三、陰謀を阻止せよ【2】

「え？ もう開催日なの？」

締め切った一人用テントの隙間から顔だけを覗かせて、ミリアーノは慌てて周囲を見回す。

朝も早い時間である。

森に囲まれた広場にかかる薄い朝靄。あさめや

空はほんのりと明るく染まり、小鳥がさえずりが聞こえている。

朝の訪れに、人は大抵空を見上げて「今日もいい天気だ」とノビをするものだが、そんな悠長な雰囲気はミリアーノの周囲からは見られなかった。

片付けられていくテント。

各々背負う大掛かりな荷物。

そして何事かと目を疑うような戦闘準備。ほとんどの人が簡易な甲冑を着込み、そして体のそこかしこに武器を装備している。

ミリアーノは視線をあちこちに走らせながら訊ねた。

「ねえ、何事なの？ 仮装行列の準備？」

クレイシスはミリアーノの反応に呆れ、顔に手を当てるとうんざりのため息を吐く。

「ほんと何も知らずに参加するつもりだったんだな、お前」

「え？」

「これから仮装行列だ。そう思えばいい」

半眼でミリアーノ。

「ねえ。絶対嘘ついているでしょ」

「とにかく早く支度をしてテントから出る。テントはオレとグランツェで片付ける。さっきも言った通りイベント開始だ。遅れれば精

霊を見失う。見失った時点でそのチームは失格だ。早くしろ」

「ちよつ、何？ どういうこと？ 何の知らせもなかったんだけど開始なの？ 精霊を見失うって」

「イベント開始前兆を見極められない奴は見極められるまで二十四時間眠ることを許されない。イベント開始に遅ければ『また来年さようなら』だ」

ミリアーノはようやく事の焦りに気付いて慌てた。

「え、やだ。ちよつと待って、すぐ準備するから」

言うなりすぐにテントの中に入る。

テントの中から声。

「何事でございますか？ ミリアーノお嬢様」

「ちよ！ 邪魔、退いてフレスヴァー！」

「ぎゃあ！」

踏まれたのであろう、フレスヴァの悲惨な声がテントから漏れ聞こえてきた。

まるで騎士団に保護されてお供する民間人四人だった。

ミリアーノのチームは完全に周囲から浮いていた。

森の中にある一本道を参加者の流れに乗って歩いていくミリアーノ達。

歩きながら、一人だけ大荷物 テントは現地置き去り。中身は売り物にしていた骨董品の数々である を背負ったグランツェがミリアーノの上から下を一瞥して一言。

「なんやお前、えらく普段着やな」

「こちらは手ぶらのミリアーノ。同じくグランツェを一瞥して言い返す。

「そういうグランツェこそフツの格好じゃない」

ポシエットからフレスヴァが顔を出して、

「行列を間違えたのでございませうかね？」

獣民族の少年　　アーレイは眼鏡の位置を手で正しながら前方後続を見直し、

「なんか僕達だけ妙に浮いてますね。ああいう甲冑とかを装備していた方が良かったのでしうか？」

「人間がイベントで戦うとかがあり得んやろ。石にされちまうのがオチや」

「イベントってきつと、拳と拳で仲良く語り合うのよ」

「物騒ですぞ、ミリアーノお嬢様」

そのまま三人プラス一匹の視線は、前方を一人行くクレイシスの背中へと集った。

ミリアーノが言葉を投げる。

「ねえ、どうなの？　クレイシス」

「……………」

振り返らず黙々と歩いてきたクレイシスだったが、間を置いて、やがてぼつりと答えてくる。

「仮装行列だ。そう思えばいい」

（絶対嘘だ）

三人プラス一匹は内心で静かにそう突っ込んだ。

どのくらい歩いただろうか。

しばらくすると森が晴れ、行く手を立ちふさぐかのように雄々しく壮大な山々が姿を現した。

集合地点なのか、参加者たちの足がそこで止まり、暇を持て余すように会話が始まる。

ミリアーノは人の波をかき分け、最前列で足を止めると山を見上

げて感嘆かんとんした。

まるでその頂は、天にも届くかのように鋭く聳えている。

「うわあ〜。あの切り立った山の上からここを見下ろしたらすごく迫力ありそうね」

少し遅れてクレイシスが人をかき分けミリアーノの隣に姿を現す。

「おい、ミリアーノ。なぜお前はそう自分勝手に行動を」

次いでその隣に姿を見せるグランツェ。

「なんや？ 何かおったんか？ って、ただの山かい！」

最後にアーレイ。

「どうしたんですか？ またどこかへ移動するんですか？」

ミリアーノは両腕を広げて興奮気味に、この感動を皆に伝える。

「すごい。ほら、見てあの上。すごく高そうじゃない？ 迫力感
じゃない？」

冷めた目で頂を見上げて男三人。ぼそりと、

「山やな」

「山だな」

「山ですね」

ミリアーノはがつくりとテンションを落とした。

「なによ、その無感動コメント」

クレイシスが視線をミリアーノへと戻して、

「高そうってお前、たしか火竜に乗ってここまで来たんだっただよな
？」

「ええ」

「あれだけ上空から見ていて高そうはないだろ」

ミリアーノは「あ。」と何かを思い出し、顔を苦々しく歪める。

「なんか今ので嫌なこと思い出しちゃった」

「嫌なこと？」

怪訝に訊ねるクレイシスに、ミリアーノは慌てて両手を振って誤
魔化した。

「な、なんでもないわよ」

高い上空から火竜の喧嘩の巻き添えにしてあなたを落としてしまいました。なんて、口が裂けても言えない。

クレイシスが詰め寄る。

「嫌なこととはなんだ？ オレに言えないことなのか？」

「えっと……」

「はぁーい、皆さーん。こっちに集まってくださいあい！」

ナイスタイミング。

イベント役員が集合をかける幼い声が見事に彼の気を引きつけてくれた。

三、陰謀を阻止せよ【3】

……え？ 幼い声って。

ミリアーノも一緒になつてイベント役員へと視線を移した。さほど距離のない場所で、参加者達に向き合うようにして佇む五歳ほどの女の子。頭部に生えたかわいらしいウサギ耳に愛くるしい目、それでもこも小さな尻尾。

子供？

ミリアーノはクレイシスに訊ねる。

「ねえ、まさかあれがそうなの？」

「ん？ 何が？」

「さつき集合かけてきた子。もしかしてあれが島の精霊なの？」

「ああそつだ。彼女は気分屋だ。最初の予選は彼女の案内無しじゃ行くことができない」

「行かつてどこに？」

「すぐにわかる」

「ふーん。子供の案内で行くなんて、なんか不思議な気分ね」

空笑いしてクレイシス。

「まさか。彼女はオレが初めてイベントに参加した時からあの姿のままだ」

「え？ そうなの？」

女の子は、まるで引率する先生のように明るく元気に片手を高く挙げて、

「参加者の皆さん。もうしばらくしたらイベント予選会場へと移動になりまーす。そのままお待ちくださいーい」

周りが慌しくなる。

荷物を背負ってた者達は次々に荷を降ろし、何やら準備を始める。オロオロと見回してミリアーノ。

「え？ 何なの？ 何が始まるの？」

無視してクレイシスも動き出す。グランツェに軽く合図し、「グランツェ。とりあえずその荷は降ろしておけ。そしていつでも道具を出せるようにしておくんだ」

首を傾げてグランツェ。言われるがままに荷を地面に降ろす。

「道具って何を出しとけばいいんや？」

「出す必要はない、準備だけだ。予選が始まったらすぐにアーレイが言った物を取り出せるようにしていてくれ」

「わ、わかった……」

アーレイが会話に割り込む。

「あの、僕は何を」

手で制してクレイシス。

「お前の出番はまだだ。だが、周りにいる知識者の観察だけは怠るな」

「わかりました」

ミリアーノも会話に割り込んでくる。

「ねえ、私は？」

振り返り、クレイシスはミリアーノへと指を突きつける。

「お前も同じだ。周りにいる使い手の行動に注意しておけ」

「それだけ？」

「神具が無ければ何もできないだろう？」

「それもそうね」

ミリアーノは言われた通りに周囲を観察する。そして、

「ねえクレイシス」

「ん？」

「そういえばリスさん達はどこ？ まさか参加しないなんてこと」

「それはない。リスならきつとあのルートを」

言いかけて、クレイシスはその言葉で言葉を切る。ミリアーノから顔

を逸らし、吐き捨てるように言い直す。

「今はそんなことどうでもいい」

「え？ 何？ 何を言いかけたの？」

「リズのことは考えるな、ミリアーノ。予選に通ることだけに集中しろ。リズとは決勝戦で必ず会える。必ずな」

「……何それ、どういうこと？」

グランツェが口を挟んでくる。声を落として、

「シードやる」

不安げな表情を浮かべてミリアーノ。グランツェに訊ねる。

「シードって何？」

「噂で聞いた。有力なチームは裏でシードの恩恵を受けとるっちゅーことをな」

「……」

答えず、クレイシスは顔を背けた。

ミリアーノはもう一度グランツェに訊ねる。

「ねえ、シードって何？」

「建前で言えば、強いチームや使い手同士が一次予選で激突しないよう別ルートで二次予選に進ませる。それがシードや。一次予選で這い上がってきた者達を二次予選で叩き落す最悪ルール。そこを勝ち残るのは至難の業や。そして優勝候補のみ別ルートで島の湖フィールドに入っていく。そうやる？」

クレイシスは声を落とし訂正する。

「それは昔のルールだ。最悪だった昔のルールから少しは変えてある。安心しろ。だがシードのことはあまり言わないでくれ」

「その言い方やとあまり変わっているようには聞こえんけどな」

「それでも有力チームが一次で参加するのはフェアじゃない。弱者はその時点でことごとく潰されていく。それよりも、どうせなら先に強い者同士で戦ってもらって数を減らしていた方が下から這い上がるチームにとっては有利だ」

「へえ。少しは弱者の立場も考えてあるんやな」

クレイシスは手で制す。

「会話はここまでだ。そろそろ始まる」

瞬間。

森がざわりと揺れ動く。

風に揺れたのではなく何か強い波動のような、不自然な揺れ。

カタカタと何者かがいくつもの幹を叩く音。

鳥の声は一斉に止まり、周囲から音が消えた。

風を感じなくなり、森に異様な静けさが訪れる。

張り詰める緊張、圧迫感。

森の精霊　ウサギの女の子は悪魔にとり憑かれたかのような暗い笑みを見せた。

「それでは皆さん。いつてらっしゃい」

彼女から放たれる一陣の風圧。

転倒するほどの強い風に参加者たちは皆、両腕を覆ってガードする。

荷を背負っていた者は風圧で転がり、重い甲冑を着込んでいた者はよろけて転倒する。

一陣の風が去った後、参加者たちはガードを緩めて周囲を見回す。

まるでどこかに転移されたかのように、そこはもう森の中ではなく、密室状態にある大きく荘厳な広間の中だった。

三、陰謀を阻止せよ【4】

「な、なんなの、これ!」

一気に変わった風景に警戒を走らせるミリアーノ。抜け道の無い広間に閉じ込められ、不安を募らせる。

そんなミリアーノの足にしがみついで、アーレイが狼耳を垂れて恐々と声を上げる。

「ぼ、僕達、生きて出られるのでしょうか?」

「え? まさか私達一生ここに閉じ込められちゃうの?」

ポシエットからフレスヴァが顔を出し、怒りに顔を歪めて唸る。

「ぐぬぬ。もしそれが真^{まこと}だとしたら解^とかせませんが、この島の精霊どもは」

その不安をクレイシスが一蹴する。

「それは無いから安心しろ。予選を落ちればさっきの場所に戻れる」

「戻るってどういうことや? 魔法使い」

「これは精霊が作り出した異空間だ。実際には存在しない」

「魔法みたいなもんか?」

「そういうことだ。ここで参加者の大半がふるい落とされる。一次予選で求められるのは幻影の技術力。幻影の力を駆使して精霊の仕掛けた魔法に組み込み、未完成のこの空間を完成させ、新たな道を開く。道はチームで一つ。同じ道は通れない。早くこの空間を完成させ抜け出したチームだけが予選突破となる」

「早く抜け出すっちゅーことは、合格できるチームは限られている『いうことか?』」

「そうだ」

「合格できるのはどのくらいや?」

「さあな。彼女は気分屋だ。どのくらい合格させるかは彼女の気分しだいだ」

「あり得んやろ、そのやり方」

空気が変わった。

緊張が走る。

参加者達が各々武器を構え出す。

クレイシスが的確にアーレイを指示する。

「来るぞ、アーレイ」

「は、はい」

「『来る』って何が来るの？ クレイシス」

「グランツェ、道具の準備だ」

「こっちはいつでもOKや」

と、荷に手をかけるグランツェ。

共にクレイシス自身も魔力を一手に集中する。そして、

「アーレイ」

「は、はい」

「この予選は早く抜け出た者勝ちだ。戦闘力は気にするな。この予選に相応しい神具のレシピを作り出せ、誰よりも先に」

「わかりました」

力強く頷いて、アーレイはミリアーノから離れて表情を鋭く変える。

「……………」

一人呆然とするミリアーノ。無言で、ポシエットにいるフレスヴァに視線を落とす。

フレスヴァもミリアーノを見上げて静かにお手上げを試みさせた。

誰かが発した第一声が広間に響く。

「始まるぞ！」

それを合図にするかのように、いきなり前方の壁をすり抜けて巨

大な蛙の魔物が現れた。

あまりの巨大さに圧倒され、参加者達は戦くように退いた。

蛙の魔物の背後に出現する白く大きな扉。それを塞ぐように蛙の魔物はどっかりと地に座り込み、言葉を発す。

太く野太い声で、

「汝らに問う。我、幼い頃は水の中。成長したら陸に出る。さて、我とは誰？」

イベントの常連参加者は何やら荷から道具を取り出し準備を始める。

初参加の者たちはわけがわからず動揺し、話し合う。

再び慌しくなった周囲に、ミリアーノもオロオロとしながらクレイシスに問う。

「ね、ねえクレイシス。あの蛙、急に人語で何か言ってきたわよ？
だがクレイシスはその問い掛けに答えず、アーレイに訊ねる。

「どうだ？ アーレイ」

「ぼ、僕が思いますに、これはなぞなぞその分類に入るかと」

「いやそうじゃなくてだな、アーレイ」

グランツェが蛙の魔物を見上げて感心する。

「蛙はしゃべるもんなんやなあ」

「感心している場合か、グランツェ」

ミリアーノはクレイシスの服を引いて再度訊ねる。

「ねえクレイシス。あれって何なの？ 一体何をすればいいの？」

掴まれた服を振り払ってクレイシス。ヤケクソ気味に言葉を返してくる。

「わかったよ、言うよ！ 要はあの蛙の『言葉の意』を解けばいいんだ」

「そうわかったわ」

「ただし」

皆まで聞かず、ミリアーノはすぐさま蛙の魔物へと振り向くと、大きく息を吸い込んだ。そして声と同時に蛙の魔物に指を突きつけ叫ぶ。

「答えは蛙よ！」

しん、と。

ありとあらゆる物音が広間から消えた。

参加者達が皆、啞然とした顔でミリアーノに注目する。

蛙の魔物はミリアーノを睨むように見下し、答えた。

「ブー。不正解」

突如、ミリアーノとそのチーム三人の真上の天井から降り注ぐ大量の水。

四人はまるでスコールに見舞われたかのような、そんなずぶ濡れの状態でただ呆然と立ち竦む。

オチとばかりに金ダライが一個、一人の頭上に落ちてきた。

「　　つて、なんで俺だけや！」

予期せぬ落ち物に、グランツェは痛む頭を抑えて憎々しげに天井を見上げる。

放心状態のクレイシス。心あらずの声でぼそぼそと独り言を呟く。
「あり得ない。こんなこと……」

ミリアーノは濡れた髪をかき上げ、きよとんとした顔でクレイシスに向き直る。

「もしかして正解は蛙じゃかったってこと？」

クレイシスは静かに首を横に振る。そして、

「なぜ言っただ？」

小首を傾げてミリアーノ。

「え？ 正解を言っちゃダメだった？」

クレイシスは身振り手振りを交えて気持ちを伝える。

「そうじゃなく、イベントなんだぞ？　これ。何のイベントをしているのかわかっているよな？」

「うん。それはわかっているわよ、私だって」

「だったらオレの話は聞いていたよな？　さっき話したこと」

「ええ」

「なら総じてわかるよな？　蛙の『言葉の意』を解け。ただし神具を使つて、だ」

「神具を使つて？」

「そうだ」

ポシエットからフレスヴァが顔を出す。

「ミリアーノお嬢様は神具を持つておりませんか？」

クレイシスが顔に手を当て、うんざりのため息を吐いて答える。

「だから、それを作るんだ。今から」

ミリアーノは驚いた。

「えっ！　今から作るって、そんな簡単に出来ちゃうものなの？　神具って」

「だからさつきも言ったが一次予選は技術力。要は謎解きだ。この空間はワン・ピース欠けたパズルみたいなものだ。そのワン・ピースを幻影の魔法で補い、空間を完成させて二次予選へ進む。一チームに道は一つ。つまり同じ幻影は使えないということだ。ここで試されるのは知識者の豊富なレシピ。神具を作ってお前が生み出した幻影が蛙の『言葉の意』にさえばいい。わかつたか？」

するとアーレイが二人の会話に割つて入り、静かに挙手をする。

「あの。そのことで僕から一言よろしいですか？」

三人の視線が集う。

アーレイが申し訳なさそうに言葉を続ける。

「あの。僕、まだ一度も神具を完成させたことがないんですが……こんな僕の知識でも大丈夫だと思いますか？」

……え？

クレイシスがいきなり愕然と膝を折って床に手をつく。暗い影を背負って涙を流し、

「もうダメだ、このチーム。オレ、確実にファルコム皇帝から抹殺される」

絶望にひれ伏すクレイシスを指差し、グランツェがミリアーノに訊ねる。

「どうしたんや？ あれ」

「初めての反抗に失敗したみたいよ」

「お前が優勝しようってオレを煽あおったんだろ！」

両手をわななかせて怒鳴ってくるクレイシスに、ミリアーノはお手上げして気楽に言った。

「諦めるのはまだ早いと思うわ、クレイシス。だってまだ神具を作ってもいないんだよ？ まずはやってみることが大事だと思うわ」

クレイシスはフツと肩の力を抜いて、

「それもそうだな……」

三人の視線は再びアーレイに集った。

三、陰謀を阻止せよ【5】

「僕が思うには、蛙の言っていた『言葉の意』　つまりこの謎の答えとなる『蛙』に関する神具なら通過することができるということです」

アーレイは周囲を見回す。

「考えられる知識は『雨、水、川、跳ねる』そして捕食となる『虫』。他にも今見回しただけでアレンジできそうなものは色々あります」
「ミリアーノは二人にぼそぼそと耳打ちする。」

「ねえ、あの子いきなり変わったよね？」

「ああ変わったな」

「知識者ってあんなもんやないんか？」

「言われてみればそうだな。知識者サラもあんな感じだった」

そんな三人を無視して、ずれた眼鏡の位置をくいつと人差し指で

正し、アーレイはグランツエの荷へと歩み寄った。

呆然と見ているグランツエをそのままに、荷から一つの小さな瓶を手にし、それを見つめながら言葉を続ける。

「ただ、残念なことに今の僕達では、蛙の言う『言葉の意』にそのような神具を作ることとはできません」

「できないやと？」

「どういうことだ？」

身を乗り出すようにして迫るグランツエとクレイシス。

アーレイは耳を垂れて、ぺこりと頭を下げる。

「ごめんなさい」

え？　と三人は疑問符を浮かべた表情で固まる。

「僕、蛙という生き物は本の中でしか知らないんです」

「せやけど、どーすんのや？　この状況」

「やはりダメだったか……」

愕然と膝を折るクレイシス。

ミリアーノは両拳を握り締めて二人を励ます。

「諦めちゃダメだよ、二人とも！ ヒントになる物は絶対どこかにある！ 蛙なら私の国にたくさんいたわ。私も手伝うから」

半眼で、クレイシスが突っ込む。

「どうやって手伝う気だ？」

凶星を指され、ミリアーノは言葉を詰まらせる。人差し指を顎に当て、目を泳がせて、

「えっと……」

その間にも身を起こしてクレイシス。アーレイに訊ねる。

「本当に、もうアレンジもできないのか？」

アーレイは顔を上げて説明する。

「僕の知っている知識は全て使われてしまいました。他の神具との組み合わせならどうにかなったんですが、一つの神具から編み出すなんて僕にはでき……」

急に言葉を止めて、アーレイはある一点を見つめる。

会話が止まったことで三人はアーレイに注目し、そしてその視線を辿って、ようやく存在に気付く。

いつからそこに居たのだろう。

蛙の足元にちょこんと佇む緑色の生命体　ポルメル。体よりも大きな蓮はすの葉を手に、こちらをじいつと見つめている。……ように見える。

ミリアーノは「あ」と声を発し、

「ポルメルだわ」

「ポルメルだ」

「なんで島の番人がこんなとこに居るんや？」

不思議に見つめる三人をよそに、アーレイは一際大きく目を見開

き、表情をだんだんと輝かせていく。

「そうか、その手があったのか……!!」

「ミリアーノお嬢様」

アーレイの小さな呟きが、ポシエットからのフレスヴァの声にかき消される。

ポシエットに視線を落としてミリアーノ。

「なに？」

「ポルメルからの伝言にございます」

「伝言？」

「はい。『突然のスコールにご注意を』とのことですよ」

「何それ。私が間違ったことへの皮肉？」

アーレイの表情に自信が戻る。

「グランツエさん！ クレイシスさん！ ミリアーノさん！」

突然名を呼ばれてビクリとする三人。アーレイへと振り返る。

「な、なんや？」

「どうしたの？ いきなり」

クレイシスがアーレイの表情で何かを悟り、微笑する。

「ようやくレシピが出来たか？ アーレイ」

「はい！」

ミリアーノとグランツエにも笑顔が戻る。

「ほんと？ アーレイ君」

「だったら早よレシピ教えるや。道具をすぐにそろえたる」

三、陰謀を阻止せよ【6】（前書き）

お気に入り登録くださり、ありがとうございます。
心からお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【6】

飾りのついた白く綺麗な尻尾を優雅に揺らし、自慢の豊満な胸を組んだ腕の上に乗せてある一点を観察し続ける獣民族の女性。

その女性に巨人並みの体格を持つガラの悪い男一人が心配そうに声をかける。

「このままずっと何もやらないつもりなのか？ アミルダ」

その男を手で制して、女性は「しっ」と言つて黙らせた。

「お待ち、お前さん。まだだよ。まだもう少し、このまま待つよ」

「何を待っているんだ？ 急がねえと今年も一次で終わりだぞ？」

背後に待機する大男二人も同意するように無言でうんうん頷く。

「あれをござんよ、お前さん」

女性に顎先で示され、その先に。男は目を向ける。

「あのガキに見覚えあるだろう？」

「あー居るな。役立たずのアーレイか」

「その隣に大魔法使いクレイシス。彼の魔法がかかった神具を奪えば、二次予選なんて楽勝ものだよ」

「だが決勝戦には最強の使い手リズが居るんだぞ？ それに道具屋と知識者は頭がイッてるような、とんでもなくヤバい神具を造る奴らだ。噂では命乞う奴にも慈悲無き攻撃を見舞つて」

「大丈夫だよ、お前さん。ここは神々の島。死にはしないよ」

「それでもさつきから嫌な予感ばかりしてならねえんだ」

女性はその男の胸を叩いて元気付ける。

「大の男が弱音吐いてんじゃないよ。しっかりおし。お、アイツ等ようやく動き出したようだね。準備しな、お前達。アイツ等の神具が完成次第、奪いに行つて一次を通過するよ」

「『瓶に水を汲め』とはどういうことや？」

指示を受け、グランツェは荷から適当に手の平サイズほどの瓶かめを取り出しながら、首を傾げる。

アーレイは眼鏡の位置をくいつと正して、

「僕が思うに、わざわざ幻影の属性をこの空間に合わせて、欠けたワン・ピースを作る必要なんてないんです。クレイシスさんの言う通りに耐性・戦闘力を気にしないでいいのなら、この空間自体が幻影なので、それらを融合させて神具を造れば、生み出される幻影はその属性なんです」

「ん？ どういうことや？」

「ですから、蛙を倒すには同じ属性は無効ですが、蛙を倒すのではなく蛙に吸収させるのですから、蛙が攻撃してきた魔法をこちらでリユースして与えてやればいいんです」

「ようわからんが、つまりなんや？ わざわざ蛙の『言葉の意』に従う必要はなかったということか？」

「それは違います。僕達に足りなかったモノ それは水なんです」「水やと？」

「水属性の幻影が手元に無かったから造れなかったんです。僕は蛙という生き物を見たことがありません。だから水や川、虫といったキーワードから造るという意識が強く、無理だと言ってしまうました。でもそれは間違いだったんです。僕はやはり知識者として未熟でした。それ以外から造るという考えが思い浮かばなかったのですから」

「今も水なんてもんはどこにも無いやろ？」

その言葉に、アーレイは勝ち誇るような笑みを浮かべて天井を指差した。

「水ならあります。この上に」

「上やと?」

完全に蚊帳の外になったミリアーノ。同じく蚊帳の外のクレイシスを真似て、暇で周囲を観察していたのだが、ふと視線を向けた蛙の魔物に起こる異変に気付いて慌てて三人に知らせる。

「ねえ見て! あの蛙、姿が少しずつ消えかかっているわ!」

クレイシスが舌打ちする。他の参加者達との間に所々の空間が出来ており、すでに何十チームかの通過者が出たことをうかがわせる。「まずいな、この状況。時間が掛かり過ぎた。これ以上の通過者を打ち切る気だ。」

急げ、グランツェ! アーレイ!

声を受けて立ち上がるグランツェとアーレイ。

「は、はい!」

瓶を手に、グランツェは余裕の笑みを見せる。

「耐性とかは考えんで良かったんやっとな。じゃああとはこれに水を汲めば予選突破や」

「よろしく願います」

「了解。任せろや」

堂々と胸を張り、グランツェは三人よりも数歩前へと進み出る。

一人わけわからずオロオロするミリアーノ。

「え? なになに? 私どうすればいいの?」

クレイシスから腕を掴まれて、傍へと引き寄せられる。

ミリアーノはクレイシスを見つめた。

「え? なに?」

「オレの近くに来ておけ」

「どうして?」

「アーレイもな」

見れば、クレイシスはアーレイも腕を掴んで近くに引き寄せていた。

「そうしないと」

グランツエが蛙の魔物に指を突きつけ、勢いよく叫んだ。

「答えは蛙や！」

蛙の魔物はグランツエを見下し、答える。

「ブー。不正解」

それと同時に、真上の天井から大量の水がグランツエとそのチームの頭上に降ってくる。

グランツエはしぶ濡れになりながらも瓶の中に水を溜めた。

そして瓶を手に、濡れた髪をかき上げながらグランツエは仲間たちへと自慢げに振り返る。

「どや？ 瓶に水を溜め」

クレイシスは自分の周りの結界を解いた。

全くといっていいほど水に濡れていない三人。

彼らの周りには弾かれたであろう水たまりが。

クレイシスはさも当然とした顔で、さきほどの言葉を続ける。

「また濡れるぞ。あのように」

と、グランツエを指差す。

「って、お前！ それ出来るやつたら最初からやれや、この卑怯野郎！」

一人だけしぶ濡れのグランツエが怒りに喚く。

ミリアーノとアーレイは一緒になってグランツエに頭を下げた。

「あなたの努力は無駄にしません」

「ご協力ありがとうございました」

「アホかー！ お前らほんまに仲間意識あるんか！」

喚くグランツエをよそに、クレイシスは真顔になってグランツエの元へと歩み寄る。

「な、なんや魔法使い」

防御の構えでグランツェ。

クレイシスは瓶に向けて右手をかざし、答える。

「魔法をかけに来ただけだ」

瓶に仄かな光が生まれたことを確認した後、クレイシスはミリアーノの名を呼ぶ。

「ミリアーノ」

呼ばれ、ミリアーノは目を向ける。

「急げ。あとはお前が幻影を出せばクリアだ」

ミリアーノはにこりと笑って元気よく頷いた。

「うん。わかったわ」

アーレイが仕上げの言葉をミリアーノに送る。

「ミリアーノさん。あとはその水そのものを幻影として生み出し、蛙を攻撃するイメージをしてください」

「わかったわ、アーレイ君。ありがとう」

そして、グランツェの元へと歩み寄る。

歩み寄ってきたミリアーノに、グランツェは水の溜まった瓶を差し出す。

「頑張れや」

「うん。ありがとう」

グランツェから瓶を受け取ろうとした、まさにその瞬間だった。

「これはあたい等がいただいていくよ」

白く綺麗な一頭の狼が、グランツェの手から瓶を奪っていく。

「あっ！」

ハッとした時にはすでに遅く、瓶はその狼に奪われてしまった。

三、陰謀を阻止せよ【7】

狼は、着地と同時に獣から人型へ。

その見知った姿に四人は驚く。

最初に声をあげたのはグランツェだった。

「お前は、あの時の　！」

白い尻尾を優雅に揺らし、獣民族の女性は奪った瓶を手にして笑う。後から追ってきた男三人を背後に並べて、

「役立たずのクソガキだったとはいえ、あたいのチームのメンバーを勝手に奪っておいて、タダで済まそうなんて思うんじゃないよ。

これはその代償。今回はこれでチャラにしておいてあげるよ」

アーレイが今にも泣きそうになりながら必死に訴える。

「返してください、アミルダさん！　それは僕達の神具です！」

女性は笑う。

「『返してください』だつて？　生意気言っんじゃないよ、アーレイ。誰のお陰でこの島に来られたと思っっているんだい？」

瞬間。

糸張るかのような殺気に包まれ、女性は右横へ視線を走らせる。

そこに居るクレイシス。

大男の一人が何かを察して女性の盾になるかのごとく立ち塞がる。

クレイシスの手には圧縮された風魔法。それを保持し構えたまま、

射殺すような目で大男を睨む。

「死にたくなければその女に神具を返すように言え」

フツと鼻で笑って大男。

「やるならやれ。それと同時に魔法を幻影無しに直接、殺戮目的さつりくに使ったお前も精霊に殺され死ぬ。ここに残るは互いの死のみ」

大男とクレイシスは数秒間無言で睨み合う。

その睨み合いはすぐに終わりを告げる。

ふいに、クレイシスの頭上に降ってくる大量の水。

「……………」

滴る水をそのままに、氣勢をそがれたクレイシスは手の中の魔法を消した。

次いで飛んでくるグランツェの声。

「急げ、魔法使い！ 早いモン勝ちや！」

水に濡れたアーレイとミリアーノは一緒になって獣民族の女性へと『あつかんべ』をする。

ミリアーノの手には水の溜まった瓶。

獣民族の女性は油断していたことに気付いてハッと我に返る。

「なっ　！　しまった、大魔法使いは囿！？」

クレイシスは女性に向け小馬鹿にするように微笑した。ミリアーノの持つ瓶へと手をかざし、

「残念だったな」

瓶に仄かな光が宿る。

「アーレイを失ったこと、後悔するなよ」

「まさかあたい等の行動を読んでいたっていいのかい！」

女性は動揺を隠せず焦りながらすぐに、震える手で瓶を握り締め、目を閉じてイメージを浮かべる。

盾となっていた大男が構えを解いてクレイシスに感心する。

「さすがだな、大魔法使い」

クレイシスはお手上げして肩を竦め、

「オレも頭上に水が降ってくるまでアイツ等の行動に気付かなかつたさ。恐らくアーレイがお前等の性格を理解した上で咄嗟とつさに機転を利かせたんだろう」

大男はそれ以上何も言わず、苛立たしげに舌打ちだけを残した。

ミリアーノは瓶を手に、目を閉じてイメージする。

水。

蛙に攻撃する。

ミリアーノは目を開く。

応えるように、瓶から水の幻影が飛び出していく。

ミリアーノが放った水の幻影の隣を、アミルダの出した水の幻影が争い走る。

どちらが早いかな。

二つの水が蛙の魔物に襲い掛かる。

勝負の決め手は一瞬の判断だった。

(違う！)

ミリアーノはイメージをかき消した。

ミリアーノが放った水の幻影は、蛙に当たる寸前で消えてなくなる。

残ったアミルダの幻影が蛙の魔物に直撃した。

蛙の魔物はアミルダを見て答える。

「ブー。不正解」

「えっ！ どういうことだい！？」

愕然とするアミルダとそのチーム。直後に彼らの居た場所の床が消えてなくなる。

悲鳴を上げながら、アミルダとその仲間は穴の開いた暗い闇の底へ消えていった。

アーレイが駆け寄り、彼らの居た場所　すでに閉じてしまった

床に手をつき叫ぶ。

「アミルダさん！」

床の下から彼らの声が聞こえてくることは無かった。

グランツェがその床を見つめて恐々と身を震わせる。腰抜けたように尻もちをつき、

「あ、あり得んやろ。イベントで殺されるとか……」

その呟きにクレイシスが答える。

「彼らは殺されたんじゃない。転送させられたんだ、スタート地点に」

蛙の魔物へと視線をやり、言葉を続ける。

「もうそんな時間か。」

これから先、間違えたチームから順に失格となる」

消えかかりそうなほど薄くなった蛙の魔物は、参加者に向け告げる。

「刻は来た。不正解となったチームから順に強制退去とする。」

我、消えるが早いのか、それとも汝自ら消えていくか。全ては刻の運しだい」

周囲の雰囲気が一瞬に分かれる。

諦めて神具を投げ出す者、最後の正解に賭けて消えていく者。参加者たちの数は次第に減っていった。

そんな中、ミリアーノは手の中にある瓶の水を見つめていた。

仄かに淡い緑色の光を帯びた水。

透き通っていて瓶の底の部分まで見える。

とても穏やかな光で、それでいて、どこか懐かしい。

ミリアーノは無意識に呟き漏らす。

「この感じ……どこかで見たことある……」

それは遠い昔。

もしかしたら夢の中で見たことなのかもしれない。

ふいにポンと肩を叩かれて、ミリアーノはびくりと身を震わせた。振り向く。

するとそこには肩を叩いてきたであろうクレイシスと、どこか諦めた表情のグランツェ、そして謝るタイミングを見ているアーレイ

の姿があつた。

クレイシスがポシエットを指差して半眼で呻く。

「お前の鳥がさつきからうるさい」

「え？」

「しよつもないワガママ娘で自分勝手なミリアーノお嬢様あ。

わたくしめの声は聞こ……」

こちらに向けて言いたい放題に暴言を吐いたであろうフレスヴァと、しつかり目が合う。

フレスヴァの顔から吹き出る冷や汗。そろりと視線を逸らし、声を震わせる。

「と、ととつてもキュートでかわいいミリアーノお嬢様あ。わたくしめの声は聞こえておりますか？」

ミリアーノの頬が引きつる。

「これ終わつたら覚えていなさい、フレスヴァ」

「ひいいい」

フレスヴァは慌ててポシエットに身を隠した。

クレイシスがミリアーノに訊ねる。

「不正解に気付いたのは偶然か？ それとも」

ミリアーノは首を横に振って答える。

「違うの。これじゃ答えになつていないって思ったの」

泣きそうな顔でアーレイ。

「僕、やっぱり間違えていたのですか？」

クレイシスがフォローする。

「いや、アーレイのレシピは間違つていない。オレも納得できた。

たとえ誰かが水の幻影で通過していたとしても、アーレイの考えたレシピで使われる水とは性質が違うからな」

「性質が違うやと？」

「地上の精霊とこの島の精霊とでは作り出す魔力が違うんだ。だからこれで通過できるはず。ん？ いや、待てよ」

急にクレイシスは何かに気付いて考え直す。

グランツエがぼそりと。

「もうすでに誰かが使ったんと違うんか？ 魔法使い」

「可能性はある。天井から水が降ってきた時点でこのレシピに気付いた奴がいたかもしれない」

「それじゃもう僕達はこのまま」

「ああそうだ。打つ手が無ければこのまま蛙は消え、その時点でオレ達は失格となる」

ミリアーノが突然閃く。

「そうよ！ 思い出したわ！」

三人の注目が集う。

ミリアーノはにこりと笑うと悪戯っぽく舌を見せた。

「ちよつとトンチになるんだけどね。お母さんから聞いた話でこんなのがあったの」

蛙は最後の言葉を告げる。

「冬が訪れた。我、再び眠りに」

「ちよつと待って！」

ミリアーノの叫びが広間に響いた。

だが蛙は消え行く。

ミリアーノは急いで目を閉じ、イメージをする。

【我、幼い頃は水の中。成長したら陸に出る。さて、我とは誰？】

瓶の中の水に生まれる『おたまじゃくし』。そしてそれが成長し、瓶の中から一匹のウシガエルが這い出てくる。

ミリアーノは目を開き、同時にウシガエルに命じる。

「行って！」

瓶の中からウシガエルが飛び出す。

それは高く宙を飛び、弧を描いて見事に蛙の魔物の額に貼り付く。

ミリアーノは蛙の魔物に向け、びしつと指を突きつけて勝利の笑みを浮かべた。

「不正解とは言わせないわ！　これが間違いだと言っんなら、次から問題を変えることね！」

蛙の魔物は笑った。顔にウシガエルを貼り付けたまま、

「たしかに不正解とは言えぬな。　よかろう。通るがいい」

三、陰謀を阻止せよ【8】（前書き）

評価してくださった方、ありがとうございます。
心からお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【8】

ぶわっ、と。風景は一瞬にして入れ替わった。

吹き抜けていく一陣の風にミリアーノの髪がなびいていく。

ミリアーノは何が起こったのかわからず、瓶を手に呆然と立ち竦む。

そこは新緑生い茂る深い森の中だった。

目の前に真っ直ぐに伸びた一本の道。それが先見えずつ続いている。

「……どこ？」

辺りを見回してみるが、仲間三人の姿はどこにもない。

不安がミリアーノの心を締め付ける。

「みんな、どこに行ったの……？」

ふいに掴まれる片腕。

「走れ、ミリアーノ！」

「え？」

ぐいつと強く引っ張られ、無理やり一緒に走らされる。

そこを離れた直後、さきほど居た場所で爆竹が鳴り響いた。

「な、なに？ どういうこと？」

転びそうになりながらもミリアーノは腕を掴んだ相手を確認した。

見知った相手であることがわかり、すぐに安堵する。

「クレイシス……」

振り返ることなく、クレイシスは緊迫した声で口早に説明してくれる。

「二次予選は神具による戦闘だ。ぼけつとしていると神具もろともお前もやられるぞ」

「やられる？」

「あれを見る」

クレイシスが指差す先には、道端で大怪我を負って仲間から手当て

を受けている使い手の姿。

それを見て、ミリアーノは驚愕に目を見開いた。

「……って、まさか狙われるのは私だけなの!？」

「その『まさか』だ。チームの主力が戦闘不能になればその時点で失格だ」

「主力？ 私のこと？」

「ああ。使い手がいないと幻影が出せないだろう？」

「なるほど」

「それとこれも注意しておけ。わかっていることかもしれないが、一応念の為だ。幻影のコントロール・ミスすると大怪我するから気をつける」

「え!？ 知らないわよ、そんなの!」

クレイシスが驚き顔で振り返ってくる。

「は!？ なぜ知らない？」

「だって私、ココに来て初めて幻影出すんだもん」

「じゃあ一次予選で見せたあの抜群のコントロールは奇跡だったというのか？」

「そんな怖いことになるなんて知っていたら、あの時あなたにやり方確認してたわよ」

「……………」

クレイシスは再び前方へと目を向けると、さらりと流すように言葉が続けた。

「死ぬなよ、ミリアーノ」

「恐ろしいこと言わないでよ！ 今鳥肌立ったじゃない!」

「二次予選は有力チームも混ざっている。戦場に紳士はいない。力が弱いとか、初心者だからとか、そういうのは理由にならないからな。命は助けてくれるだろうが、だまし討ちに遭わないよう手傷は負わされるはずだ」

ミリアーノは手の中にある瓶へと視線を落とす。瓶の中で静かに波打つ水の幻影を見つめた後、すぐにクレイシスへと視線を戻して、

「ねえ、この神具で戦えばどうにかなる？」

「死ぬ気か？ 剣士に小枝で戦いを挑むようなもんだ。練成された神具にそんな即興物は通用しない」

「じゃあどうすればいいの？ 私」

「とりあえず安全な場所に隠れるんだ。四人揃わなければ神具は造れない。グランツェとアーレイが合流してくるまで、なんとか時間を稼ぐんだ」

「二人ともどこに行ったの？」

「それぞれの試練の場所だ。二次予選は戦闘の他に、チームの結束力も審査の対象になる。オレは慣れているから早く抜け出せたんだ」「え？ 私、そんなの何もなかったわよ？」

「今のこの時間がお前の試練だ。仲間が揃うまで残された神具でたった一人、このサバイバルを生き残れるかどうかだ。さっきの怪我した人を見ただろう？ 仲間がようやく合流できたとしても使い手が戦闘不能になっただけじゃ失格なんだよ」

ミリアーノは暗く顔を俯け、呟く。

「……グランツェとアーレイ君、本当に来てくれるかな……？」

「は？ なんだよ、それ」

足を止めるクレイシス。

ミリアーノも俯いたまま足を止める。

クレイシスは周囲の安全を確認し、ミリアーノに問い詰めた。

「来ないとも思っているのか？」

ぎゅっと、ミリアーノは手にしていた瓶を両手で包み込んだ。思いをかみ締めるように答える。

「だって私……アーレイ君の言葉を信じなかったんだよ？ 勝手に幻影も変えて」

「だからこそ一次予選を突破できた。違うか？ あの時お前が幻影を変えてなかったら失格になっているところだった。そこは良い判断だったとオレは思う」

ミリアーノは顔を上げる。

「でも」

「慣れていたオレでもミスに気付かなかったんだ。そこはオレも反省しているし、グランツェはともかくアーレイはまだ小さい。知識者としては正直まだ未熟だ」

再び俯くミリアーノ。

「それでも私」

「気にするな、ミリアーノ」

「でも！ それでも私、これから仲間としてみんなに信じてもらえるかどうか、自信がない……」

「もういい、わかった」

ミリアーノの言葉を手で払い、クレイシスは踵を返した。

「うめ……！」

謝ろうとミリアーノは顔を上げたが、聞いてくれそうにないと感じ、口を噤む。

無言でその場を去っていくクレイシス。

ミリアーノは呼び止めようと口を開きかけたが、思い留めて萎えた花のように俯く。

(私に彼を止める権利なんてない……)

自分の失態を呪うようにミリアーノは瓶を腕の中に抱きしめ、目に涙を浮かばせる。

ふいにクレイシスの足が止まった。

背を向けたまま、告げてくる。

「ここまで来たのなら最後まで仲間を信じろよ。ここを通過すればすぐに決勝戦だ。二次予選は時間制限付きのサバイバル形式になっている」

こちらへと振り返り、クレイシスは言葉を続けた。

「決勝戦に行つて白羽神具を取り戻して優勝するんだっただろう？」

「こんなところで諦めるなよ」

ミリアーノはハッとして顔を上げる。

「白羽神具……私の」

ここで諦めたら、もう二度と取り戻すことはできない。

思い出して、ミリアーノは目の淵にある涙を手の甲で拭いた。

「アーレイもグランツェも必ず来る。最後の土壇場になってもいい。一次予選で見た時のように奇跡で通過してみせるんだ」

ミリアーノに笑みが戻る。そして力強く頷いてみせた。

「うん！」

ふと、クレイシスが今まで見せたことのない穏やかな笑みを浮かべる。

ミリアーノは目を丸くした。そして瞬かせる。

「え？ なに？」

「今までイベントに出場なんて苦痛で仕方なかったんだけどな。なぜだろう？ 初めて心から楽しいと思えてきた」

「ほんと？」

「ああ。お前と一緒になら、何かが変わる気がする」

ミリアーノはその言葉が聞いて嬉しかった。自然と頬がほころぶ。そんな時だった。

「うっ！」

前触れ無く急にクレイシスが心臓の辺りに手を当て、苦痛に表情を歪ませる。

ミリアーノは一瞬、彼の身に何が起こったかわからず呆然とした。

そのままクレイシスは地に膝ひざを折り、胸服をかき掴むように握り締めたまま蹲すくまった。

三、陰謀を阻止せよ【9】

我に返って、ミリアーノは慌てて駆け寄る。彼の背をさすって、「いったいどうしたの？ どこか苦しいの？ 大丈夫？」

話しかけても反応は返ってこない。

ミリアーノは心配になって彼の顔を覗き込んだ。

顔は青ざめ、尋常ではないほどの冷や汗が浮き出ている。呼吸も荒く、医者の治療を必要とした。

ミリアーノは半ばパニックに陥った。オロオロと忙しく周囲を見回して誰かに助けを求めろ。

「誰か……」

隠れているのか、それとも誰も近くに居ないのか。人影は見当たらない。

「どうしよう、どうしよう」

泣きそうになりながら、ミリアーノは周囲を見回す。

異常を察したフレスヴァがポシエットから顔を出してくる。

「どうしたのございますか？ ミリアーノお嬢様」

ミリアーノはすぐさまポシエットに視線を落とした。すぐるように、

「どうしようフレスヴァ。彼が」

ふと微かにクレイシスの声が聞こえてきて、ミリアーノはクレイシスに目を移す。

かすれるような声で何かを呟いている。

ミリアーノは彼の傍に耳を近づけ、声を聞く。

「魔力の制御がきかない……リズの奴、召喚神具を連続で使いやがって……オレを殺す気が……」

「召喚神具？」

聞きなれない言葉にミリアーノは疑問を抱き呟いた。

ミリアーノに忍び寄る人影。

フレスヴァがその人影に気付き、警戒の声を上げる。

「ミリアーノお嬢様！ 危な」

次いで襲いくる圧し飛ばされるかのような衝撃。

油断していたこともあり、ミリアーノの体は弾かれるようにして宙に浮き、その場から吹き飛んだ。

二度、地面に体を打ち付けて横たわる。

真横に傾いたままの視界。

ミリアーノは一瞬自分の身に何が起きたのか理解できなかった。理解できないまま、とりあえず体を起こす。

「痛っ！」

起こした時、すりむいた膝や腕そして頬の痛みが電撃のように全身を走った。

痛み耐えながら上半身を起こし、ミリアーノは衝撃の来た方位へと目を向ける。

歩み寄る一つの影。

槍を片手にその切っ先をミリアーノに定め、かまきり螭螂頭と緑色の皮膚を特徴とする虫民族の男はニヤリと笑いながら迫ってくる。

「あんたが噂の白羽使いの嬢ちゃんか。一次予選は上手く突破できたみたいだが二次は奇跡で通れるほど甘くはないぜ」

ミリアーノは恐怖に顔を強張らせ、腰で這い逃げる。

近づいてくる虫民族の男。その男の片足にしがみつく何か。

虫民族の男は進まない片足に違和感を覚え、視線を落とした。

そこには息絶え絶えながらも必死に、虫民族の男の片足にしがみついて離れないクレイシスの姿。

虫民族の男は笑った。

「そんなところに居たのか、大魔法使い。あまりにも惨めな姿で気付かなかったよ。」

ちょうどあんたの元相棒を見てきたとこだ。いつものように別ルートで決勝戦に進んでいったぜ？　ずいぶんとご機嫌ななめみたいだったがな。

おかげでかなりの数が減ったが、あんだだけ神具をガンガン使いまくってたんじゃ、てめえは生きた心地もねえだろ？　大魔法使い。まあこれくれたばらねえとこが大魔法使いの恐ろしさってやつか。普通の魔法使いだったら、あんだだけ神具を使われた日にやあとつくにあの世に逝つてら。

と言つても、見ている分じゃてめえももうすぐつてとこだがな。今年も大人しくリズと一緒に居りゃあそんな醜態さらさなくて済んだのによ。」

蹴り飛ばされるも、クレイシスは再び虫民族の男の片足にしがみついて引き止める。

虫民族は苛立たしく舌打ちした。

「しつこい野郎だ。ここで引き止めても幻影には何の影響もねえつてのによ。」

愚痴るように呟いた後、ミリアーノに向けて槍を構える。

クレイシスは察してミリアーノへ視線を向けた。鋭い声を飛ばす。

「何やってんだ、逃げるミリアーノ！」

クレイシスの声でミリアーノはびくつと身を震わせ我に返る。

ようやく自分の置かれた現状を知り、逃げ出そうと腰を浮かすもクレイシスのことが気になり、その場に留まる。

「あなたを置いていけない！」

「お前がやられたら終わりだって言っただろ！　オレのことは気にするな！　行け！」

「でも」

「いいから行け！　グランツェとアーレイが来るまで一人で逃げ切るんだ！」

ミリアーノは下唇をきつく噛むと決心する。

落としていた瓶を拾い、そして逃げるように立ち上がった。

「逃がすかよ」

虫人民族の男が持つ槍先から、幻影が生まれる。付き従うように男の周囲を飛び回るツバメの幻影。

虫人民族の男はツバメに命じる。

「GO！」

ツバメは男の頭上を旋回した後、ミリアーノに襲い掛かる。

飛んでくるツバメに気付き、ミリアーノは反射的に体を傾け悲鳴をあげた。

「きゃあ！」

寸でのところでそれを避け、バランスを崩してそのまま転倒する。手の中から瓶は離れ、ミリアーノは再び地に体を打ちつけた。痛みには耐えられず、すぐに体を起こせない。

込み上げてくる無力な自分であることの悔しさ。

ミリアーノは涙を浮かべて地をかき掴む。

「次は逃げられねえぜ、白羽使いの娘！」

ツバメは宙を折り返し、ミリアーノに襲い掛かってくる。

(もう逃げられない！)

悟ったミリアーノは両腕で顔を隠すように覆い、目を閉じ、訪れる衝撃に覚悟を決めた。

ミリアーノの耳に届くウシガエルの鳴き声。

その声にハツとして目を開く。

訪れるはずの衝撃は来なかった。

「なっ！」

虫人民族の男の驚愕する声が聞こえてくる。

「コイツ……俺の幻影を食べやがった」

ミリアーノは覆っていた両腕をそつと下ろすと、宙に視線をやる。そこにツバメの姿はない。

何気に、流れるように視線を下へ向けると、そこには一匹のウシガエルがいた。

ウシガエルの口から漏れ出るツバメの片翼。ウシガエルはそれを

手で口の中へと押し込み、ごくんと喉を鳴らす。

そしてミリアーノに向き直り、一鳴き。

ミリアーノは呆然とウシガエルを見つめた。

(カエル……？ そうよ、私の神具！)

使い手としての自覚を取り戻し、ミリアーノは手の中から消えた瓶の行方を探した。

(あつた！)

さほど距離のない場所に転がっている瓶。

ミリアーノは飛びつくようにして瓶に近寄った。

急いで手を伸ばす。

だが！

瓶に触れようとしたその瞬間、瓶に無数の亀裂が走った。

(え？)

動揺するミリアーノ。

その目の前で、瓶は消し飛ぶかのようにあっけなく粉碎した。

三、陰謀を阻止せよ【10】

「嘘……」

ミリアーノは青ざめる。思い出す、クレイシスの言葉。

【練成された神具にそんな即興物は通用しない】

このままではやられるのをただ待つだけ。ミリアーノにはもう何の神具も残っていない。

(逃げるしかない！)

逃げ切れないかもしれないが、それでもグランツェとアーレイに合流できれば。

だが、どちらにせよクレイシスが一緒になければ神具は造れない。ミリアーノはクレイシスへと振り返る。

そして気付く、虫民族の男が二撃目を放とうとツバメの幻影を生み出したのを。

虫民族の男はニヤリと笑う。

「これで終わりだ、白羽使いの娘」

ツバメの幻影が再びミリアーノに襲い掛かってくる。

ミリアーノは反射的に身を丸めて両腕で顔を覆った。

その刹那！

「がふッ！」

……え？

いつまでも襲ってこない衝撃に、ミリアーノはそっと両腕を退けて確認する。

ツバメの幻影は消えており、虫民族の男は白目をむいてその場に昏倒していた。その原因を物語るかのように佇むポルメルの姿。

ミリアーノは呆然と呟く。

「ポルメル。あなた、どうして……?」
「ばう」

ポルメルは何度も素早い手刀を繰り出しながら、ミリアーノに目で何かを訴えていた。

「ミリアーノお嬢様あー!」

森の向こうから、フレスヴァが懸命に羽ばたきながらふらふらと空を飛んでミリアーノの元へ帰ってくる。

「フレスヴァ!」

いつの間にポシエツトから出て行っていたのだろう。ミリアーノはフレスヴァを迎え入れる。

「ミリアーノお嬢様」

片手を掲げて差し向けると、フレスヴァはその手の中に舞い降りてきた。

フレスヴァは汗だくになりながら、

「ミリアーノお嬢様の身の危険を感じ、わたくしめ一大決心にと応援を呼んで参りましたぞ」

「応援?」

「ポルメルにございます」

ミリアーノはポルメルに目を向ける。

ポルメルはいまだに素早い手刀を繰り出していた。

「ばう」

そして何かを訴えている。

ミリアーノは首を傾げてフレスヴァに問う。

「精霊が参加してもいいの?」

「あのお、ミリアーノお嬢様。わたくしめも一応参加している身なのですが」

「それもそうね」

納得する。

「ばう」

訴えてくるポルメルに再び目をやり、ミリアーノは首を傾げる。

精霊の言葉は理解できない。

通訳を頼もうとフレスヴァに訊ねる。

「ねえ、もしかしてポルメルは『助けに来たよ』って言っているの？」

「否。ポルメルは『家に誰かが侵入してきたので助けてほしい』と言っております」

ミリアーノはポルメルから昏倒している虫人民族の男へと視線を移す。頬を引きつらせて、

「助けなんていららないと思うんだけど……」

「ばう」

ポルメルが行動を変える。口の中から片手いっぱい草を取り出し、ミリアーノに見せる。

「え？」

「ばう」

呆然とするミリアーノをよそに、ポルメルは何を思っただけかクレイシスの傍に座り込んだ。

「ねえ、何て言っているの？ フレスヴァ」

「直訳いたしますと『草、持っているよ。草』と申しておりますが「意味わかないから」

ミリアーノはお手上げして苦笑いを浮かべた。

「ばう」

ポルメルがクレイシスに向けて一鳴きする。

苦しみなながらも、そっと顔を上げるクレイシス。

速攻。

「うぐっ！」

ポルメルがクレイシスの口の中に強制的に草を押し込む。

「ばう」

その様子を啞然と見つめるミリアーノとフレスヴァ。

「ミリアーノお嬢様、ポルメルが『薬草をあげるよ』と言っておりますが」

「……ってか、もう無理やり食わされてるし……」

三、陰謀を阻止せよ【11】

回復どころか気絶してしまったクレイシスをポルメルが背負って、ミリアーノはポルメルとともに歩き出す。

周囲も森も、さきほどとは一変してしまったかのようにすごく不気味で静かだ。

「なんかいきなり……変に静かになったよね」

イベントの参加者たちを誰一人として見ていない。ミリアーノは不安を浮かべ、焦るようにポルメルに訊ねる。

「ねえ。私達、迷子になったわけじゃないんでしょ？」

「ばう」

ポルメルがこちらの質問に答えてくれるも理解できない。

「ミリアーノお嬢様」

ポシエツトから顔を出すフレスヴァに視線を落とす。

「ポルメルは『大丈夫だよ』と申しております」

「そう。それならいいんだけど……」

道を進めば進むほど、鬱蒼うつそうと生い茂る木々の天蓋てんがいに光は遮られていき、仄かな薄暗さと朝もやのような霧がだんだんと濃くなっている。

そして聞こえてくる、不気味な鳥の声。時折揺れる木々のざわめき。

ひっ、とミリアーノは過剰に反応し、恐怖に身をすくめた。

「なんか怖いよお。魔物とかいきなり出てこないよね？」

と、ポルメルに話題を振ってみたが、ポルメルは答えてくれない。晴れない不安。

ミリアーノはちらりとクレイシスを見た。

ポルメルに薬草を口に入れられて以来、いまだにぐったりしていてぴくりとも動かない。

そんな彼を背負って、ポルメルは導くようにミリアーノの前を歩き続けている。

(何かがおかしいわ)

ミリアーノは顎に手を当て考え込んだ。

(いくら島の番人とはいえ、初対面の時からあまりにも私達にあれこれと親切にし過ぎる)

視線を再びクレイシスへと戻す。

そして、ピンと察した。

(もしかして戦力となるクレイシスを先にやつつけておいて！)

思い出す、幼い頃母に読んでもらった絵本『ヘンデルとグレートル』の話。

「ひいひいっ！」

ミリアーノは悲鳴を上げてその場に腰を抜かした。

ポルメルが足を止め、こちらへ振り返り首を傾げる。

「ばう？」

「どうしたのでございますか？ ミリアーノお嬢様」

ポシエットから心配そうにフレスヴァも見つめてくる。

二つの視線を集め、ミリアーノは恐々と声を震わせ答えた。

「そ、そうよ。きつとそうよ。ポルメルの正体って実は魔法使いのお婆さんなんだわ。私とクレイシスを家に連れ帰って鍋を煮立て、

そして今晚のおかず

フレスヴァが呆れるようにため息を吐く。

「あのお、ミリアーノお嬢様？ 何をどう想像されたのかわかりませんが、わたくしめども精霊は人間を食べません」

ミリアーノは震える指先をポルメルに突きつけ、

「でもフレスヴァ、この精霊やつぱりおかしいよ。私達をどこかに連れて行くこうとしている」

「ずっとさきほどの一本道を歩いてきただけでしたか？」

「でもフレスヴァ、周りの様子もなんだか変だし、それに クレイシスを一撃でやつつけたんだよ？ 無抵抗の人間をやつつけるな

んで、こんな精霊聞いたこと無いわ」

「それはミリアーノお嬢様の誤解でございます。彼が気絶したのは薬草のおかげ。体内の防衛本能が無事働いたのでございます」

ミリアーノは首を傾げて、

「……防衛本能？」

「そうでございます。例えばすと、ミリアーノお嬢様の目に虫が飛び込んできた時、反射的に^{まぶた}瞼を閉じると同じことでございます。

魔法使いの持つ魔力ストックが最小限に達した時、通常、魔法使いは命を守る為に体内の一部機能の停止　つまり気絶をして強制的に神具との縁を切るのでございます。

この魔法使いの場合、何らかの形でその機能が^{まひ}麻痺した状態となつておりましたので、薬草にてそれを治し、正常に機能させたのでございます」

「……………」

ミリアーノは腰を上げて立ち上がる。お尻についた砂ほこりを手で払いながら表情を変えず、

「ごめんフレスヴァ。今の説明すつごくわかんなかった。まず『魔力ストック』って何？」

フレスヴァが気落ちしたように頂垂れる。

「ああそうでございます。もうこれはサラリと聞き流す程度で結構でございます。

魔力ストックとは、魔法使いが精霊から受け取る一定量の精霊エネルギー、つまり魔力を体内に留め、維持していくことを言います。魔法使いにとって魔力とは大切な生命の源。それが減少すれば補充を行わなければなりません」

「補充？」

「精霊に魔力をもらうのでございます」

「それつつまり、フレスヴァが森の新鮮な空気を食べるのと同じで、魔法使いにとって魔力がご飯ってこと？」

「否。ご飯と魔力は別でございます」

ずりりと肩をすべらせてミリアーノ。

「なにそれ」

「つまり、腹が減ると魔力がなくなるのは別問題。どちらも欠けてはいけないのでございます」

「ふーん。なんか大変そうね、魔法使って」

曖昧に納得しながら、ミリアーノは再び歩き出した。

ポルメルも一緒になって歩き出す。

少し間を置いて、フレスヴァはさきほどの話を続ける。

「そういうわけでございまして、ミリアーノお嬢様」

「なに？」

「ここからが大事な話ですのでよく聞いておいてください」

「わかつたわ」

フレスヴァが咳払いを挟み、真面目な口調で説明してくる。

「ミリアーノお嬢様は神具を扱い、平然と幻影を生み出しておいでですが、それを生み出す時どのくらいの魔力が消費されているか気にかけてございますか？」

ミリアーノは足を止める。

「どうのこと……？」

「神具が生み出す幻影は無限のものではございません。一度魔力を失った神具は魔法使いの魔力を強制的に喰らい、生まれてくるのでございます」

「えっ！　じゃあもしかして私が神具を使ったからクレイシスはあんなに苦しんでいたの？」

「否。あの程度の神具で苦しむことなどあり得ません」

「じゃあどうして？　なんで急にこうなっちゃったの？」

問い掛けに、フレスヴァが片翼の先を下くちばしに当てて唸り考え込む。

「もしかしたらこの魔法使い、何か他の頑丈な神具に陣を刻ませていたのかもしれない」

「じん？」

「バウ」

「やはりそうでありましたか」

「ちよつと。精霊同士で納得し合っていないで私にも教えてよ」

途端にフレスヴァが表情を変え、まるでお化けを真似るかのごとく両翼をしな垂らせ、怖い顔で説明してくる。

「陣。正式には魔法陣というのですが、これは魔法使いとその神具とをつなぐ、いわば『呪いの足枷あしかせ』にございます」

「呪いの……足枷……」

ミリアーノはごくりと生唾を飲み込んだ。

フレスヴァが頷き、言葉を続ける。

「通常、魔法使いは魔力ストックが最低限に達すると命を守る為に神具との縁を切るのですが、陣を刻んだ神具から命を守ることは不可能です。永遠に切れない鎖と言いますでしょうか。これを魔法使いが神具に刻んだが最後、魔法使いはその神具から永久的に逃れられなくなり、気絶も許されずに命の源が尽きるまで、強制的に魔力を奪われ続けるのでございます」

「尽きる、まで？」

「つまり 死」

「死!？」

ミリアーノは悲鳴に近い声でフレスヴァの言葉を繰り返した。

フレスヴァが両翼を組んで唸る。

「この魔法使いはあまり良い環境に恵まれていなかったのでしょうか。神具に陣を刻むとはよほどの理由があつてのこと。脅されでもしない限り、魔法使いが神具に陣を刻むなどまずあり得ません。恐ろしきファルコム大帝国。魔法使いという存在を何だと思っているのでしょうか」

ミリアーノは暗く俯く。

脳裏に浮かぶ、リズさんのこと。

(リズさん……まさか知っていてわざと幻影を出しているわけじゃないんだよね?)

きゅつと拳を固め、呟く。

「教えてあげなきゃ……」

「へ？」

問い返すフレスヴァ。

ミリアーノは目を鋭くして、声を大きくする。

「決勝戦に行こう、フレスヴァ」

「し、しかし神具がありませんぞ」

「そんなの造ればいい。早く決勝戦に行つてリズさんにこのことを知らせてあげないと　このままだとクレイシスが死んじゃう」

「気絶をしている間は大丈夫にございます」

「大丈夫なわけではないでしょ！　このままずっと放っておくわけにはいかないじゃない！」

「な、納得……。否しかし」

ミリアーノは顎に手を当て呟く。

「要はグランツェとアーレイ君が来るまで生き延びればいってことよね」

「生き延びると言われましても……」

陰気に口ごもるフレスヴァをよそに、ミリアーノはポルメルに駆け寄り問いかける。

「ねえポルメル。どこかに良い隠れ場所ってある？」

「バウ」

何と言っているのかわからない。

ミリアーノの視線は自然とフレスヴァに向く。

「フレスヴァ、通訳して」

「本気で決勝戦を目指されるのでございますか？」

半眼になってミリアーノ。

「それはあなたの内心でしょ。いいから早く通訳」

「ぎよ、御意に。『隠し通路を知っているから案内する』と申しております」

「それはどこ？　ここから近い？」

「さあそこまでは……」

首を傾げて曖昧に言葉を濁すフレスヴァ。

ミリアーノはポルメルへと目を向けた。

ポルメルが無言でミリアーノを手招く。

ミリアーノは頷き、ポルメルの後をついていった。

三、陰謀を阻止せよ【12】

ポルメルに導かれ、深い森の道を奥へと進むと、人知れずひっそりと佇む古代神殿の遺跡に辿り着いた。

ミリアーノは古代神殿の遺跡に駆け寄ると、頂からその下までを観察して感嘆の声をあげる。

「わあすごい。これってもしかして、あなたが出した幻影？」

と、ミリアーノは振り返り、遅れてやってくるポルメルに訊ねた。
「ばう」

ポシエットから顔を出すフレスヴァ。そのまま通訳に入る。

「否。ミリアーノお嬢様、これは幻影ではないそうです」

「え？　じゃあ本物？」

「ここは島の最南端。実在の古代遺跡にございます」

「最南端？　私達が居たのは北だったでしょ？」

「ばう」

「空間転移を行ったそうでございます」

ミリアーノは愕然と口を開けて、

「えっ！　ちよっと待って。それって私達、失格になったってこと？」

「否。ポルメルにイベントの権限はございません。ミリアーノお嬢様が『良い隠れる場所を』と訊ねられましたので、ポルメルがイベント精霊に見つからぬよう自分の家を紹介したのでございます」

「自分の家？」

「この古代遺跡にございます」

「え、じゃあイベントには戻れるの？」

「左様でございます」

「でもグランツェとアーレイ君は？　ずっと合流できなくなるじゃない」

「ばう」

「大丈夫だそうでございます。試練をクリア次第こちらに転送してくるよう、すでに手は打ってあるそうです」

「そう。じゃあとりあえずは大丈夫ね」

ミリアーノは状況に安堵すると、暇つぶしに遺跡を調べ始めた。遺跡正面の階段を上り、古びた両扉を触れる。

強く力で押したら壊れそうに思えたので、ミリアーノはそっと手加減して両扉を押し開いていく。

長い間眠りについていたのであるう室内に、一条の光が差し込む。風通しが悪いせいか、室内の空気は湿っぽくて少しカビくさい。

見回せば壁や床、天井といった全てが細い幹やツタに覆われており、ほとんどが森の侵食を受けて原型を失いかけている。

壁画が描かれていたのであるう、その絵も傷んで剥がれ落ちており、何が描かれていたのかもわからない最悪な保存状態。きっと歴史研究者が見たら涙を流すことだろう。

ミリアーノは振り返り、遅れて階段を上ってくるポルメルへ問う。
「ねえポルメル。この中に入ってもいい？」

「ばう」

「ミリアーノお嬢様。入ってもよろしいのですが、怪しい輩どもが侵入しているので気をつけてくださいとのことです」

「あ、そういえばそんなこと言っていたわね。どんな感じの人達なの？ 歴史研究者？ それとも宝狙いの怖い人達？」

「ばう」

「な、なんですとおっ！」

フレスヴァが転げ落ちるかの勢いで驚く。

ミリアーノはわけわからずフレスヴァとポルメルを交互に見やる。

「え？ なに？ 何なの？ どういうこと？」

「ばう」

フレスヴァが急に声をひそめてミリアーノに話しかける。

「ミリアーノお嬢様、やはりここは危険にございます。別の場所に

移動しましょう」

「え？ どういうこと？ わけわかんないよ」

「ポルメルが言いますに、複数の人間がこの島にかけられた結界を無効化し、島の精霊を脅してこの地に侵入してきたと」

「ミリアーノはきよとんとした顔で小首を傾げる。」

「それがどう危険なの？」

「召喚神具にございます」

「召喚神具？」

どこかで聞いたような言葉。

脳裏に過ぎるクレイシスがあの時言っていたこと。

【魔力の制御がきかない……リズの奴、召喚神具を連続で使いやがって】

ミリアーノはフレスヴァに訊ねた。

「ねえ、召喚神具って何なの？」

フレスヴァが珍しく難しい顔をしてぶつぶつと独り言を呟きながら唸り考え込む。

「しかし一体なぜ？ あの魔物どもを復活させる民族はとうの昔に絶滅したはず。それなのになぜ今、誰がどうやってあの魔物どもと交信を……」

「フレスヴァ？」

ハツと気付いてフレスヴァ。慌ててミリアーノへと目をやる。

「これは失礼いたしました」

「ねえ、召喚神具って一体何なの？」

「召喚神具とは精霊の中でも最高位と呼ばれる存在 強大な魔力を持つが故に封印された忌々しき魔物を呼び出す道具のことです
「います」

「正式には召魔降臨の儀式。つまり、神具の元祖ってやつだ」

彼の声が聞こえ、ミリアーノの表情に笑みが戻る。

「クレイシス！」

まだポルメルを支えを借りながらだったが、クレイシスは自分の足で立っていた。

ミリアーノは嬉しくて彼の傍に駆け寄る。

「体調はもう大丈夫なの？」

「万全ではないが、なんとかな」

その言葉に、ミリアーノはホツと胸を撫で下ろす。

「良かった。フレスヴァが『死ぬ』とか何とか怖いこと言うから」

「本当のことですぞ、ミリアーノお嬢様」

「黙っててフレスヴァ」

「ぎゃあ！」

無理やりフレスヴァをポシエットのの中に押し込む。そのままミリアーノは明るく話題を変えた。

「あ、そうよ。ココがどこかわかんないよね？ ココは」

クレイシスは古代遺跡の頂を見上げ、

「ポルメルの住処、だろ？」

目を瞬かせてミリアーノ。

「どうしてわかったの？」

「フツとクレイシスは笑って、」

「まさか今年もココに来ることになるとはな」

「今年、も？」

首を傾げるミリアーノを見つめ、クレイシスは真顔で告げる。

「リスはこの古代遺跡の地下に居る」

「リスさんが……」

「そしてファルコム皇帝も一緒だ」

「だから、なんで皇帝がこんな場所に来るわけ!？」

「ミリアーノ」

「何？」

「今がチャンスだ。取り戻しに行かないか？ 白羽神具」

「え？」

「リズはきつと白羽神具を皇帝に渡しているはずだ。もし渡していたとすれば決勝戦が始まった時、観客席に居る皇帝から奪い取ることはなんてできなくなる。取り戻すとしたら今がチャンスだ」

ミリアーノは心配に問う。

「取り戻せるの？ 白羽神具」

「ああ。可能性はゼロじゃない。」

それに、ファルコム大帝国を裏切ったオレも、あとのくらい命が持つかわからないしな」

三、陰謀を阻止せよ【13】（前書き）

お気に入り登録くださった二名の方、ありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【13】

ポルメルの案内を受け、ミリアーノはクレイシスに肩を貸しながら一緒に遺跡の中へと入っていった。

遺跡内部を最奥まで進むと、ツタに覆われひっそりと佇む古い扉。ポルメルがその扉に手をかざすと、全てのツタが退いていく。

「え？　もしかして開くの？」

訊ねると、ポルメルは無言で扉と向き合い、ゆっくりとその扉を押し開いていった。

「あ、開くんだ……」

暗闇の底へと続いている長い階段。

ポルメルがミリアーノとクレイシスに向け、一鳴きする。

「ばう」

「ミリアーノお嬢様。あとはこの階段を下りていけば辿り着けるそうです」

「わかったわ」

「それからミリアーノお嬢様。ポルメルとはここでお別れにございます」

「え、そうなの？　どうして？」

フレスヴァは何も言わず、身震いしてポシエツトの中へと隠れていった。

「あ、ちよつと！」

ポシエツトの中からはそばそとフレスヴァは言葉を続ける。

『わたくしめもそうですが、ポルメルも召喚神具が怖いからと申しっております』

「なんでそんなに怖がるのよ。精霊の王様が現れるだけでしょ？」

横からクレイシスが口を挟む。

「だからこそ怯えるんだ。相手が精霊王なだけに」

ミリアーノはきよとんとする。

「え？ どうして？」

「お前の鳥が最高位の精霊に勝てると思うか？」

「思わない。でもポルメルなら勝てそうな気がするんだけど」

「精霊王に勝てるなら召喚神具に封印されている」

「あーなるほど」

ミリアーノはぼんと手を打って納得した。

ポルメルが口の中からランタンを取り出す。そのランタンを二人に向け差し出し、

「ばう」

ポシェットの中からフレスヴァが通訳する。

『明かりをあげるよ。と申しております』

「ポルメルって何の精霊？ 口の中から色んなものが出てくるんだけど」

クレイシスがポルメルからランタンを受け取り、

「何の精霊でもなく島の精霊だ。この島に生きる精霊は体内の構造とか生態系とか未知のままだからな。不思議がっても仕方が無い」

「どうして誰も解明できないのかしら？」

「年に一度しかこの島には来られないからだろう。そのうちいつかは解明される」

「まあたしかにそうなんだけど、はてしなく遠い未来の話になりそうね」

ミリアーノは納得し、ポルメルに礼を言った。

ポルメルに別れを告げ、偽りの火を宿したランタンを手に暗闇の階段を歩き始めるミリアーノとクレイシス。

「私がりズさんを超える最強の使い手？」

「あの白羽神具が扱えたら、の話だけだな」

「何かの間違いよ。私がリズさんを超えられるはずないじゃない。だって神具の扱い方もいまだによくわからないし」

「だから、白羽神具が扱えたらの話だと言っているだろ。リズにある神具は無理だ」

「なら私に扱えるわけないじゃない」

「そうじゃない。お前はシンシア・ラステルクの娘だろう？」

「だからって扱えるとは限らないわ。ねえフレスヴァ？」

と、ミリアーノはポシエットにいるフレスヴァに視線を落とした。ポシエットからフレスヴァのくぐもった声が返ってくる。

『くぐもつともでございませう』

「お前、本当に母親から何も聞いていないのか？」

ミリアーノは静かに頷く。

「何も教えてくれなかったわ」

「そっか……」

呟いて。クレイシスはミリアーノから視線を外し、さらに小さな声で続けた。

「もしかしたら関わってほしくなかったのかもな」

「え？ 何？ 何か言った？」

問い返すと、クレイシスは「なんでもない」と首を横に振って視線を戻してきた。

「ミリアーノ」

「何？」

「白羽神具を取り戻す前に、一つ確認しておきたいことがある」

「確認？」

頷いてクレイシス。

「お前、この島に来たのは『夢で母親に誘われたから』と言っていたよな？」

「え、ええ」

「なぜ白羽神具を持ってきた？ 夢で持って来いとも言われたの

か？」

「ミリアーノは首を振って否定する。

「あれは私が勝手に持ってきた物なの。お母さんの過去に関すること、少しでも知りたかったから……」

「お前の母親はそれを知ってほしくないから隠していたんじゃないのか？」

「ミリアーノは足を止めた。

「そのことでクレイシスも立ち止まる。

「クレイシスはそのまます言葉を続けた。

「白羽神具は最強であると同時に使い手にハイ・リスクが伴う。あの神具は幻影を成功させれば確かに敵無し最強だが、反面もし幻影に失敗すれば、通常の神具と違って使い手の命を奪う。

「命を懸ける覚悟が、お前にあるか？」

「顔を俯け、ミリアーノは答える。

「私……」

「その覚悟がお前に無いのなら、これ以上先へ進むのは止めよう」

「進むのを止めたらどうなるの？」

「使い手のいない白羽神具を破壊することは簡単だ。リズは決勝戦で白羽神具を破壊し、勝利を宣言するだろう。そして世界は誰にも止められなくなった召喚神具によって滅ぼされていく」

「え？」

「お前ならファルコム皇帝の陰謀を止められる」

「ミリアーノの目が点になる。呆けた顔で、

「……何か今サラリと、陰謀とか何とか怖い言葉が聞こえたんですけど」

「皇帝がずっとこんな些細なイベントごときで満足するとも思っていないのか？」

「フレスヴァがポシエットから勢いよく顔を出してくる。

「まさかッ！ 召喚神具の魔物を解き放つ気じゃないでしょうな！」

「そのまさかだ。オレが皇帝から命じられていたのは決勝戦でリズ

が持つ神具の魔物をこの世に解き放つこと。

あの時ミリアーノに出会ってなければ、オレはいつも通りハイエナ民族に捕まり、無理やりにも計画を実行させられただろう。いや、たとえオレが皇帝を裏切ったとしても、神具に陣を刻んでいるんだから計画は問題なく進む。

世界の中核である教皇庁神殿のトップが表舞台に出てくるのは年に一度のこの日だけ。トップを潰せば世界は混乱し、次なる統率者を求め始める。ファルコム皇帝はそれを狙っているんだ。今までそれが出来なかったのは白羽神具の使い手 シンシア・ラステルクが生きていたからだ」

「私のお母さんが……生きていたから……？」

「そうだ。引退した身とはいえ、彼女が負けたという記録はどこにも存在しない。かつては召喚神具をも打ち滅ぼしたと云われている」「どうやって？」

クレイシスはお手上げし、

「さあな。どうやって打ち滅ぼしたのかも記録に残っていない。皇帝はそれを何よりも恐れている」

そして手持ちのランタンで先の道を照らし、言葉を続ける。

「だから皇帝は知ろうとした。白羽神具の強さの秘密を。シンシア・ラステルクは決勝戦の前に、必ずこの遺跡の地下に訪れていたそう
だ」

「私のお母さんを見たの!？」

「オレじゃない、ファルコム皇帝がだ」

「もしかしてファルコム皇帝って、お母さんのイベント仲間だったりする？」

「さあどうだろう。皇帝の言動を見る限り、とてもそういう関係には見えないがな」

かざしていたランタンを下ろし、クレイシスはため息をついた。

「シンシア・ラステルクが王者から退いたのはオレが生まれる前の話だ。噂以外のことは知らない。でも本当に伝説通り、白羽神具が

召喚神具をも凌駕する力を持っているならば、オレはこの目で見てみたい」

「見てみたいって 幻影がどんなのかわからないと私だって無理だよ」

「白羽神具の幻影は誰も知らないし見た者がいない。だからこそ記録にも残らない『形無き幻影』だと云われている。皇帝も白羽の正体がわかっていたらなら、もっと早くに何らかの手は打っていただろうな」

「……形無き幻影？」

「そのヒントがこの地下に眠っている」

「ヒント？ 私にもわかる？」

「わかるものだと願いたい。サラが最近、書物の中からヒントとなる何かに気付いたと言っていた」

「あの知識者の女の子？」

「ああ。運よくその解説が聞ければ、そこから何か掴めるかもしれない」

「わかったわ。行こう、この地下に」

ミリアーノとクレイシスは再び階段を下り始めた。

三、陰謀を阻止せよ【14】（前書き）

お気に入り登録くださった方ありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【14】

「うわあ、なにココ。すごい……」

階段を下りてすぐ、辿り着いた地下はとても深く広い闇の空間が広がっていた。

空間には太く大きい白柱石が建ち並び、暗闇の天井を支えている。クレイシスが前方の道を照らし、

「このまま真っ直ぐだ。側面には行くなよ。両端とも底の深い水溜めの溝がある」

「わかったわ。真っ直ぐ行けばいいのね」

ミリアーノとクレイシスは白柱石が導く回廊を歩き出した。

二人の足音が響く。

静寂な空間に滴り落ちる水。その音。

ミリアーノは物珍しげに見回しながら先を進んだ。

白柱石に絡みつく木の根。床は天井から滴り落ちてくる水に所々で鍾乳石が生まれている。

「ねえクレイシス、ココって埋まっているの？ それともこういう造りの建物なの？」

「もう少し声を落とせミリアーノ」

「あ、ごめん」

反響する自分の声に気付いて、ミリアーノは慌てて口を閉じた。

クレイシスが答える。

「ファルコム皇帝に古代歴史の興味が少しでもあればココの解明もされただろうが……見ての通りだ。兵力にならないものに興味は無い」

「だからってこのまま放置するなんて」

「それでもこのままで、オレはいいと思う」

「どっつして？」

「この場所は精霊が結界で守っていたほどだからだ。精霊が結界を張って守るのには二つの理由がある。一つは聖域、もう一つは知られたくない場所」

「知られたくない場所？」

「この島には多くの謎が隠されている。お前の母親はその一つを見つけたんだ」

「どうやって？」

「さあな」

と、肩をすくませる。

「ポルメルにでも聞いたんじゃないのか？」

「あ、それあり得るかも。お母さんって、なぜか精霊と会話が出来たのよね」

「まさかお前も出来るとか」

「出来たらフレスヴァに翻訳を頼んでないわ」

「そうだよな……」

その後、二人は無言で歩を進める。

しばらくして、

「あ。行き止まりだわ」

ミリアーノは壁を目の前にして足を止めた。

クレイシスが右方向に指を向ける。

「ここを右だ」

「え、でも右に行ったら水にドボンなんですよ？」

「それならオレも右に行けとは言わない」

納得して、ミリアーノは指示通り右へと壁沿いに歩き始めた。

程よく進むと、クレイシスがミリアーノを引き止める。前方に向けていたランタンを急に壁際へとかざし、

「ここだ」

「ここ？」

目を向ければ、ぽっかりと開いた空間。

そこから更に下へと続く階段があり、全体を照らすような強い明かりが漏れていた。

クレイシスが手持ちのランタンの明かりを消し、表情に緊張を走らせる。さきほどよりも声を落とすし、

「皇帝もリズもこの先にいる。慎重に行こう。見つければ命はない」

「わかったわ。あ、待って。いざという時のためにフレスヴァをここに置いておくわ」

ミリアーノは装着していたポシエットを外すと、中に居るフレスヴァにそつと声をかけた。

「フレスヴァ、私の声が聞こえる？」

ポシエットから顔をのぞかせてフレスヴァ。

「聞こえております。お気をつけくださいませ、ミリアーノお嬢様。ピンチの時はポルメルを連れ、最大限をもって救出いたしますので」

「お願いね」

ミリアーノはポシエットを壁際に置くと、クレイシスとともに足音を忍ばせ階段を下りた。

三、陰謀を阻止せよ【15】

階段を下り、ミリアーノとクレイシスは壁に身をひそめる。

光差す方から響く男の声。

「明かりの準備は整った！ さあサラ 我がかわいい姪っ子よ、この壁画の謎を解くのだ！ 超一流のお前の頭脳に解けない謎がない！ なぜなら我も頭が良いからだ！ これで世界は我が物になる。世界征服はもう目前だ、ふははは！」

ミリアーノは壁から顔をのぞかせ、様子をうかがう。

古代演劇場といったところか。内部は昼間のように明るく、たくさん照明神具があちこちに設置されていた。

舞台とされるその壇上には、想像通りの悪役面した細身で黒い皇帝服を身にまとった男がいた。隣に知識者のサラを並べて、巨大壁画を背に独り舞台でガハガハと笑っている。

ミリアーノは半眼になって内心でため息を吐く。

（いるのよねえ。世界に一人はこんな人……）

一旦、壁の影へと身をひそめてミリアーノはもう一度ため息を吐いた。

クレイシスが声を押し殺すようにして小声で訊ねる。

「どうした？」

「ねえクレイシス。想像通りの悪役面した馬鹿っぽい感じの皇帝らしき人が壇上に居ただけだ、あれっでもしかしてファルコム皇帝？」

「もしかしなくてもファルコム皇帝だ」

「国の統治は大丈夫なの？」

「ああ見えても頭はキレル奴だから気をつける」

「人は見た目じゃないってことね」

ミリアーノはもう一度様子をうかがおうと壁からそっと顔を出し、

今度は周囲に視線をやる。

観客席付近に佇む十数名の兵士と、道具屋だろうと思われる大荷物
を背負ったトカゲ男、そして戦士の衣装に腰に帯剣と凜々しい表
情のリズを見つける。

(リズさん！)

ミリアーノは無意識に体を前に出した。

クレイシスが慌ててミリアーノの体を引き寄せ、小声で叱責する。

「馬鹿、見つかるだろ！」

「ごめん。でもリズさんを見つけて」

「リズはお前の味方じゃない。白羽神具が奪われた時のこと、よく
思い出せ」

ミリアーノは気分を沈ませ、顔を俯ける。

「……うん、わかってる」

「このままもう少し様子を見よう。取り戻すチャンスは必ず来る」

ファルコム皇帝が上機嫌に鼻を鳴らしてサラに訊ねる。

「壁画の謎は解き終わったか？ サラ」

サラはファルコム皇帝に視線を移すと、ドレスの端をちよつと掴
んで辞儀した。

「はい、皇帝陛下。謎は解けました」

「では解説を始めろ」

「はい。まずは壁画に描かれているオリーブを収穫している三人の
女神ですが、彼女達は古代より語り継がれる神話 オリンピスに
出てくる運命の三女神モイライでした。右からラケシス、クロトー、アト
ロポス。過去、現在、未来と白羽神具が受け継がれることを示して
います。

そして彼女達の背景にあるオリーブの木ですが、これは古代、オ
リーブ油が人々の生活にとって欠かせない必需品だったことを表し
ています。実が収穫できる つまり、白羽神具が受け継がれるこ

とで町が繁栄する、平和であることを意味しています。

従って、白羽神具の幻影を作り出すとすれば平和を意味した何かでなければなりません。結論を申しますと、白羽神具に攻撃性のある幻影は出せないということです。

つまりそれは、こちらの幻影が攻撃性であれば白羽神具は手も足も出ません」

サラの解説にファルコム皇帝は満足そうに頷く。

「そうか。よく調べたなサラ。偉いぞ」

言って、サラの頭を優しく撫でた。

するとサラの無表情だった顔がやんわりとほころぶ。

「ありがたき幸せにございます。皇帝陛下」

「それでこそ我が姪っ子だ。我が血筋に馬鹿はおらん」

さてと。呟いて、ファルコム皇帝は観客側に居る者たちに視線を流した。

三、陰謀を阻止せよ【16】

「我が帝国の夜明けは近い。この世界に我が名を轟かせ、この世に生きる全ての者たちを我の前に跪ひざまずかせてくれよう」

ファルコム皇帝は懐から白羽神具を取り出すと、それを掲げてみせた。声を大きく張って、

「恐れるものなど何もない！ たとえこの神具が最後の足掻きを見せようとも徹底的に叩き壊してくれる！ これでこの世界は我がファルコム帝国の物だ！」

兵士たちは一斉に姿勢を正し、右手を掲げて「オー・ワン・ファルコム！」と声をそろえて繰り返し叫んだ。

満足げに微笑むファルコム皇帝。しかし、急にその笑みを消してぼそりと呟きを落とす。

「何か足りぬ」

気変わりした皇帝の態度に兵士たちが戦くように動揺し、声まばらに萎めていく。

誰がいつ殺されてもおかしくない雰囲気の中で、皇帝は兵士の一人を睨みやる。

ひっと身をすくめる兵士。

皇帝は訊ねる。

「ハイエナ民族どもからその後の報告はまだか？」

声を震わせ兵士。

「ま、まだ何も……。捕まえ次第こちらに連れて来るように指示はしてあるのですが……」

道具屋のトカゲ男が恐れもせず口を挟む。暢のど気な口調でお手上げして、

「だから言ったじゃないツスカ、皇帝。あのクソガキを連れて行く時は意識をぶっ飛ばしてから連れて行けって。毎年毎年この機会狙

つてるんツスから。ハイエナ民族も神々の島じゃあダメダメの役立たずツスよ」

リズが冷静に口を挟む。

「意識を飛ばしてもらっては困る。彼の意識がある内でないと言喚神具の使える回数が限られてくる」

「リズの言う通りだ」

ファルコム皇帝はトカゲ男に向け、言葉が続ける。

「奴には意識を持たせ魔力を回復してもらわなければ、いざという時の駒にならん」

「その『いざ』ってのが今じゃないんツスか？」

「むむう……」

トカゲ男の鋭い突っ込みにファルコム皇帝は顎に手を当て唸る。

そのまま隣に居るサラへと視線を移し、

「サラよ。街を観光中に奴を見かけたと言っていたな？ その時奴は何をしていた？」

サラは答える。

「着ぐるみで正体をごまかすという阿呆な事をしておりました。最初は知らずに風船をもらおうと近づいたのですが、見知らぬ一般の者に妙なことを口走っていたので怪しいと思い、鎌をかけたら本人でした」

「妙なことだと？」

「新たな知識者を探していたようです。きっと私に対抗しうる者でも探していたのでしよう」

眉根を寄せてファルコム皇帝。首を傾げて、

「……探してどうなるというのだ？」

「私にこの壁画の謎は解けないと踏んでいたんだと思います」

「それきつと、サラ嬢の勘違いツスよ」

再び会話に口を挟んでトカゲ男は言う。

「もしあのクソガキが本当に知識者を探していたんなら色々と面倒かもしれないツスね。リズの話を鵜呑みにして今まで黙っていたッ

スが、イベントが始まる前にある噂を耳にしたんツス。シンシア・ラステルクの娘が今年この島に現れて街でイベント仲間を探しているって。もしかしたらあのクソガキはシンシア・ラステルクの娘と手を組んで」

ファルコム皇帝の顔色が変わる。鋭くリズを睨みやり、白羽神具を突きつける。

「リズよ、お前にもう一度訊く。この白羽神具を娘から奪い取った後、その娘の始末はつけたのだろうな？」

動揺を見せることなく平静と答えるリズ。

「その娘は火竜とともに落ちたのですから生きていますはずがありません。その噂が真実ならば今頃この計画を妨げていてもおかしくないはずです」

ファルコム皇帝は「ふむ」と納得する。

「たしかにその通りだな。あのシンシア・ラステルクの血を継いでいるならば、とうに我から白羽神具を奪還しててもおかしくない話だ」

「じゃああのクソガキの知識者探しは単なる偶然で、白羽とは関係ない話なんツスカね？」

トカゲ男の問い掛けにファルコム皇帝は頭を掻き乱す。

「あーもう良いもう良い。何がどうしてようと構わん。とにかくあのクソガキを誰かここに連れて来い。あやつが召喚神具の封印を解かんと魔物が解き放てんだ。白羽神具を壊したところで魔物が幻影のままでは話にならないか」

呆れるようにため息を吐いてトカゲ男。

「やっぱり国を出発する前にあのクソガキに封印を解かしておけば良かったんツスよ。あのクソガキがこの島で逃げるのは毎年恒例の事じゃないツスカ」

ファルコム皇帝は白羽神具をトカゲ男に突きつけながら言い返す。「そんなことをすれば教皇庁神殿の奴等が勘付いてこの島に来なくなるではないか、この馬鹿者が。世界征服をするには教皇庁神殿を

潰さねばならん。我が計画に狂いはない。狂いがあるとすれば、あのクソガキだけだ。いいから早く連れて来い」

気だるく手を挙げて了承するトカゲ男。

「へいへいッス」

「リズ、お前もだ」

「わかりました」

「サラ、お前はここに居ろ」

「はい。皇帝陛下」

そのまま散らすようにファルコム皇帝は兵士たちにも白羽神具を突きつけ叫ぶ。

「何をいつまでもボケっと突っ立ってんだカスども！ 我の命令が聞こえなかったのか！」

クレイシスはミリアーノの腕を掴んだ。

「え？ 何？」

「こつちに来るから逃げるんだよ」

「逃げるってどこに？」

「いいから早く」

言つと同時にミリアーノを連れて急いで階段を駆け上がる。

が、

「なっ！」

「きやつ！」

突如としてとんでもない転がり物が階段から沸いたかのように現れ、クレイシスを直撃する。

いきなりのことに避けきれないまま、仰け反る姿勢となるクレイシス。

その彼の後ろに居たミリアーノも、倒れてくる彼の背にぶつかり短い悲鳴を上げて倒れる。

その後二人と転がり物は、折り重なるにして階段を転げ落ちてい

つ
た。

三、陰謀を阻止せよ【17】（前書き）

お気に入り登録してください、ありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【17】

「誰だ！　そこにおるのは！」
ファルコム皇帝の鋭い声が響き渡る。

光差すその入り口で、ミリアーノとクレイシスは共に床から身を起さず。

「痛たた……ちょ、何なの？　急に」

「わからない。何かが上から転がってきたんだ」
そして。

クレイシスは今在る現状に気付き、顔を青ざめて口を閉ざす。

「何が転がってきたっていうの？」

ミリアーノは視線を落とし、折り重なって倒れている転がり物
アーレイを見て頬を引きつらせた。

「な、なんて最悪なタイミング……」

おそらく試練をクリアし、こちらに転送されたのだろう。ミリアーノとクレイシスの存在に気付いたアーレイが喜びの声を上げる。
興奮あらわに、

「あっ！　誰かと思ったらミリアーノさんと魔法使いさんじゃない
ですか！　ってことは、やった！　僕は合格だったん」

二人の浮かばない反応に、アーレイは語尾を伸ばしながら周囲を
見回して何かを察する。

「……ですよね？」

ハイテンションから一転。ただごとじゃない雰囲気静かに両手
を挙げて大人しくする。

駆け寄ってくる兵士たち。

ミリアーノとクレイシス、そしてアーレイはすぐさま兵士に捕ら

えられ、身動きできなくなった。

首を傾げてアーレイが二人に訊ねる。

「何事ですか？」

声を落としてクレイシス。

「事情は知るなアーレイ。生きて帰れなくなるぞ」

「は、はい……」

次いでミリアーノにも告げる。

「何もしゃべるなよ、ミリアーノ。その歳で死にたくはないだろ？」

「でも」

「いいから。あとはオレに任せろ」

ミリアーノは不安を浮かべたまま無言で頷いた。

その間にも兵士を掻き分けながら皇帝が上機嫌で近づいてくる。

「おやおや。こんなところで何をしていたのかな？ 裏切り者のク

レイシス君。まさか新しい仲間を集めて我に復讐しようなんて企て

ていたわけじゃあるまいな？」

クレイシスは皇帝を見据え、答える。

「この二人は関係ない。全部オレが一人でやってきたことだ。ここ

に連れて来たのはオレの居場所をあなたに知られないようにする為

だ。計画のことは話していない。二人は放してやってくれ」

皇帝がクレイシスに詰め寄りなり、いきなりクレイシスの髪を鷲

掴んだ。

「誰に向かって口を開いている？ 魔法使いの分際で我と対等に話

すな」

「もう抵抗はしない。逃げもしない。命じられていたことには黙っ

て従っ

「従って当然だ。貴様がどうこう言う権利など初めから無いのだからな」

「いいや、この権利だけはあなたの自由にできない。オレがこのま

ま何も言わずに屍になればあの魔物は永遠に幻影のままだ。他に方

法なんてない。だからあなたはオレを殺せず生かし続けている。こ

こ

の二人を解放し見逃せ、ファルコム皇帝。それがあなたにこの権利を譲る条件だ」

ミリアーノは彼に命懸けで助けられていることを知り、慌てて口を開いた。

だが、彼に鋭く睨られ口を閉じる。

二人の間に何かを感じたのか、皇帝が面白がるように笑う。手持ちの白羽神具の羽先でクレイシスの頬をぺんぺんと叩きながら、

「かつて女帝が死して守ったその封印を、惚れた女の命を守る為に解こうと言うのか？ クレイシス。面白い奴だ。お前を信じていた魔法使^{ほか}いどもは、それを知ったらさぞ泣くことだろう。」

この二人は特別に見逃してやる。貴様の戯言に付き合うのはこれで最後だ。

魔物の封印を解け、クレイシス。我が心変わりをしないうちにな」

「……………」

クレイシスは無言で皇帝を睨んだ後、視線をミリアーノとアーレイを捕らえる兵士に移す。

皇帝もクレイシスの視線を追って兵士を見る。

動く気配のない兵士に皇帝の表情が怒りに歪む。

「いつまでも何やっている？ カスども。我の言葉が聞こえなかったのか？ その二人を放せと言っておるのだ」

「は、はい！ すぐに！」

兵士は慌ててミリアーノとアーレイを解放する。

それを確認し、皇帝はクレイシスに命じた。

「今度は貴様の番だ、クレイシス。魔物を今すぐ解き放て」

三、陰謀を阻止せよ【18】（前書き）

お気に入りくださった方ありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【18】

クレイシスがファルコム皇帝へと視線を移す。

「……」

「どうした？ 何を黙っている？ さつさと魔物の封印を解け。我の気が短いのは知っているだろう？」

「捕らわれたままじゃ何もできない。オレを自由にしよう兵士に命じてくれ」

ファルコム皇帝は無言でクレイシスを見つめた。荒ぶる感情をスツと抑え、急に真顔になる。

「謀ったな？ クレイシス」

そう冷たく告げて視線を移す。流すようにしてリズで目を留め、

「リズよ」

「はい」

リズが前へと進み出る。

「護身の短剣を持っていたであろう？」

その問い掛けに、リズが足の付け根に手を当てる。そして仕込んでいた短剣を抜き放った。

皇帝は告げる。

「五秒後だ。小娘から順に殺していけ」

「わかりました」

「待ってくれ！」

クレイシスが叫ぶ。

「封印は解く！ その命令を取り消せ！」

しかし皇帝は消せとばかりに片手を振って合図を送る。

リズが動く。ミリアーノの前に歩み寄り、そして短剣を構えた。

「リズさん……」

ミリアーノは呟いたがリズの表情は変わらない。一瞬の情も垣間

見せることなく時を待っている。

「五秒過ぎたぞ、リズ」

リズが無言で短剣を振り下ろしてくる。

「止めるリズ！」

びたり、と。クレイシスの叫びがリズの短剣を宙で止めた。

クレイシスは言葉を続ける。

「魔物の封印は解いた。だから彼女を殺すな」

「ほお……」

皇帝が鼻で笑う。近くに居るサラを呼び寄せ、

「サラ、確認しろ」

「はい。皇帝陛下」

命に応じてサラはリズのところへ歩み寄る。

リズは宙で止めていた短剣を元の鞘へと収め、そして帯剣していた召喚神具を抜剣し、歩み寄ってきたサラに見せた。

刃の腹に刻まれた古代文字。

サラは確認すると皇帝へ視線を移し、答える。

「ティダ・グリフ召喚文字確認しました。魔物はいつでも召喚できます」

皇帝は笑う。

「そうか。ならばこのまま決勝戦へ行くとしよう」

が、急にその笑みを消し、

「と。その前に、だ」

冷淡な顔つきで皇帝はリズへと視線を移す。

「リズよ」

「はい」

「召喚神具を使って、そこに居る小娘と獣のガキを縛り上げろ」
ハツとするクレイシス。

「なっ！ 約束が違」

リズは躊躇うことなく剣を構え、唱える。

「意に応えよ、召喚神具」

「うっ！」

クレイシスが胸元を掴んで苦しみます。それと同時にミリアーノとアーレイはいきなり現れた縄に縛られ自由を奪われた。

ミリアーノは叫ぶ。

「やめてリズさん！ これ以上その神具を使ったら」

リズはミリアーノに召喚神具の剣先を突きつけ、

「あたいが何も知らずに使っているとでも思ったのかい？」

「え？」

「言っておいたはずだよ。アイツに関わるな、と。この国じゃ魔法使いに人権なんてないのさ。死んで悲しむ奴なんて誰もいない。それがアイツの今生きている世界なんだよ」

「まあ待てリズよ」

皇帝がリズを手で制し、ミリアーノの言葉に答える。

「そうだな。お嬢ちゃん言う通りだ。たしかにまだ死んでもらっては困る」

言って、クレイシスの胸倉を掴み、持ち上げた。

「コイツには自分が犯した罪を目に焼きつけ、悔やみながら死んでもらうとしよう」

たまらずアーレイが口を挟んだ。

「待ってください！ その魔法使いさんは僕達の仲間です！」

ミリアーノもアーレイに続いて口を開く。

「そ、そうよ！ クレイシスは私達の大事なチームの一人なのよ！

勝手に仲間を奪わないで！」

「やめろ……馬鹿」

クレイシスの呟く声はすぐに皇帝の盛大な笑い声中に消えた。

「仲間だと？ 誰が許可をくれてやった？ コイツはファルコム大帝国の所有物だ」

その言葉にミリアーノは怒りを走らせた。キツと皇帝を睨み据え、
「なんて酷い人ッ！ クレイシスの故郷を襲って物同然の扱いをするなんて！」

皇帝は目を細める。

「ほお。コイツはそんなことまでお嬢ちゃんに話したのか？ よほど切羽詰っていたらしい。お嬢ちゃん達を救世主か何かと勘違いするとはな」

ミリアーノはきつく奥歯を噛み、影で拳を握り締めていった。

（許せない、この人！）

三、陰謀を阻止せよ【19】

「あんななんて……！」

ミリアーノは怒りをぶつけるかのごとく皇帝に向け喚いた。

「あんたの野望なんて、私が白羽神具で全部壊してやるんだから！」
皇帝の視線がリズへと流れる。呆れるように、

「リズよ」

リズは嘘がバレたことにも動揺を見せず、召喚神具を鞘に収めて返事をする。

「はい」

「これはどういうことだ？ 我にわかるように説明しろ。なぜ白羽使いの娘は生きておる？」

「生きてここまで来たのなら好都合ではございませんか。決勝戦でこの娘と勝負をし、こちらの召喚神具が最強であることを世界に見せ付けてやれば良いのです」

「そんなことせずとも我の召喚神具が最強に決まっておる」

「いえ。最強とは伝説の上に立つものです。伝説が生きたままでは本当の最強とは言えません」

皇帝は手中にしていた白羽神具へと視線を落とす。

「ふむ。まあそれも一理あるな。」

ここで生かすも殺すも同じならば絶望を与えてやるのもまた一興。敗北だけでは生ぬるい。我に刃向かったことをもつと後悔させてやれねばな。

お嬢ちゃんの故郷はたしか……水の帝国、だったな」

「！」

「このイベントが終わった後、お嬢ちゃんを特等席に招待するでしょう。水の帝国が魔物に滅ぼされる様をじっくり見物してもらわねばならん」

ミリアーノの脳裏を過ぎる最悪な光景。滅び行く故郷の姿、そして助けを求める父の姿を想像し、ミリアーノの顔から血の気が引いていく。拒絶するように首を横に振りながら、ミリアーノはさすがにうろたえる。

「や、やめて……お願い」

「ふははは。白羽使いでありながらこのザマか。無力なものよ。まるでどこぞの国の無力な魔法使いどもを見ているかのようだ。なあ？ クレイシスよ」

クレイシスの表情に怒りが走る。

「お願い、やめて！」

ミリアーノが強く叫んだその時だった。

「ぐおっ!?!」

「どわっ!」

突如として皇帝の頭上に落ちてくる何か。

「陛下！」

「皇帝陛下!」

皇帝の上に落ちてきた何か。グランツェは皇帝を下敷きにしたままゆっくりとその身を起こす。きよるきよると辺りを見回し、

「ん？ どこやココ。今度はどこに飛ばされたんや？」

「退け、貴様！」

「どわっ!」

勢いよく身を起こした皇帝に、グランツェは地面へと転がり落ちた。

心配にかけよる兵士たち。

「陛下……」

「ご無事ですか？ 皇帝陛下」

「ええい、うるさいカスども！ 我に寄るな！」

その隙をついて、クレイシスが皇帝から白羽神具を奪い取る。

「なっ！ クレイシス、貴様ッ！」

「動くな、ファルコム皇帝」

皇帝に向けて真っ直ぐに、クレイシスは白羽神具の先を突きつけた。

魔法を帯びた白羽神具が淡く仄かな緑色の光を放つ。

三、陰謀を阻止せよ【20】

「……ク」

皇帝は笑い耐えるように肩を震わせクククと漏らした。

「窮鼠猫を囓むというが、まさかそんな物で我を脅してくるとはな。血迷って頭でもイカレたか？ クレイシス。」

それでどうするつもりだ？ 使い手でもないお前がそんな物を突きつけたところで無意味だということがわからないのか？」

「無意味なのはわかつている」

「ならば、それは大人しくこっちに返すんだ」

「断る」

ぎりりと。皇帝が怒りに顔を歪ませ奥歯を噛む。

「我に逆らえばどうなるか、忘れたわけではあるまいな？」

「現状は変えられる」

「ほざけ！ 現状は変わらん！ 我に召喚神具がある限りな！」

クレイシスは白羽を突きつけたまま、薄く余裕の笑みを浮かべた。

「召喚神具がこの世に一つだけだと思ふなよ、ファルコム皇帝」

視線を外すことなく、傍にいたグランツェへと声をかける。

「グランツェ」

床に寝転がって放心していたグランツェが急にむくりと上半身を起こす。

「なんや」

「あなたが独り立ち記念に祖父さんからもらったあの聖杯、少しの間貸してくれないか？」

「何に使う気や？」

疑問に首を傾げながらも、グランツェは懐にいられていた聖杯をクレイシスに投げてよこした。

受け取って。

クレイシスは聖杯の声なき声に応える。

「暗闇から解放してやるよ、不死鳥^{フェニックス}」

聖杯に刻まれる古代文字。

瞬間、金切り声にも似た甲高い鳥の咆哮^{ほっしょう}が空気を叩いて地下全体を振動させた。

グランツエが慌ててミリアーノのところへ逃げてくる。

「な、なんや！ 何が起こってるんや！」

「わかんない、わかんないよ私にも！」

ミリアーノもそこにいた兵士やリズさん達も、不安に周囲を見回していた。

風の音が、それとも怨霊の何かが闇の底へと招く声か。低く唸るような呪われた声があちこちから反芻して聞こえてくる。

まるで今にも地面や壁から手が伸びてきて引きずり込んでいくかのような雰囲気だ。

そんな中で皇帝だけが一人、狂喜に笑う。

「そうだ、そうやって魔物を召喚し続けるがいい！」

クレイシスの背後に生まれる漆黒の巨大な闇。

闇の門が静かに口を開いていく。

そこから姿を現す、火をまとった大きな一羽の鳥　不死鳥。

皇帝は立ち上がって歓喜する。

「おお！ この魔物も我が物に相応しい！」

クレイシスの横を通り抜け、皇帝は不死鳥へと近づく。

だが、

「む？」

皇帝は気付いた。みると炎に包まれていく自分の体を。

「ひ、ひ、ひいいいっ！」

悲鳴をあげながら逃げ出し、兵士たちの前に転がり込む。

「陛下！」

「皇帝陛下！」

駆け寄る兵士たち。自らの服を脱いで皇帝に覆いかぶせる。

リズがトカゲ男に向けて鋭い声を飛ばす。

「ダゲラ！」

「言われずともわかってるツスよ！」

トカゲ男はそう言って、荷物の中から急いで鞘に収まった短剣を投げて渡す。

リズは受け取り、その神具に命じた。

「水よ」

短剣から水が生まれて皇帝を包み込む。

ようやく炎から解放される皇帝。

燃えにくい素材を着ていた為か、皇帝は奇跡的に無傷だった。

「リズよ、あれを壊せ……！ 壊すんだ……！」

怒りか恐怖かもわからない声を震わせ、皇帝はリズにそう命じる。皇帝の命を受け、リズは持っていた短剣をその場に捨てた。帯剣していた召喚神具を鞘から抜き放ってクレイシスのところへと歩み寄る。

そして一定の距離を置いて立ち止まり、抜き放った召喚神具の剣先を彼に向けて構えた。

「忘れたのかい？ あんたはこの剣に陣を刻んでいるんだよ。あたいがこれに命じたら」

「リズ」

遮るように、クレイシスは言葉を切り出す。

「お前が戦うべき相手はオレじゃない。そして戦う場所もここじゃない」

睨み合うリズとクレイシス。

やがて、リズがフツと力抜けたように微笑する。

「あんたがそんな顔をするなんてね。そっぴやあたいと初めてチームを組んだ時、あんたこう言ったね？」

『お前は最強の使い手じゃない』と。

あんな伝説ごときの白羽使いがこの世の最強だと本気で信じているのかい？」

「ああ。オレはミリアーノに全てを賭けるつもりだ」

「彼女がイベントで負けたらどうするんだい？」

「リズ、お前が負けたらどうするつもりだ？」

「あたいが負けるだって？」

リズは高らかに笑った。

「随分な自信だね、クレイシス」

「ミリアーノはお前に無いものを秘めている」

眉根をひそめてリズ。

「あたいに無いもの？ 天才の素質ってやつかい？」

「違う。無鉄砲で何者にも屈しない大胆な発想だ。だからこそ白羽神具がこの世で最高の幻影を生み出す最強の神具なんだ」

「面白いこと言ってくれるじゃない」

「嘘だと思っなら勝負してみればいい」

クレイシスは魔力の宿った白羽神具をリズにみせた。言葉を続ける。

「神具の魔力はこれで互角。あとは」

不敵な笑みを浮かべて、

「言わなくてもわかるよな？」

「……………」

リズはスツと構えを解くと、召喚神具を鞘に収めた。

「あたいは負けないよ。最強の使い手だから」

踵を返し、背を向けて。リズはその場から身を引く。背中越しに、決勝戦で待つ。邪魔者はあんたの魔力がかかっていない神具で全部片付けておくから、タイムリミットまでに白羽使いを闘技場に連れてきな」

三、陰謀を阻止せよ【21】（前書き）

お気に入り登録をしてくださった方々ありがとうございます。

そして継続して登録して下さっている方々、本当にありがとうございます。

心よりお礼申し上げます。

三、陰謀を阻止せよ【21】

ファルコム皇帝達が地下遺跡を出て行った後。

クレイシスの背後にいた不死鳥の姿が徐々に消えていく。闇は透けて薄まり、そして静けさが戻る。

何事もなくその風景、その全てが戻った頃。

糸切れた人形のようにクレイシスは地面に倒れこんだ。

「クレイシス！」

ミリアーノの声が地下に響く。

駆け寄ろうと腰を浮かせたグランツェに向け、ミリアーノは叫んだ。

「お願い、この縄を切って！ 早く！」

グランツェがミリアーノに訊ねる。

「何があつたんや？」

「説明は後ですから！ 急いで、早く！」

疑問符を浮かべながらもグランツェは背負っていた荷物から小型ナイフを取り出し、彼女等の縄を切る。切りながらぶつぶつと、

「やっぱまだ前の仲間と繋がってたんやな、あの大魔法使い。急に俺らに味方して怪しいとは思ってたんや。嵌められたんか？」

「違うの、そうじゃないの！」

「僕がいけないんです！ 変なタイミングで騒いだから」

「なんや、ようわからん」

「ねえまだ切れないの？」

「待てや、今切っている。アーレイ、お前のはもう切れてる」

「え？ あ、はい。すみません」

「急いで！」

「わかつてる。今やっているとこや。ほら、切れた」

自由になるやすぐに、ミリアーノはクレイシスのもとへと駆け寄った。

うつ伏せて倒れている彼を仰向けにし、ミリアーノは必死に声をかけて肩を揺する。

「ねえ起きてお願い！ 目を開けて！」

もう死んでいるのではないかと思うほど顔色が無い。

「おい、どうしたんや？ 何事や？」

グランツェとアーレイが心配そうにこちらに来る。

ミリアーノはグランツェに助けを求めた。

「どうしよう！ クレイシスの顔色が無いの！」

「なんや？ 貧血か何かか？」

不安を浮かべながら、ミリアーノは首を弱々しく横に振る。

「わかんない。でも、もしかしたらまた魔力ストックが最小限になつて防衛本能が働いたのかも」

「なんやて！ お前それ、ただ事やないやんか！」

ようやく焦りをみせるグランツェ。急いでミリアーノと場所を入れ替わり、彼の肩を激しく揺する。

「おい！ しっかりしろや、魔法使い！ 意識があるんなら目を開けろ！」

アーレイがグランツェに言う。

「これ以上このままにするのは危険です。あまりにも魔力ストックの低い状態が続けば最悪の場合、脳死や脳への深刻なダメージを負うことがあるって聞いたことがあります。今は急いで島の精霊を探し、イベントを抜けて地上の精霊に魔力をもらわなければ、このままだと確実に手遅れになります」

「そやな、アーレイの言う通りや」

「わかつたわ。私も探す」

「ちょっと待ったでございます！」

入り口の階段から姿を現し、こちらへと駆け寄ってくるフレスヴァア。

すると虚空からポルメルも姿を現し、フレスヴァアの後を追って遅れてこちらに歩いてくる。

ミリアーノはフレスヴァアを見て泣きつくように駆け寄った。

「フレスヴァア！」

拾い上げて胸の中で抱きしめる。

「どうしよう、フレスヴァア。クレイシスが……」

「わかっております、ミリアーノお嬢様。わたくしめ、お嬢様の身の危険を知ってすぐにポルメルを呼びに行つたのですが、助けに入ろうにもどうしても召喚神具が怖くて近づけなくて」

「ばう」

「ありがとう、ポルメルも来てくれたのね」

ミリアーノは遅れてやってきたポルメルに抱きついた。

事情の飲み込めないグランツェとアーレイ。互いに顔を見合わせるも、すぐにアーレイが行動に出る。ポルメルに恐る恐る近づき、

「あの……僕達をすぐに街へ戻していただけないでしょうか？ 僕達はこのイベントを棄権することに決めました」

ミリアーノもポルメルにお願いする。

「私からもお願い。あなたの力で私達を街へと戻して。このままじやクレイシスの命が危ないの」

「……………」

ポルメルは無言のまま二人を見つめていた。

やがてミリアーノの胸元から咳払いが聞こえてくる。

注目が集う。咳払いした本人であるフレスヴァアへと。

「ミリアーノお嬢様。本当にそれでよろしいのですか？」

「当たり前じゃない、フレスヴァア！ 早くしないと」

「わかりました。では、このままファルコム皇帝の陰謀に目をつむられるのですね？」

「そ、それは……」

ミリアーノは言葉を失い、顔を俯けていく。

「目の前にある小さな可能性をもお捨てになり、短絡な結果をお選
びになって。本当にそれで後悔はしませんね？」

ミリアーノは疑問に呟く。

「目の前にある……小さな可能性？」

フレスヴァが再び咳払いをし、

「ミリアーノお嬢様。ほんと、わたくしめを何だと思っていらっし
やるのですか？」

その言葉にポルメルが口の中から小の白衣を取り出す。

ポルメルから小の白衣を受け取ってフレスヴァ。それをかっこよ
くビシツと着こなし、

「わたくしめは森の精霊にして番人、そしてミリアーノお嬢様の頼
りある執事ですぞ？ もしもの時は頼ってくださいと申し上げてい
たでしょう」

「あ、そっか。フレスヴァは」

「魔力ストックが無いのであれば、わたくしめの魔力を差し上げれ
ば良いことです。せつかく魔法使いが命懸けで得たチャンスが無駄
にしてはいけません。」

さあ、魔法使いのことはわたくしめに任せ、ミリアーノお嬢様達
は白羽神具の謎をお解きください。きつと白羽神具の幻影に関する
何かがああ壁画に隠されているはずですよ」

三、陰謀を阻止せよ【22】

アーレイはしばし壁画を見つめた後、考え込むようにして顔を俯け、顎に手を当てる。

「平和を意味した何か、ですか」

クレイシスの隣に座り込んでいたミリアーノ。壁画を見つめていたが、その視線をアーレイへと移す。白羽神具を胸の前で握り締めながら、不安の表情を浮かべて訊ねる。

「何かわかったの？」

「そうですね……」

「待てや、おい！ それ返せや！」

二人の後ろをグランツェとポルメルが通り過ぎていく。

どうやらポルメルに荷物の中から何かを取られたようだ。

無視してミリアーノは再びアーレイへと視線を戻した。

アーレイが、ずり落ちた眼鏡の位置を指で正しながら、さきほど止めていた言葉を続ける。

「平和というキーワードだけではあまりにもこう、漠然ばくぜんとしていますね」

「そこなのよ。一次予選みたいにハッキリ『蛙』ってイメージしやすいものじゃないと、なんだかさっぱり掴めなくて」

「いえ、イメージするのは簡単ですよ。オリーブ、そして運命モイの三女神ライが意味すること。本当にこの壁画が白羽神具に関係しているのならば、この絵をそのまま思い浮かべるだけでいいんです」

「え？ そうなの？」

「ただそれを実行する前に、不安に思うことが一つあります」

「不安？」

アーレイは頷く。

「はい。実はモイライには二つの意味があるんです」

「二つの意味？」

「僕を知識者として育ててくれた師匠は、モイライには二つの意味があると言っていました。」

一つは【時の流れ】。未来、過去、現在を三女神で表しているという意味。

そしてもう一つは【生命の流れ】。割り当てる者、紡ぐ者、そしてそれを断ち切る者。師匠はその三女神であるとも言っていたんです」

「違ったら何かあるの？」

「最後の『断ち切る』というのがなんとも……」

「……たしかに怖いわね」

アーレイはシュンと狼耳を垂れて、自信なく顔を俯ける。

「すみません、ミリアーノさん。僕の知識だとあまりお役に立ちそうもない気が……」

ミリアーノはにこりと微笑む。心配させまいと白羽神具を振ってみせ、

「きつと大丈夫だよ」

「でも」

「大丈夫。クレイシスが復活したら、きつとなんとかなるわよ」

とは言ったものの。

ミリアーノは不安を浮かべて隣にいるクレイシスへと視線を流した。

彼が目覚める様子はない。今なおフレスヴァから光を おそらくこれが魔力と呼ばれるものなのだろう を与えられていた。

(彼が何か言ってくれたらそれだけで心強いのに……)

ミリアーノは壁画へと目を移す。

(お母さんはどんな幻影を出したんだろう?)

それさえわかればどんなに楽か。

記憶を辿るも、どれも手がかりとなるものは思い浮かばない。

ふと。

微かに彼の呻く声が聞こえてきて、ミリアーノはハッと我に返った。すぐに彼へと目を向ける。

見れば、クレイシスが一人で無理しながら体を起こしていた。その傍でフレスヴァが慌てふためいている。

「そんなすぐに起きられる状態ではありませんぞ！」

「クレイシス！」

ミリアーノはふらつく彼に手を貸す。

だがこちらの手を掴んで、彼は言った。

「大丈夫だ。一人で起きられる」

しかしその声はまだ弱々しい。

ミリアーノは心配に彼の様子をつかがいながら、

「本当に大丈夫なの？」

「ああ……」

絶対無理している。それは明らかだった。

グランツェとアーレイが傍に寄ってくる。ポルメルも遅れて、

「つて返せや、コラ」

隙見てポルメルから壺を取り戻し、グランツェはクレイシスに訊ねる。

「もう大丈夫なんか？」

「まだ顔色が悪いですよ」

「ね？ ほら、みんなの言う通りだよ。まだ安静にしていた方が

」

クレイシスはグランツェへと目を向け、

「オレはどのくらい気絶していた？」

首を傾げてグランツェ。

「そんなに経つてるとは思わんが。子ヤギが乳を飲み終わるくらいは経ったんやないんか？」

即座にミリアーノは内心で突っ込む。

(つまりそれってどれくらい?)

その表現で分かったのか、クレイシスが動き出す。

「タイムリミットまでに決勝戦の会場に入らなければ」

言葉半ばでクレイシスは崩れるように地面に倒れこむ。

「クレイシス！」

「まだ無理でございませぬぞ！」

「おいおい無理すんなや」

「まだ安静にされていた方が！」

手を貸すミリアーノを払って、クレイシスは地面に手をつき頭を下げた。

突然の彼の行動に目を丸くする三人。

クレイシスは懇願の意を込めて言葉を口にする。

「頼みがある。オレと一緒に決勝戦まで行ってほしいんだ。もう時間がない。このチームならきつと何かが変わる。」

オレ一人がこんなところで必死になったって意味がないんだよ」

「……………」

しばらく無言の時間が流れた後。

グランツェが急に雰囲気を変すかのごとく明るくポンと手を打った。

「なんやそういうことやったんか、大魔法使い」

え？ とみんなの視線がグランツェに集う。

「やっぱイベントに参加するんやったら決勝戦まで行かな面白いっちゆうことやな？」

顔を崩してクレイシスが問い返す。

「は…………？」

「たしかにこのチームは優勝への意気込みっちゅーもんが足りん。それは仕方のないことや。お前を除いてはみんな初参加やからな。だからって何も八つ当たりしに前の仲間に喧嘩売ることないやろ？」

こんな体ポロポロになってまで無理して一人で盛り上げることやない」

ミリアーノはそこでようやく気付いた。

（あ。そういえば、グランツェにまだ事情を話してないんだった）
グランツェがクレイシスの肩にそっと手を置き、何かを諭す。

「優勝したい気持ちはみんな同じや、大魔法使い。そこは心配せんでええ。俺もちゃんと試練の間をクリアしてきた。もちろんアーレイも、ココにいるということはクリアしてるんや。ちゃんと周りを見るや、大魔法使い。仲間みんなそろつとるやないか」

ぐっと拳を固めてグランツェ。

「俺の道具屋としての実力を見せるのはここからや」

なぜかつられるようにアーレイも急にやる気をみなぎらせ、

「ぼ、僕だつて！」

負けじと拳を固めて叫ぶ。

「思い出しました、故郷を旅立つ時に固めた決意を！ 僕は一流の知識者になるって決めたんです！ 優勝して師匠を驚かすつて！

こんなところで挫折している場合じゃありません！」

「……」

もはや言葉もないクレイシス。混乱しているのか、呆然と二人を見つめている。

そんなクレイシスの様子に、ミリアーノはくすりと笑った。アーレイを真似るかのようにして拳を固め、元気よくその場を立ち上がる。

「そうだよ！ みんな揃ったんだから絶対勝てるよ！」

言つて、ミリアーノは壁画へと振り向いた。

（解けないものをいつまでも考えたつて仕方ない。だったら）
思いつくままにミリアーノは壁画に駆け寄る。

舞台上上つて壁画を背にし、

「私たちが誰にも負けない神具を作ろうよ！ この絵に囚くわわれていたつて何の解決にもならないし！ ね？」

グランツェが首を傾げて今更な質問をしてくる。

「そーいやお前らなんでその絵にこだわつとるんや？ 二次予選は

戦闘やったんやないんか？」

「この絵も重要だったの！
もそう思うでしょ？」

ね？ そうしない？ フレスヴァ

「ミリアーノお嬢様にしては賢明な判断でございます」

不機嫌に頬を膨らませてミリアーノ。

「私にしてはってどういう意味よ」

機嫌をとろうとしてか、フレスヴァが駆け寄ってくる。途中、舞台の段差と更に加えてミリアーノの身長との高さに気付いたのか、両翼を広げて地面から飛び立った。

懸命に宙を羽ばたく。その位置はミリアーノの頭上より高くに。

「あ、すごい。最高新記録だね、フレスヴァ」

というより、これが本来在るべき姿なのだが。

ミリアーノは右手の甲を差し出してフレスヴァを迎え入れた。

フレスヴァがミリアーノの手の甲に舞い降りる。

まさにその瞬間！

アーレイがハツとして大声で叫んだ。

「ミリアーノさん！ そのままストップです！」

「え？」

ミリアーノはフレスヴァを手の甲に止まらせたまま身を固めた。

アーレイに集う視線。

その視線を受けながらも、アーレイは何かを悟ったように驚き目を見開いている。そのまま震える両手で画家のようにして両の親指と人差し指を合わせ、四角の空間を作ってポーズをとった。

壁画はまるでこの瞬間を予言していたかのように、一人の女神の姿と今あるミリアーノの姿を一寸違わずピタリと重ねていた。

アーレイは興奮に声を震わせる。

「そんなまさか……そうだったのか。だから師匠は……」

「どうしたんや？ 坊主」

「何かわかったのか？」

グランツェとクレイシスがアーレイに訊ねるも、アーレイには聞こえていないようだ。ぶつぶつと独り言を続ける。

「背景にオリーブの木、そして梟はくう、女神……これってもしかして！
アーレイはポーズを崩して興奮に叫ぶ。

「わかりましたよ、ミリアーノさん！ この壁画の示す意味が！」

終章 白羽使いのミリアーノ【1】(前書き)

お気に入り登録くださった方ありがとうございます。
心よりお礼申し上げます。

終章 白羽使いのミリアーノ【1】

神々の島の中心地は岩山から巨大な闘技場へと姿を変える。

陽の日差しに輝いていた湖は白塩の大地となり、そこが決勝戦の舞台となった。

闘技場の観客席はこの日の為に島に來たたくさんの渡航者で埋め尽くされ、割れんばかりの歓声をあげている。

最強と伝説、その使い手の一騎打ち。

観客の興奮は絶頂だった。

その中でも一際目につくのが中央スタンド。簡易ながらも豪華に着飾った審査員席が階位ごとに段を設けて並べられている。滅多に姿を見せないとされる世界最高指揮権を持つ教皇が一人、最上位席へ。そこから組織図のようにして高位枢機卿が顔を並べて座っている。

その近くの席にはファルコム皇帝の姿。燃えた服は着替えてか、真新しい衣装に着替えている。護衛と称して控えさせているのかファルコム兵士の数もかなり増えており、物々しい雰囲気になっている。その異常さに神殿側が警戒しないのは、やはり皇帝という肩書きで信用されている為か。

決勝戦開始の合図とともにリズの生み出した翼を持つ魔物 半馬半魚の海馬ヒツボカンボスは空高く舞い上がり、そして陽光を浴びて神々しく輝き、観客を魅了した。

剣の道具を使うことで魔物は攻撃性のある両刃の鳥の翼を手に入

れ、さらにオリンピア神話の知識を使うことで絵画のように美しく、より圧倒的な存在感を見せ付けたのだ。

観客の大半がリズの勝利を確信したといっても過言ではない。

まさしく最強という冠に相応しい完成度だった。

幻影とは違い、召喚された魔物の姿は臃おぼろではなくハッキリと姿を見せる。それが本物の魔物であることに皆誰も気付いていないのは、毎年優勝するリズだからこそ、それが出来て当然だと思われるせいなのだろうか。

大帝国の企む陰謀は刻一刻と音もなく静かに進行していた。

チームの待機場所となる闘技場の隅で。

グランツェ、アーレイ、そしてクレイシスが待機し、舞台に立つミリアーノを見守っていた。

舞台の上ではミリアーノが、竜の彫り込みの入ったダガーを手に固まっている。彼女の足元には薄く消えかかりそうな頼りない竜の幻影。

グランツェがアーレイに訊ねる。

「ほんまこんな方法で良かったんか？」

しかしアーレイはグランツェの話など全く聞こえていないようで、「はあ」と感嘆のため息をこぼして祈るように両手を組んで双眸を輝かせる。

「これが頂点に立つ者の実力……」

「敵に感動してどうするんや」

ぽくつとグランツェはアーレイの頭に拳を落とす。

「す、すみません」

慌てて謝るアーレイ。

クレイシスが口を挟む。

「アーレイが感動するのも無理はない。これが一流の知識者の実力だ」

「どういうことや？」

「リズの持つ剣には海を司る最高位精霊　海馬が宿っている。それに鳥の翼をつけることで伝説上の魔物　ペガサスを作り、泉の守護神にしたんだ。泉とはこの島で唯一の湖であるこの場所。

環境を味方につけることで相手の幻影の動きを封じ、さらに相手のイメージを崩壊させることで一枚の絵画を完成させる。それが決勝戦で競われる美術力だ」

「だったらそんなん、最初から白羽神具で勝負すりゃええやないか」
「今のままでは白羽神具は使えない。もっと別の何か方法で白羽神具の幻影が出せる環境にもっていかなければ」

ふらりと。言葉半ばでクレイシスが気を失いそうになって、後ろにあつた闘技場の塀に背凭れる。

「お、おい、ほんま大丈夫なんか？」

「魔法使いさん！」

心配するグランツェとアーレイを手で制し、

「大丈夫だ。それよりアーレイ、グランツェ」

「は、はい」

「なんや？」

「ミリアーノにもう一つ神具を造って渡してやりたい。今度は彼女にも簡単にイメージし易いものを」

「これ以上は無理でございます！」

クレイシスの腰に装着されていたポシエットからフレスヴァが勢いよく顔を出す。

「わたくしめが魔力を量産して補充しているとはいえ、二つの神具から　片や陣を刻んだ神具からは膨大な魔力が奪われ続けている状態なのでありますぞ！　そんな状態で神具造りなどすれば、体に一気に負担がきて命を落としかねません！」

「だからこそまだ止められるということなんだ。オレの魔力がまだ奪われ続けているならリズは完全に魔物を解放しきっていない。その前になんとしてでもリズをこっちのイメージに巻き込むんだ。環境さえ整えば白羽神具の幻影が出しやすくなる。」

「そうだろう？ アーレイ」

「アーレイは我に返って慌てて返事する。」

「は、はい」

「なんや、どうにかならんのか？」

「そんな時だった。」

乾いた金属音が闘技場に響き渡り、会場は水を打ったように静まり返った。

リズが隙をついてミリアーノに突進し、剣でダガーをなぎ払ったのである。

ダガーはミリアーノの手を離れ、弧を描いて地に突き刺さる。

その場に凍りつくミリアーノに、リズは剣の切っ先を突きつけた。

「これで分かったかい？ ミリアーノ・ラステルク」

そして、不敵に微笑む。

「優勝はもう諦めな」

「ミリアーノに残された選択は二つ。」

「負けを認めてこの場で退くか、それとも。」

終章 白羽使いのミリアーノ【2】

ミリアーノはリズを睨み据え、言い返した。

「いいえ、まだよ」

懐に持っていた白羽神具を取り出す。

「まだ一つ、使っていない神具が残っているわ」

観客から再び湧き上がる歓声。観客は興奮してか、席を立ってあらん限りの声援を送り始める。

その声援を受けながら、ミリアーノは覚悟を決めた。
残された最後の賭け。

この幻影術に成功すれば彼女と互角に戦うことができる。だがもし失敗すれば、この神具に命を吸い尽くされ死んでしまう。

不安はあるものの、もう一步も退けない状態だった。

この場を退きたくはない。

召喚神具を破壊できるのはこの瞬間だけ。

このチャンスを失えば、ミリアーノは故郷を失う結果となる。クレイシスも、もちろんアーレイもグランツェもただでは済まないだろう。

決勝戦前に立てた作戦。それは相手が攻撃してくるのを待つということ。でもそれだけではダメだとアーレイは言っていた。事前に相手のペースを乱れさせ、イメージを崩壊させることが大事なのだと。

そんな作戦も虚しく、すぐに窮地^{きふち}へと追い詰められる。それほど

相手の実力は並大抵のものではなかったのだ。

ふと背後からアーレイの叫ぶ声が聞こえる。

「ミリアーノさん！ 僕が指示したイメージだけを浮かべてください！ きつと大丈夫です！ 僕を信じてください！」

白羽神具の幻影を生み出すイメージは平和を意味した何かでなければならぬ。

それ以外は全て失敗となり、その時点で命を落とす。

汗ばむ手の平。高鳴る鼓動。

ミリアーノは静かに目を閉じる。

（きつと大丈夫）

大きく息を吸い、そして吐き出す。

脳裏を過ぎる仲間達の姿。その記憶が、声が、ミリアーノを勇気付ける。

ミリアーノはそつと目を開いた。

（信じよう、仲間を）

白羽神具が仄かに光放つ。

ミリアーノはオリーブの木を脳裏に描くと、白羽神具を持つ手を空高く掲げ、声を張り上げた。

「我が意に応えよ、白羽神具！」

.....。

何の反応もなかった。

観客から歓声が消える。

何の変化も起きない風景。何の幻影が現れるわけでもなく、ただそこに在るのは寂しい雰囲気だけ。

動かないリズ。呆れ笑うでもなく、警戒も解かない。

失敗したわけでもない。

だが成功しているとも言いがたい。

もし白羽神具の幻影に失敗しているならば、自分に何らかの苦しみが襲ってきているはずである。

ミリアーノはそろりと一旦、白羽神具を胸元に引き寄せて「おかしいな」と首を傾げて見つめた。

(アーレイ君に言われた通りにやっただけどなあ……)

何がいけなかったというのだろう。

ミリアーノはそんな疑問を抱くことだけに気を取られていて、リズの表情の変化に気付かなかった。

「風が……止んだ……？」

それは恐怖心を覚え、動揺に表情が揺らいだリズの心の乱れ。

「え？」

リズの呟きにミリアーノは顔をあげる。

そして初めて目にするリズの怯えた顔。

見えない異常。

何の変化もないはずなのに、たしかにリズだけが何かを感じ取っている。

リズは体勢を崩し、周囲に激しく視線を走らせた。

「な、なんだい、これは！」

闘技場に起きるざわめき。だがこれは観客が動揺し怯えているのではなく、リズの異常を心配するざわめきだった。

何の変哲もない場所で、リズだけがオロオロと忙しく辺りを見回している。

目に見えない恐怖。

リズはやがて、ミリアーノを恐れ戦くようにして後退し始めた。

「い、いつたい何を……何を出したんだい？ あんた……」

「リズ！」

クレイシスの叫びを聞いて、リズがクレイシスへと振り向く。

「今すぐ召喚神具の力を消せ！ お前の動揺で魔物が暴走しようとしている！」

空を見上げるリズ。

その上空にはペガサスの姿をした海馬が煌く刃の翼を広げ、リズを含めた広範囲に攻撃を仕掛けようとしていた。

終章 白羽使いのミリアーノ【3】(前書き)

お気に入りくださった方ありがとうございます。
心からお礼申し上げます。

終章 白羽使いのミリアーノ【3】

焦ったリズが召喚神具に命じる。

「お、お願い、消えて……消える！」

「無駄だ！」

特別席からファルコム皇帝が高笑いしながらそう叫んだ。その手にはリズの持つ剣と瓜二つの姿形をした陣を刻んだ剣。

「その魔物はな、私の命令しか聞かぬようになっておるのだ。なにせ我も使い手。本物の召喚神具は我が手元にある。」

リズよ。なかなかの道化役であったぞ。お前のお陰で白羽神具がどれほど役立たずかがわかったのだからな。もう頼むことは何も無い。お前はここで用済みだ」

「なっ　！」

突然の皇帝の裏切りにリズが愕然とする。

皇帝は召喚神具を空へ向けて掲げると、意気揚々と叫んだ。

「さあ、世界征服を始めようぞ！」

その言葉を合図に、物陰から道具屋のトカゲ男が姿を現す。そしてすぐ傍に座っていた白い聖衣をまとった老人　教皇の背後から忍び寄って羽交い絞めにし、喉元に短剣を突きつけた。

「貴様ッ！」

それに気付いた赤い聖衣をまとった枢機卿たちが拳を握って立ち上がる。

裏方に待機していた神殿兵が駆けつけ、辺りは騒然となった。

ファルコム皇帝の兵士たちが一斉に隠し持っていた武器を構える。

神殿側に生じる焦り。

手持ちの武器もなく、ましてや取り押さえる行為もできない。

この島で争い事をすれば石になる。それが彼ら神殿側の、唯一の頼りだった。

しかし、いくら待てどもファルコム皇帝達が石化することはない。訪れぬ制裁に神殿側の不安は増していった。

おろおろとする神殿側の対応に、ファルコム皇帝は高揚して笑う。「ふははは！ 愉快だ、愉快すぎる！ 期待したのか？ この島の制裁を。おかしいよな？ 確かにおかしいよな？ こんな状況になっても誰も石にならないのだからな。

不思議だよな？ さぞかし不思議であろう。その理由を教えてやろうか？

それは精霊の最高峰 海馬がいるからだ。あのペガサスの姿はカモフラージュ。今までそれに気付かなかったお前等は無能の馬鹿どもだ。

この島の精霊など恐るるに足りん！ 時は満ちた！ さあ世界よ、精霊どもよ！ 我の前にツラキ跪くのだ！」

皇帝が空を仰ぐ。上空に浮かぶ海馬に向けて、「我が意に応えよ、海馬！ 我に逆らう全てのモノを徹底的に破壊しろ！」

海馬は皇帝の意に従うように、両刃の翼をさらに大きく広げる。

悲鳴を上げる観客席。会場は大混乱に陥り、出入り口は逃げ惑う人の波でこった返した。

観客の悲鳴や子供の泣き叫ぶ声が響く中、その闘技場の中心である舞台の上で。

リスがミリアーノに駆け寄り、助けを求めるようにすがって懇願する。

「あなた、母親から聞いていないのかい？ もうあれを止められるのはあなたしかいないんだよ！」

肩を掴まれ激しく揺すられるも、ミリアーノはただ無言で首を横に振るしかなかった。

手持ちの白羽神具の反応は変わらず淡く光放っているだけ。

(どうして？ 何が足りないの？)

どうすれば魔物を封印できるのか。そもそも本当に、白羽神具にそんな力が備わっているのか。

不安だけがミリアーノの心を急かす。

見上げた空に、海馬の姿。

海馬の大きく広げた翼の一つ一つに鋭く光る両刃の羽根。あの羽根を無数に降り注がれれば、ここ一帯は巻き添えとなった人々で大惨事と化す。

終章 白羽使いのミリアーノ【4】

海馬が両翼を振り下ろしてきた。

両翼から放たれた無数の刃が一斉に上空から降り注ぐ。

ミリアーノは握り締めた白羽神具に視線を落とし、懸命に叫んだ。

「お願い……！ お願いよ、白羽神具！ 私の意に伝えて！」

それでもまだ目に見える反応は起きない。

ミリアーノは焦りと苛立ちに涙を浮かべた。もう一度叫ぶ。

「我が意に応えよ、白羽神具！」

「そんなんで間に合うか！」

クレイシスの叱責の声がミリアーノをハッとさせる。

庇うような形でミリアーノの前に立ちふさがるクレイシス。その手には聖杯が握られていた。

「クレイシス……」

彼に預けていたポシエットからフレスヴァが顔を出す。彼に向けて、

「たしかにこれしか方法がありませんが、二度目の召喚となると陣を奪われる危険性が――」

「それまでには魔力を断ち切る！」

「しかし――」

「時間がない！ 呼び出すから隠れてる！」

ひいとフレスヴァは身を縮めてポシエットの中に隠れた。

同時、不死鳥を召喚させる。

それは攻撃が降り注ぐギリギリの出来事だった。

不死鳥は降り注ぐ全ての刃を炎で包み込み、一瞬にして消滅させた。

そして海馬に向けて猛々しく咆哮する。

攻撃をかき消され、その始終を見ていたファルコム皇帝が憎々しげに召喚神具を握り締め呻く。

「おのれクレイシス……！ 魔法使いの分際で！」

手持ちの召喚神具を激しく地面に叩きつける。そして鋭く上空を見上げ、皇帝は海馬に指を突きつけて叫んだ。

「奴を殺せ、海馬よ！ 白羽ともども八つ裂きにしろ！」

声に応えて、海馬は再び大きく両翼を広げた。

「リズ」

クレイシスがリズへと聖杯を放る。

聖杯を受け取ってリズ。

「……な、なんであたいに？」

「召喚神具の扱い方はわかっているだろ？ オレは使い手じゃないから上手くコントロールできない。あとは任せたぞ」

そのままふらつき、クレイシスは地面に崩れ折れた。

「クレイシス！」

「クレイシス！」

声をかけるミリアーノとリズ。

地に手を付いてクレイシス。気絶しまいとしてか噛み締めた唇から血がつつたう。

「ミリアーノ」

名を呼ばれるも、ミリアーノは言葉を返せなかった。神具を上手く扱えない負い目にクレイシスから顔を背ける。

それでもクレイシスは言葉を続けてきた。

「オレ限界が近いのはわかっているはずだ。不死鳥じゃ海馬は倒せない。あとは頼んだぞ。お前ならこの騒動を止められる」

だがミリアーノは神具を持つ手を払って言い返す。

「無理だよ、私には！」

「まだ無理だと決まっていけないだろ？ 白羽の意に応えていないのはお前の方じゃないのか？ ミリアーノ。白羽神具に込めた魔力の流れが止まっている。幻影を解放しろ。そうしなければ意味がない」
「解放ならさつきからやっているわ、一次予選の時みたいに！ でも上手くいかないの！」

海馬が両翼を振り下ろしてきた。

鋭い刃が再び上空から降り注いでくる。

リズが目を鋭く変えてミリアーノの前へと進み出る。

「海馬はあたいが引きつける。時間を稼いでやるから、あんたはその間に白羽神具を成功させな」

ミリアーノにそう言い残して。

リズは聖杯を突き出すように構えて聖杯に命じた。

「意に応えよ、召喚神具」

瞬間、不死鳥が炎の翼を広げて地を飛び立ち、海馬に向かっていく。

不死鳥が残した風が三人の髪や肌を凪いでいった。

ポシエットからフレスヴァが顔を出してクレイシスに緊急を伝える。
る。

「これが最後の魔力ですぞ、魔法使い！」

「リズ！」

「あたいを信じな、クレイシス！」

不死鳥を抜群のコントロールで操り、リズは海馬の攻撃を全て消し去った。

それを見守った後、クレイシスは倒れて気絶し、フレスヴァも目を回して力尽きた。

リズがミリアーノに向けて言う。

「もうこの神具に魔法の補充はされない。不死鳥が消えるギリギリまで、あたいが何とか海馬の動きを封じておくから、あんたは早くその白羽神具の幻影を発動させな」

ミリアーノは手持ちの白羽神具へと視線を落とした。

「……」

自分を奮い立たせるように、それをぎゅっと握り締めていく。

戦意を取り戻した目でミリアーノは顔を上げ、上空の海馬を睨みつけた。

もう一度白羽神具を構える。

リズが微笑する。初めて会った、あの時のように柔らかく優しい声音で、

「大丈夫。あんたならこの騒動を止められる。きっと出来るよ」

ミリアーノは息を吸い込み、白羽神具に命じようとした。

まさにその瞬間！

ミリアーノはある光景を目の当たりにし、息を止めた。

上空では襲い来る不死鳥から地に落とされまいと両翼を広げて激しく抵抗している海馬の姿。

それがミリアーノの脳裏の中で二頭の火竜の姿と重なる。

蘇る、あの日の出来事。

この島にやって来て早々に降りかかったアクシデント。

自分の火竜とリズさんの火竜が衝突して、そして。

思い出す、リズさんが言っていたあの言葉を！

【この島は昔から平和の島として有名なのさ。精霊は生命あるモノを殺すことなんて出来ないからね。だからどうすれば争いが止まるか、みんなで考えるんだってさ】

ミリアーノは手中の白羽神具に視線を落とした。

(平和を意味した何か。そうよ、わかったわ！)
導き出した答えに白羽神具が反応を示す。それは強く光を放ち、
ミリアーノは白羽神具を空に掲げて叫んだ。
「我が意に応えよ、白羽神具！」

白羽神具から放たれた眩い光が、辺りを一瞬にして包み込む。

白く、それは気を失いそうなほど強く純白の光で。

その光の中でミリアーノはあるものを目にしてハツとする。

時を同じくして、ファルコム皇帝もその光の中で何かを目にして
悲鳴に近い声で驚愕の叫びを上げる。

「ば、馬鹿なツ！ あの樹を召喚しただと!？」

ファルコム皇帝のその叫びを最後に、全ての戦いは幕を下ろした。

戦いを終え、穏やかさを取り戻した闘技場の中心地で。

ミリアーノとその仲間たちは奉納式を迎えていた。

代表の枢機卿により、彼女たちの頭上に贈られるオリーブの冠。

観客席からは安堵に包まれた声と祝福を示す拍手が聞こえていた。
そんな誇らしげな舞台に立つミリアーノだったが、その表情は暗
く浮かなかった。

ミリアーノがふと視線を向けた先 闘技場の裏へと続く出入り

口付近 に、慌しく動く神殿兵の姿。

騒ぎを聞きつけて大勢集まった神殿兵によつて運ばれていく何体もの石像。

驚き顔のまま石化したファルコム皇帝、羽交い絞めの姿で石化した道具屋のトカゲ男、以下武器を構えたまま石化したファルコム大帝の兵士たちの石像だった。そして彼らに加担していた罪として神殿兵に連行されていくサラ、リズ、そしてクレイシスの姿。

それを目で追いながら呆然とその様子を見ていたミリアーノに、グランツェが軽く小突いて小声で知らせる。

「おい、白羽使い。前見ろや、前。失礼やろ」
「でも」

「今までが今までやったんや。俺らにはどうすることも出来へん」
フレスヴァがポシエットから顔を出してミリアーノに言う。

「そうでございますぞ、ミリアーノお嬢様。庇えばミリアーノお嬢様も同罪になってしまいます」

アーレイがミリアーノの服の裾を引いて、無言のまま目で訴える。前を見れば、いつの間にかそこに佇まれている教皇の姿。

ミリアーノは感情的になって、非情なファルコム大帝国の内情を伝えようとした。

だが、教皇はそれをそつと手で制し、静かに首を横に振る。
「どうしてですか……？」

訊ねるミリアーノに教皇は穏やかな声で語り掛ける。

「法は無意味に存在するのではなく中立にあるから法なのじゃ。法を犯した者は裁かねばならぬ。それはどこの国も同じじゃ」

その言葉にミリアーノは口を噤んだ。

教皇は暮れゆく空を見上げて「さて」と話を進める。

「陽が暮れるとこの島の精霊に迷惑がかかる。奉納式を進めよう」
運ばれてくる、ふかふかの赤いクッションが置かれた箱。教皇はミリアーノを促す。

「さあ。その神具をこちらへ」
奉納式。

優勝すれば優勝者は神具を奉納し、代わりに願い事を言うことができる。

ミリアーノは胸の前でぐっと白羽神具を握り締めていった。母の遺した白羽神具。

思い出が、ミリアーノの判断を迷わせる。

奉納を辞退することはできる。ただ願い事が言えないというだけでもそれだと何も変わらない。

もし、この白羽を奉納することで誰かの運命が変わるのならば。

ミリアーノは白羽神具を赤いクッションの上に載せると、そのままそつと手放した。

教皇が訊ねる。

「では、そなたの願いを一つだけ叶えよう」

ミリアーノは真っ直ぐに教皇を見つめると、迷うことなくハッキリと願いを告げた。

終章 白羽使いのミリアーノ【終】

帰り客でこつた返している港を遠目に見ながら。

ミリアーノは街の跡地となった場所に佇み、何かを待っていた。ポシエットから顔を出すフレスヴァ。様子をうかがうように恐る恐る声をかける。

「あのお、ミリアーノお嬢様？」

「何？」

「帰らないのでございますか？」

「うん。まだもうちよつとだけ、ココにいる……」

重く沈んだ声。何をするわけでもなく、ただずつと港を見つめ続けている。

「……………」

かける言葉が思いつかず、フレスヴァはため息を吐く。そしてしばらくして話題を変えた。

「ところで、ミリアーノお嬢様？」

「何？」

「わたくしめ、不覚にも決勝戦にてお嬢様の活躍を見守る前に気を失ってしまったわけですが。その……ちらりと人の話を耳にしたのですが、誰も白羽神具の幻影を見ていないと。」

ミリアーノお嬢様は見られたのでございましょう？ 白羽神具の幻影を。

決勝戦で魔物を消し去り、さらにファルコム皇帝をも石化した白羽神具の幻影。あの正体とはいったい何だったのでございますか？」

「……………」

ミリアーノはあの時のことを思い出して顔を俯け、気分を沈ませ

ていった。

フレスヴァが慌てる。

「み、ミリアーノお嬢様、その、失言でございました！ わたくしめは、けしてそのようなつもりで言ったのではなく」

「わかつているよ。フレスヴァ」

心配させまいとミリアーノはフレスヴァに向けてニコリと笑って見せた。

「もういいの。だってイベントは終わったんだから。白羽神具も奉納しちゃったし、どんな幻影だったかなんて気にしなくて仕方ないじゃない」

「ミリアーノお嬢様……」

心配するフレスヴァの表情。

ミリアーノにとって、それが何よりも辛かった。

そんな時。

「よお、白羽使いやないか」

急にポンと後頭部を叩かれ、ミリアーノは振り返る。

そこにいたのはグランツェだった。

ミリアーノは驚き目を瞬かせる。

「え？ グランツェ。あなたとはたしか」

奉納式を終えた後。

会場で解散し、アーレイは師匠と思わしき人が迎えに来ていてその人と一緒に帰り、そしてグランツェはお祖父さんのところへと戻っていったはずだった。

ミリアーノは訊ねる。

「お祖父さんはどうしたの？ まさかまた喧嘩でもしたとか？」

グランツェが目を逸らす。隠し事でもしているかのように後頭部を掻いてさりげなく言葉を誤魔化す。

「そんなとちやう。ちと寄るところがあったんや。今はその帰り。」

そつちはまだ帰らへんのか？」

問い返され、ミリアーノは元氣なく俯いた。

「うん……」

グランツエがからかうように目を細めてニイと笑う。顎に手を当て、

「ははーん。さてはここで白馬の王子様と出会うチャンスでも待つてんのとちやうか？」

ミリアーノの顔が一気に紅潮する。拳を握って全力で言い返す。

「ち、ちち、違うもん！ そんなんじゃないもん！」

「顔が赤いぞ、白羽使い」

「ひゃあっ！」

無自覚に赤くなった頬をミリアーノは両手で慌てて隠した。そして伏し目がちになって弱々しい声で言い返す。

「ほんとにそんなんじゃないもん……」

無言で。グランツエはくしゃりとミリアーノの頭を撫でた。声のトーンを落として真面目な顔で告げる。

「大魔法使いやったら待たん方がええ。アイツはファルコム皇帝と同じ無法の罪で牢獄から一生出られへん」

「え……？」

ミリアーノはショックを受けた顔でグランツエを見つめた。頬に当たった手が力なく下がっていく。

「でも私」

「教皇様も言つとつたやんか。『もし可能なら叶えよう』で。どんな願いでも叶えられないもんはある。ファルコム皇帝 いや、今は元皇帝となつてしもうた奴の片棒を担いでたんや。その真実を消すことはできん」

「違つの！ あれはあの皇帝に」

「無理やり担がされとつたとしてもや。無法は無法。罪つちゅーもんはそう簡単に消えるもんやない」

「……………」

ミリアーノは肩の力を落としてシユンと頂垂れていった。そんなミリアーノを励ますかのごとく、グランツェは彼女の肩を軽くポンポンと叩く。急に声を明るめるに変えて言葉を続ける。

「でもま、アイツは俺らの大事な仲間やもんな。んで、さっき奇遇にもアーレイと教皇様の飛空艇の前で鉢合わせてな、アーレイと一緒にに教皇様に免罪をお願いしといたから。三人でこんだけお願いしたんやから、もしかしたらアイツの刑も少しは軽くなるんやないんか？」

ミリアーノはそつと顔を上げる。

「グランツェ……」

「来年もまた、このメンバーで参加するんやろ？ 一人でも欠けたらイベントに出られへんやんか わぶっ！」

無言で、ミリアーノはグランツェの胸に勢いよく飛び込んで抱きついた。

グランツェが顔を真っ赤にして慌ててミリアーノを引き離す。

「お、おい白羽使い！ 何のつもりや、離れろって！」

「ほんとありがとう！ ありがとうグランツェ！」

「わかったから離れるや！」

その後。

グランツェに別れを告げて、ミリアーノは切り立った崖 島の

先端に腰掛けて足を投げ出しぶらつかせていた。

茜色に染まった夕焼けの空。

地上と違ってそこから見る景色は、とてもきれいだっただ。

もう誰もいなくなってしまった街の跡地。

港はまばらに人が残るくらいにまで減っていた。残っているといつても離港の準備をしている作業員の姿なのだが。

日が沈む前までにこの島を離れなければ、精霊の怒りを買うことになる。

それでもミリアーノはそこから動こうとはしなかった。ポシエットからフレスヴァが心配そうに顔を出す。

「ミリアーノお嬢様？」

「ん？」

「帰らないのでございますか？」

ミリアーノは膝を折り畳んで身を丸めると、そこに顔を埋めた。

「うん。あともうちよつとだけ……ここにいる……」

「納得。否しかし、早く帰らなければこの島の精霊から怒りを買うことになりませぬ。お嬢様をお守りして差し上げたいのは山々ですが、わたくしめにはもうほとんど魔力が残っておりませぬ」

「うん、わかってる」

「それにミリアーノお嬢様？ お忘れではないかとは存じてますが、しかし一応念のために申しておきますが、レイグルを港に預けたまままでございましょう？ レイグルもお嬢様がお迎えに来るのをきくと首を長くして待っているのでは

おっ？」

上空から舞い降りてくる火竜のレイグル。ミリアーノの隣に降り立つと、そこで羽を休める。

フレスヴァがレイグルに訊ねる。

「預け所からどうやってここに？」

レイグルはアイ・コンタクトでフレスヴァに意思を伝える。

納得するフレスヴァ。

「そうでありましたか。時間になったから放置されたのでありますな」

話題をミリアーノへと振る。

「ミリアーノお嬢様、レイグルも『帰ろう』と言っているではございませぬか。それでもまだ帰らないのでございますか？」

ミリアーノは顔を上げない。その状態のまま言葉だけを返す。

「うん、わかってる」

「ミリアーノお嬢様……」

心配そうに見つめるフレスヴァ。

夕日がミリアーノを優しく包み込んだ。

その光の中で、ミリアーノは顔を上げることなく相棒たちに問いかける。

「ねえ。フレスヴァ、レイグル」

「なんでございましょう？」

「私、何か変わったと思う？」

「……へ？」

きよとんとするフレスヴァとレイグル。互いに顔を見合わせる。

ミリアーノは言葉を続ける。

「これで何事なく家に帰ったらさ、きつとまたいつもの生活が始まっちゃうんだよね？ そうしたら私、何か変わっていると思う？」

「え？ いや、それはその……何と申し上げますか……」

気まづく口を濁すフレスヴァ。

レイグルも困ったように首を傾げる。

「大事なお母さんの形見、なくなっちゃった。それでもいいからってお願いしたのに、あの願いは叶えられないんだって」

「それは仕方の無いことでございます」

ミリアーノは暗く声を落とす。

「うん、わかってる。仕方が無いから何も変わらない。お母さんの時だってそう。あんなに神様にお母さんを連れて行かないでってお願いしたのに、何も変わらなかった……」

「で、ですがミリアーノお嬢様」

「何？」

「えっと……その……」

「あのね、フレスヴァ。実は私、決勝戦でお母さんに会ったの」

「へ？ な、なんですと？」

驚きに目を丸くするフレスヴァ。

「白羽神具の幻影、もしかしたらお母さんだったのかもしれない。白羽神具が放った強い光の中で私、お母さんを見たの。生きていた時みたいにとても穏やかで、優しく私に微笑んでくれて……」
言葉半ばでミリアーノの声が涙で詰まる。走馬灯のように蘇ってくる母の記憶。

会いたくて、でももう二度と会えなくて。

抱きしめてくれていたあの温もりを、もう一度肌に感じたかった。それでね、フレスヴァ。お母さんが消える間に私にこう言うてくれたの。

『もう泣かないでね』って……」

フレスヴァの目にぶわっと涙が溜まる。

ミリアーノはそつと顔を上げ、零れ落ちる涙を手の甲で拭ってフレスヴァを見つめた。

「ねえフレスヴァ。私、何か変わったと思う？」

「変わっただろう？ 白羽使いのミリアーノとして」

ふと背後から聞こえてきた彼の声。

ミリアーノはハツとして振り返った。

そこには小型飛空艇に跨ったクレイシスの姿。

クレイシスは懐から白羽神具を取り出すとミリアーノに向けて差し出し、

「ほら、忘れ物だ」

「え？」

「これがないとお前のことを『白羽使い』と呼べないだろう？」

ミリアーノは目に残る涙を拭って、彼の持つ白羽神具に指を向ける。

「え、でもそれ……奉納したはずの 待って。それ以前にどうしてあなたがそれと一緒に？ どういうこと？」

混乱するミリアーノを見つめ、クレイシスは意味ありげに微笑し

た。白羽神具に魔法をかけ、ミリアーノに向けて放り投げる。

「また機会があったらどこかで会おうぜ、白羽使いのミリアーノ」
その言葉を残し、クレイシスは小型飛空艇を走らせ、島から大空へと飛び立っていった。

「え、あ、ちよっ……!!」

呼び止めたが、彼の姿はあっという間に遠く彼方へと行ってしまった。

呆然とするミリアーノの前に、淡い光を帯びた白羽神具が舞い降りてくる。

それを両手ですくうようにして、ミリアーノは手の平に受け取った。

呟く。

「お母さんの形見、取り戻してくれたんだ……」

脱走の上の盗難だったのだと思えば、ミリアーノは心配に辺りを見回してみる。

しかし神殿兵の姿はおろか、追いかけてくる気配もない。

「……」

島にただ一人残されて、ミリアーノは呆然とする。

結局、奉納した物をどうやって取り戻したのかはわからなかったけども。

でも、なんとなくわかる。

彼は大空へと飛び立っていったのだから。 そう、自由な明日

へと。

ミリアーノは彼の飛び去った空を見つめてやんわりと微笑んだ。

安堵のため息とともに肩を撫で下ろし、

「あーあ、行っちゃったよ。何があったかぐらい話してくれてもいいと思うんだけどな」

そしてふと思い出す、あの時のこと。

ミリアーノは顔をしかめて、

「ねえ、フレスヴァ」

「どうなさったのでございますか？」

「クレイシスがさつき乗ってたあれって……小型飛空艇じゃなかった？」

「む？ たしかにそうでありましたな」

「墜落するんじゃないかしら？」

「あのおミリアーノお嬢様？ わたくしめ思ったのですが、彼は召喚するほどの強い力を持つ大魔法使いなのですから、もしかしたら浮石の力を使わず自分の魔法で飛んでいるのでは？」

「……………」

ミリアーノはようやくあの時彼が言っていた意味を知る。

フレスヴァが「やれやれ」とお手上げてため息をついた。

「これも何かの縁といいましたよ。これでまた、来年もこの島に来なければならなくなりましたな」

赤く染まる空に溶け込むようにして、ミリアーノは白羽神具を胸に秘めるとニコリと微笑んだ。

「お家に帰ろうっか。フレスヴァ、レイグル」

終章 白羽使いのミリアーノ【終】（後書き）

最後までお読みくださり、ありがとうございます。

貴重なお時間をこの作品にいただけましたことを心からお礼申し上げます。

継続してお気に入り登録くださいました十五名の方々、ご評価してくださった方、そして感想をくださいました池之月様。

本当にありがとうございます。

もうここで長く語るのも何ですので、これからは総合短編集にて作品の裏話を語りたいと思います。ですので、ご興味のある方はいつかそこでお会いしましょう。

また次回作にて皆様にお会いできることを願いまして、本編を終了しようと思います。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5177s/>

幻想 《 ファンタジア 》

2011年9月16日03時16分発行